

324
621

6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 6

始



29.4.27

324-62/

津田敬武著



神道起原論

大鐙閣刊

大正
9.5.15
内交

神道起原論序

神道は世界に於ける諸宗教の一つであるから宗教學上研究を要する
と言ふ迄もないが、今日迄科學的に研究した者が割合に少ない。海外
の學者としてはサトー・アストン・ハース・ノックス・ルボン・チエムバレー
ン等の諸氏が何れも神道に就て研究をしたのであるが、卻て我日本の學
者にして神道の歴史若くは教理に精通するものに至つては眞に寥々曉
天の星の如しと謂ふべきである。一體神道は佛教だの基督教と違つて純
粹なる日本民族の宗教であるから此點から見ても日本人に取つて研究
上一種特別の興味がある譯である。幸に文學士田中義能、同補永茂助、文
學博士加藤玄智諸氏が熱心に神道を研究して居らるゝから、余は竊に望

を其將來に屬して居る次第である。それに東京帝國大學に於て神道講座設置の計畫もあることであるから、今後は神道の科學的研究も多少の進歩をなすであらう。然るに神道の研究はさう單純でない。種々なる方面より之を考察するここを要するのである。即ち哲學・宗教學・社會學・史學・人類學・考古學等各種の方面より研究の歩を進めて其真相を明かにすべきである。中々一人の力の能くすべからざる所であるやうに思はる。近頃帝室博物館員津田敬武君、主として考古學上より神道を研究し、其結果を輯めて、一部の書となし、題して「神道起原論」と名づけ、携へ來りて序文を余に囑せられたのである。余も年來神道を研究して居る者であるから多大の興味を以て君の此著書を読讀したのである。さうして如何であらうかと思ふ箇處に就ては色々君の再考を促したのであるが、併

し考古學的方面の解釋に於ては却て幾多の暗示を受けたような感じがするのである。兎に角外に考古學的方面より神道を研究した人もないやうであるから、此著書は一種特色あるものとして學界に歡迎さるゝであらう、愈々印刷も出來上つたこと云ふことであるから聊か余の感想を述べ、之を卷端に題し、以て此書の序文となす次第である。

大正九年二月二十九日

文學博士 井上哲次郎識す

自序

我等は何としても、我等の生活から過去の考へを除き去る事は出来ない。若し吾人の生活に未来がないならば、人生の意義は果して何處にあるであらうか。苟も生を此世に受けたる吾人は、過去と未来に絶つべからざる關係を持つて居る。故に吾人の思想行爲一として發達の伴はざるものはない。されば現在の事にのみ没頭して將來の事を省みざる者があるならば、彼は誠に迂愚なる者と云はねばならぬ。彼は終に敗者たるを免れぬであらう。

歴史は人間が過去に行ひ、或は考へたる事實を現在及び將來の爲に研究する學問である。故に歴史的研究は、人生に最も必要なるものの一である。

本書題して神道起原論といふのであるが、我が國體の起原は神道と密接離るべからざる關係を持つて居る。即ち我が國體の由來は神道の起原を知らずしては到底理解することは出来ないのである。されば本書を以て日本國體起原論となすも不當ではないのである。要するに本書の目的は我が國體の由來を釋ね、其の本質的要素を研究して國家的理想の新なる建設に資せんとするのであるか

ら歴史的研究に属するのである。

由來宗教思想の發達には過去より未來に通ずる連續的關係がある。即ち各時代の宗教思想は其の前後の宗教思想と親疎何等かの關係を持つて居る。故に宗教に歴史的發展のあるのは勿論である。然しながら宗教は人類の精神的所産であるが故に、其發達の徑路は非常に複雑にして奥妙なる點が少くないのである。蓋し宗教は個人及社會の集合的精神を基礎として發達するので、其の勢力は實に社會に及ぼす精神的作用に存するのである。從て其歴史は自ら一般史と異なる方面が多い。

さて今日我政府は神社を以て宗教と認めて居ない。其に就て吾人は何等の異見はない。然し我が上代に於ける神社は宗教の一現象として研究せねばならぬ。即ち神道は如何なる宗教思想に胚胎して居るか。神道成立前の宗教思想は如何なるものであつたか。又其の外形は幾多の變化を蒙りしに^かはらず今日尙嚴として動かすべからざるものあるは、如何なる原質的思想の存在するによるか。又我が國家の成立と其の政治に對して神道は如何なる地位にありしか^か斯くの如きは本書の前半に於て解決せんとする重要な問題である。次に其後半に於ては専ら儀禮祭祀を研究して其形式の社會的必要と價値を發見せんとするのである。

要するに我國家の神髓であり、又あらゆる思想の國家的統一者である我が國獨特の神道其者の起原と本質を純客觀的立場から闡明せんとするは、即ち本書の主眼である。

聯合國對獨講和條約の調印されたのは本年の六月廿八日、既に三ヶ月餘、今や其批準を見んとするの秋に際し、本書を公にして我が同胞と共に我が國體の由來を考究して我が國將來の爲め、大いに考ふる所あらんとするは吾人の最も光榮とする所である。平和克復と共に國際關係に新たなる局面の展開されたる今日、我が國體の根本義を十分會得して益々邦家の興隆を計り、同時に世界的改造の爲め大いに活躍して人類向上の路を開拓せなければならぬ。本書若し此方面に嚮物かを寄與する所あらば吾人の光榮これに過ぐるものはないのである。

本書稿成りて後文學博士井上哲次郎先生の懇篤なる助言指導を得て修正補遺したる所が少くない茲に記して本書の博士に負ふ所の大きなを明らかにして深厚なる敬意と感謝を表するものである。更に又本書の爲めに序文を賜はりたるは最も光榮とする所である。

書肆大鏡閣支配人面家莊信君が進んで本書を出版されたるは、吾人の少からず感謝する所である。

本書の成る遠く溯つては、亡父津田敬之の靈に負ふ所大なり。彼が我が同胞の爲めに遺したる一書「萬法資料」の卷首に記したる其編纂の要領を讀むに今日の場合特に感慨無量なるものがある、左に其の文を載せて余が亡父に對する感恩の至情を披瀝したい。讀者幸ひに之を咎むるなくんば幸である。

大正八年十月

東京市外田端の寓居に於て

津 田 敬 武 識

凡そ宇内各國各種の政體を論せず、現在未來の立法官たる者よ、汝の職は、夫れ古今立法の原理を通曉して、世運と與に推移り、其風土人情を酌量し、以て剛を制し柔を助け、時に剛柔相推し、惡を禁し、善を保全するに在り、殊に兆民の重き負擔を輕減して、快樂を増進せしむるを以て汝の樂みとせよ、天道は汝の樂を樂とす、尙ほ汝に授くるに天法教歌を以てす、汝此歌心を大悟し汝の樂を光大にして日月の如く止まる無きを以てせよ。

よべば來るそむかば往る法の道

よべよとめよおのが心に

未達敬之 沐浴齋戒して謹み敬ひ稽首再拜

茲に天命を奉じて、兆民負擔の重きを輕減して快樂増進せんことの方法を、夙夜研究して怠たらず、故に各自其國に於て、輕減の方法を種々按出すると雖も、未だ宇内各國一般に通して、其良法を按出せず、否な一法あるも亦如何せん、區々分立せる各國相互に勢ひ輕減すべからざる情形あり、方今各國、陽には禮義親睦を旨として相交ると雖も、禮義親睦中、陰に鳩毒を置くに似たるのみならず、強弱相凌ぐの事實は、即各國兵備擴張競進しつゝあるを以て證明せり、抑々兵は凶器なり、

戦は危事逆徳なり、人類の慘毒なり、聖人君子の慚る所なり、時に聖人止むを得ず之を用ひたりと雖ども、近況各國濫りに軍備擴張致々として怠たらず、實に其底止する所を知らず、隨て兆民の負擔を只た増加するのみ、此慘毒は其道を以てせば除去し易きに、未だ之を除去せざるは眞に文明の瑕瑾にして開化進むとも、人文却て退けり、是れ易經に所謂文明にして人文に止るの聖世にあらざるなり、蓋し弱肉強食、實に腕力世界たるを免れず、嗟歎天道を恐れざる蠻族と何ぞ異なるを得ん乎、然ども未だ全く之を廢止するの時機に達せず、故に之を促がし、其時機を醸成するには、各國同盟して、相互に其兵備を同時に減縮するを以て各國主權者たる者の一大義務にして是即天命を奉じ天に代て天職を行ふ本分たり、若し之に順はず陰と陽とに論なく、反對の舉動を爲す者は、逆徳にして、其位置を永久に保持する能はざる者と自ら覺悟せざるべからず、既に其位置を保全せんと欲する者は、須らく本分を盡すべし、之を要するに各國同盟公法會を天地の成數五十五箇年間に、毎年、若くは隔年に相開き相會し、左の問題を審議討論し苟くも一朝一夕に議決せず總て慎重に漸次期するに所謂五五の年間に其功を積み、遂に萬國公法の嚴整完全を期成す可し、

一、天地の公道に基き、各國同時に兵備を減縮する方法

一、各國公同裁判法

一、各國仲裁々判法

右の初會は來る明治三十一年を期し、大日本帝國京都に於て會開するものと豫定す、次會は公會之を定む、該議員は、各國至高の主權者、及び其各主權者が選任する所の法律博士各五名づゝを以て組織す、但し人員は國の大小を論ぜず若し主權者にして事故ありて臨會し難きときは、其國を代表する全權大使を以てす、加之本會の目的に翼賛する宇内各國の志士仁人君子は、其所見を本會に建議するを得、夫れ斯くの如くにして遂に各國兵備を同時に輕減する時は、兆民の負擔或は十中の六に減少するに至らん乎、果して斯くの如く減少せば、實に兆民の幸福、何物か之に如く物あらん、嗚呼現在未來の立法官よ、夫れ汝の心を茲に潜め之を求めば、即「よべ來る法の道」に副ふものにして難事の業にあらず、夫れ特た茲に罷勉從事して止むなくんば、必ず其目的完結の功を奏するに至るを敢て保明す、尤も本按を補佐翼賛するものなくんばあらず、蓋し之を要するに間接に自然に補佐する一種の教法を勅ひ以て之を開宗するに在り、此開宗期は今より五十五箇年の春秋を経過するにあらずんば之を開宗し難き情形あり、蓋し各宗に一大革新の氣運既に相迫るも未だ之を看破する者なし、否な

之を看破する者あるも、亦如何せん直に之を革新せば、却て紛争擾亂を惹起するの虞あればなり、嗚呼各宗教の教師たる者、汝が奉ずる宗教のみに拘泥して、只愚夫愚婦を教導するを以て、汝の職とせず、進んで中人以上を教導する教法を専心公按工夫せよ、夫れ「よべは来る法の道」あれば是亦難事の業にあらざるを大悟せよ、蓋し立法編纂の要領も、亦上文の主意を補助するに外ならず、讀者夫れ之を諒せよ。

附言本會開設準備の爲め、同志と相謀遠らず、萬國公法會準備雜誌を發刊す

明治二十七年

未達九五海敬之謹識

神道起原論

目次

第一編 日本石器時代宗教思想	一
第一章 石器時代とは何ぞや	一
第二章 我が石器時代の文化	八
第三章 我が石器時代の民族	一一
第四章 我が石器時代の宗教的遺物	二三
第一節 土偶、土版、岩版	二三
第二節 石棒と石の崇拜	三二
第三節 赤色と宗教的遺物	四〇
第四節 結語	四二
第二編 神道の成立と原史時代の宗教思想	四三

第一章 時代の範圍及び研究材料……………四三

第二章 カミなる言葉の意義と神名の解釋……………四五

第三章 古史神話に現はれたる宗教思想……………四八

 一節 別天神及び神世七代諸神の神格……………四八

 二節 自然神話に現はれたる太陽崇拜と善惡二神の觀念……………五八

 三節 大國主神の國土經營神話に現はれたる宗教思想……………六三

 四節 蛇神崇拜の思想……………七一

第四章 文獻及び古墳に現はれたる靈魂觀と未來觀……………七四

 一節 墳墓の築造及び副葬品に現はれたる靈魂觀と未來觀……………七四

 二節 文獻に現はれたる靈魂觀……………九〇

第五章 天孫降臨の傳説と皇祖崇拜の意義……………九九

第六章 原史時代に於ける國事と宗教……………一三二

 一節 神武天皇時代に於ける國事と宗教……………一三二

 二節 崇神天皇以後佛教渡來前に於ける國家的祭祀と神道の成立……………一四一

 三節 神道の成立と國體の完成……………一五一

第七章 神道の祭祀と其社會化……………一六二

 一節 太卜、龜卜、夢告、探湯、及び畝……………一六三

 二節 原始的拜壇及び社殿の發達……………一七五

 一、神籠石の形式と其意義……………一七五

 二、磯城磐境の形狀と其目的……………一八四

 三、社殿の發達と其形式……………一九二

 三節 祭儀、供物、及び禱詞……………二〇〇

 一、供物の種類と其目的……………二〇三

 イ、青和幣、白和幣、麻及び木綿……………二〇四

 ロ、勾玉及び竹玉……………二〇六

 ハ、神酒……………二〇九

 ニ、穀物其他の供物……………一一三

 ホ、飲食物を盛りたる祭器……………一一四

 ヘ、祭祀に用ひられたる武器と神寶の意義……………一二六

目次

ト、神地、神戸……………二二二

二、祝詞と其發表の形式……………二二三

三、神道の祭儀として行はれたる音楽と舞踏……………二一九

第四節 齋王、祝部、其他の司祭者及び其社會上の地位と服裝……………二三四

第八章 天皇の稱呼及び天皇崇拜の形式……………二四七

第九章 結論、我國體の眞價……………二五三

挿畫 目次

第一圖 舊石器時代の彫刻……………五

第二圖 日本石器時代貝塚の圖……………九

第三圖 日本石器時代の土器……………一一

第四圖 アイヌ式土器 其一……………一八

第五圖 アイヌ式土器 其二……………一九

第六圖 アイヌ式土器 其三……………二〇

第七圖 アイヌ式土器 其四……………二一

第八圖 彌生式土器 其一……………二二

第九圖 彌生式土器 其二……………二二

第十圖 石器時代土偶 其一……………二四

第十一圖 石器時代土偶 其二……………二五

第十二圖 石器時代土偶其三……………二六

第十三圖 石器時代土偶其四……………二七

第十四圖 石器時代土偶其五……………二八

第十五圖 石器時代土偶其六(別版)……………對頁二八

第十六圖 土版其一……………二九

第十七圖 土版其二……………三〇

第十八圖 石棒……………三三

第十九圖 瓢形古墳……………七六

第二十圖 群集橫穴……………七七

第二十一圖 埴輪土偶……………八〇

第二十二圖 古墳家形石室……………八一

第二十三圖 家形陶棺……………八二

第二十四圖 六鈴鏡……………一一六

第二十五圖 神獸鏡其一……………一二七

第二十六圖 神獸鏡其二……………一一八

第二十七圖 蓬萊鏡(別版)……………對頁二八

第二十八圖 支那神獸鏡(別版)……………對頁二〇

第二十九圖 神人鏡(別版)……………對頁二二

第三十圖 龜卜……………一六六

第三十一圖 神籠石……………一八九

第三十二圖 出雲大社本殿平面圖……………一九三

第三十三圖 出雲大社……………一九四

第三十四圖 天地根源宮造……………一九五

第三十五圖 伊勢內宮社殿配置圖……………一九六

第三十六圖 伊勢內宮正殿平面圖……………一九七

第三十七圖 神明造……………一九八

第三十八圖 管玉 (別版) 對頁二〇七

第三十九圖 勾玉 (別版) 對頁二〇七

第四十圖 玉の緒の裝飾ある齋瓮 二〇九

第四十一圖 嚴瓮^{いづべ} 一一一

第四十二圖 酒槽 一一二

第四十三圖 裝飾付齋瓮 一一五

第四十四圖 石上神宮の鐵楯 一一八

第四十五圖 銅銚、銅劔 一二九

第四十六圖 出雲大社百番の節琴板を撃つ圖 一三二

第四十七圖 出雲大社にて新嘗祭の節使用したる火切板 一三九

第四十八圖 樽を掛けたる埴輪 一四三

第四十九圖 樽を掛け物を撃けたる態を現はせる埴輪(女子)(別版) 對頁一四三

第五十圖 樽を掛け物を撃けたる態を現はせる埴輪(女子)(別版) 對頁一四三

第五十一圖 伊太利石器時代の樽を現はしたる土偶 二四五

第五十二圖 大和法隆寺安置藥師像光背銘文 (別版) 對頁二四八

神道起原論

津田敬武著

第一編 日本石器時代宗教思想

第一章 石器時代とは何ぞや



人間の創造

特別創造説

抑、人類は何時、如何にして此地上に出現したのであるか。舊約聖書の創世紀には神土の塵を以て人を造り生氣を其鼻に嘘入たまへり。人即ち生靈となりぬとある。これ、もとより數千年前に於けるユダヤ人の信仰から生れたる想像説であるが、近く十九世紀の前半に於ても尙之と同様の考へが科學者の中に於てさへ唱へられて居つた。此考を特別創造説と云ふのである。此説によると、人類はもとより一般に動物の種、例へば牛、馬、犬、猫

第一章 石器時代とは何ぞや

神道起原論

津田敬武 著

第一編 日本石器時代宗教思想

第一章 石器時代とは何ぞや

人間の創造

抑、人類は何時、如何にして此地上に出現したのであるか。舊約聖書の創世記には神土の塵を以て人を造り生氣を其鼻に嘘入たまへり。人即ち生氣となりぬとある。これ、もとより數千年前に於けるユダヤ人の信仰から生れたる想像説であるが、近く十九世紀の前半に於ても尙之と同様の考へが科學者の中に於てさへ唱へられて居つた。此考を特別創造説と云ふのである。此説によると、人類はもとより一般に動物の種、例へば牛、馬、犬、猫

特別創造説

第一章 石器時代とは何ぞや

進化論と地質進化論の普及と宗教思想
地質學原理
種の起源

地球の年齢

など皆初めから牛、馬、犬、猫として特別に神の創造したるもので、固定且つ不變のものであると考へられたのである。然し今日に於ては斯様な説は一顧に値しないのである。今日では一般の動物は悉く下等動物から次第に進化して今日の形態を備ふるに至つたものであるといふのである。此説は學問上既に確定したる事實と見做されて居る。此法則を進化論といふのである。進化論は地質進化論と相俟つて實に社會全般の思想界に新紀元を開いたもので、殊に進化論の普及は、宗教思想に一大革新を與ふべきものである。進化論及び地質學は十九世紀の中頃に初めて現はれたる新しい學問である。地質學は今より約八十年前に英國の地質學者ライエル Lyell が「地質學原理」を著はし、進化論は六十年前にダーウ * Darwin が其の不朽の名著「種の起源」を發表したるに始つたのである。ライエル及ダーウ * 兩氏は學界の偉勳者にして實に又思想界に新轉回期を與へたるものである。

地球の年齢については、二千萬年或は數十億年などと非常に違つては居るが、兎も角もかやうなる概算が試みられるまでに地質學は進歩して居る。今日は未だ何人も斯の如き概

人間の初めに於ける地質時代の現はれたるに

人間はゴリラや猿や共同の祖先より發達せられたる原人との創造

算の可否を判断することは出来ないが、地質の進化したる階段、即ち地層の系統は凡そ始原代 Archaean era、太古代 Paleozoic era、中古代 Mesozoic era、近古代 Cainozoic era に區別されて居る。動物の遺蹟は始原代の地層からは見出されないが、太古代に入ると、俄かに數多の動物遺蹟が発見される。近古代になると餘程現世の動物に近いものが発見される。此時代の第四紀洪積世に入ると現世と同一の種が多くなり、人類も既に出現して居つた儘かなる踪跡があるのである。

さて人類は既に洪積世に出現して居たのであるが、勿論今日棲息せるゴリラや、黒猩猩が進化して人間に成つたのではない。然し人間と猿類、即ちゴリラや猩々は、遠き昔に於て共同の先祖から分かれ降つたといふ事は、最早科學者の信じて疑はざる所である。然し動物進化の過程に於て人類の創造は、科學者を以て見るも最大奇蹟といはざるを得ないであらう。其頭腦の非常なる發達は實に動物の靈長たる所以であるが、其形態の上からもかゝる頭腦の發達を助成したるものがある。人間は二脚で歩行し得ることの外に、其手は物を取り扱ふに非常に都合よく發達したることである。人間の手が敏活に動いて其心の命

進化論と地質学
進化論の普及と宗教思想
地質学原理
種の起源
地球の年齢

など皆初めから牛、馬、犬、猫として特別に神の創造したるもので、固定且つ不変のものであると考へられたのである。然し今日に於ては斯様な説は一顧に値しないのである。今日では一般の動物は悉く下等動物から次第に進化して今日の形態を備ふるに至つたものであるといふのである。此説は學問上既に確定したる事實と見做されて居る。此法則を進化論といふのである。進化論は地質進化學と相俟つて實に社會全般の思想界に新紀元を開いたもので、殊に進化論の普及は、宗教思想に一大革新を與ふべきものである。進化論及び地質學は十九世紀の中頃に初めて現はれたる新しい學問である。地質學は今より約八十年前に英國の地質學者ライエル Lyell が「地質學原理」を著はし、進化學は六十年前にダーウ・ン Darwin が其の不朽の名著「種の起源」を發表したるに始つたのである。ライエル及ダーウ・ン兩氏は學界の偉勳者にして實に又思想界に新轉回期を與へたるものである。

地球の年齢については、二千萬年或は數十億年などと非常に違つては居るが、兎も角もかやうなる概算が試みられるまでに地質學は進歩して居る。今日は未だ何人も斯の如き概

人間の初め
地球の上
に現はれたる
時代

算の可否を判断することは出来ないが、地質の進化したる階段、即ち地層の系統は凡そ始原代 Archaean era、太古代 Paleozoic era、中古代 Mesozoic era、近古代 Cainozoic era に區別されて居る。動物の遺蹟は始原代の地層からは見出されないが、太古代に入ると、俄かに數多の動物遺蹟が発見される。近古代になると餘程現世の動物に近いものが発見される。此時代の第四紀洪積世に入ると現世と同一の種が多くなり、人類も既に出現して居つた儘かなる踪跡があるのである。

人間はゴリラや猩猩と共に
猿の祖先と
いふ説
人間の創造
されたる原因

さて人類は既に洪積世に出現して居たのであるが、勿論今日棲息せるゴリラや、黒猩猩が進化して人間に成つたのではない。然し人間と猿類、即ちゴリラや猩猩は、遠き昔に於て共同の先祖から分かれ降つたといふ事は、最早科學者の信じて疑はざる所である。然し動物進化の過程に於て人類の創造は、科學者を以て見るも最大奇蹟といはざるを得ないであらう。其頭腦の非常なる發達は實に動物の靈長たる所以であるが、其形態の上からもかゝる頭腦の發達を助成したるものがある。人間は二脚で歩行し得ることの外に、其手は物を取り扱ふに非常に都合よく發達したることである。人間の手が敏活に動いて、其心の命

人類最古の遺物

するがまゝに運用されることは、智囊の異常なる發達を可能ならしめたる一大原因と考へられるのである。さて吾人は生物學的に人類の進化を知らんとするのではない。故に此問題については更に深く論及するの必要はあるまい。

地質研究の結果によると、人類最古の遺物は、洪積世の地層から發見される。洪積世の地層から發見される人類の遺物は、粗製石器又は骨角にマンモスや馴鹿を彫刻したるものである。此時代の遺物を人類學者、又は考古學者は舊石器時代の遺物といふのである。

舊石器時代の遺物には宗教的儀式に關するもの、又は死體に對して敬意を拂つた形跡あるものは發見されない。尤もダルビーラ Davilla 氏の如きは舊石器時代に於ける宗教思想の存在を認めて居るが、其説は未だ十分に實證されて居ない。唯彼等の彫刻は非常に進歩せるものである。即ち骨や角に刻んだ人物或は動物の形は驚くべく眞に迫つたものである。此點に於ては、新石器時代の住民は遠く及ばざる觀がある。舊石器時代はマンモスや犀などが徘徊しつゝありし時代で、陸地の形狀も現代とは相違して日本の如きも亞細亞大陸と陸地続きであり、又英國なども歐羅巴大陸と地続きであつたのである。

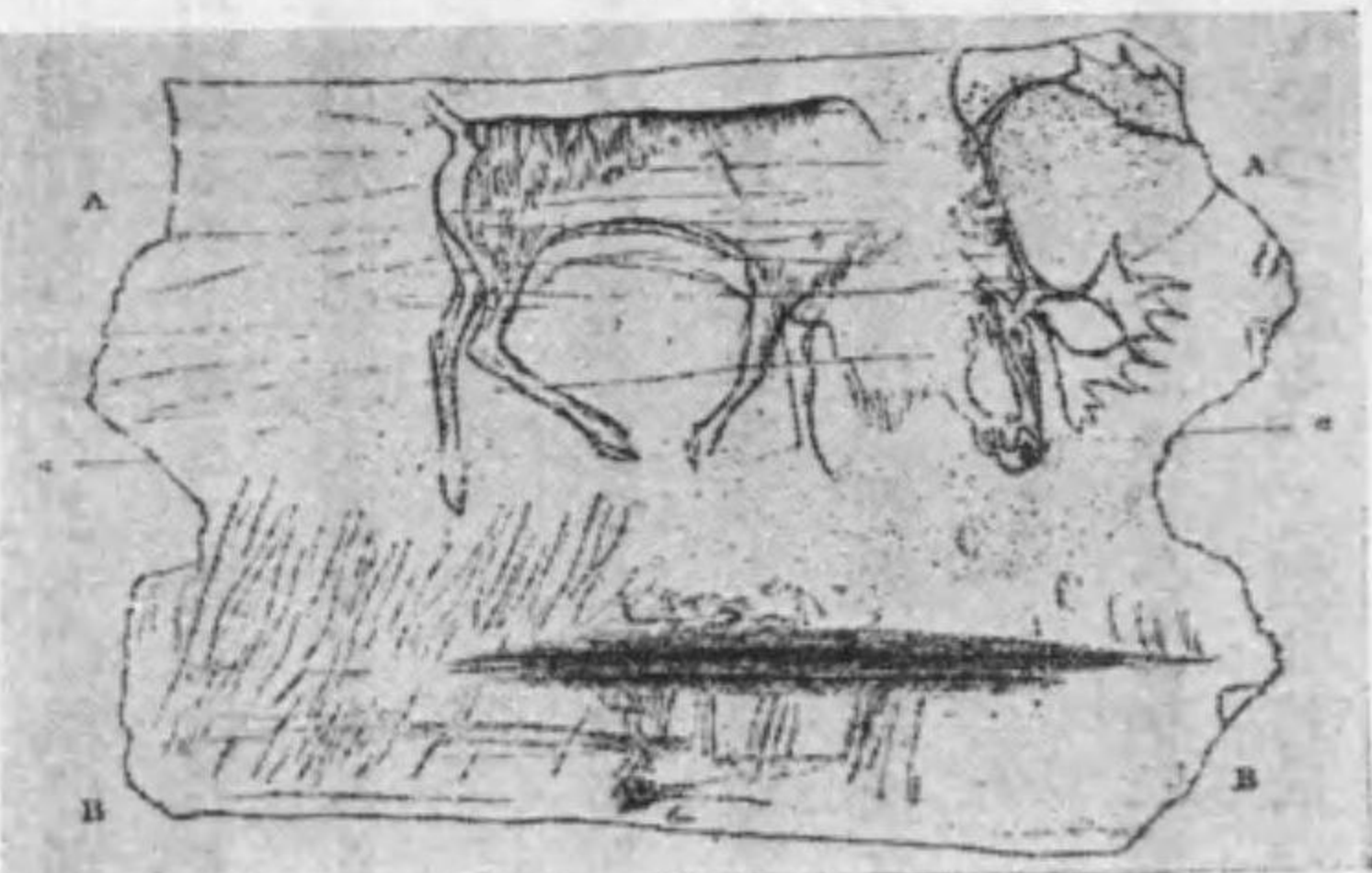
舊石器時代とその遺物

フランスの
ペルトン
の遺物を
表す

新石器時代

第一圖 舊石器時代の彫刻

馴鹿の角に馴鹿を彫刻したるものにしてスイツツル、ケスラーロック Kesslerock に於て發掘



From "Man of the old stone age, their environment, life and art." By H. F. Osborn. 1918. New York

舊石器時代に於ける人類の遺物を始めて學界に發表したのは、フランスの考古學者ブーシエ、ド・ペルテス M. Boucher de Perthes 氏である。彼はソムム Somme 河の沿岸地層からマンモスや犀の骨と、もに奇形なる石製品を發見した。千八百四十七年彼は、其の發見物を前世界の遺物として發表したのである。

已上は前世界即ち舊石器時代の遺物について一言したのであるが、吾人は進んで新石器時代に及ばねばならぬ。舊石器は洪積世に於ける人類の遺物であるが、新石器は沖積世の遺物である。沖積世は地層の最新時代で、其末尾は即ち現在である。此期は氣候水陸分布の狀態并に生物界が今日と同一程度に進化し

新石器時代の遺物

たる時代である。而して此時代にはマンモスや犀は全く滅亡して産しないのである。そこで新石器時代の遺物は現世界の遺物の最も原始的なるものと考へてよいのである。新石器時代の遺物にも、もとより精粗の別がある。粗より精に段々發達したる形跡は歴々徴することが出来るのである。此時代のものは、粗品であつても多くは研きを掛けた磨製品である。石器の外に骨器土器などもある。其末期のものは裝飾などを施し、頗る發達したるものである。

既に述べたる所によつて明かなる如く、石器時代といふは、石を以て利器原料の主要なるものとなせる時期で、人類の搖籃時代である。

考古學上に於ては、文化の系統を三時代に區劃して説明して居る。即ち石器時代、銅器時代及び鐵器時代である。

此三時代については、今より二千年前既に羅馬の大詩人ルクレチウス Lucretius が想像して斯くいつて居る。人類は其爪や手や齒以外に道具の使用を知らなかつた時代を脱してから石、銅、及び鐵の時代を経過したるものであると。

考古學上の三時代

羅馬の詩人ルクレチウスの説

石器時代銅器時代鐵器時代

然し此三時代の説が廣く世に行はれるやうになつたのは、凡そ八十年前スイツアールンドの湖の底で、デンマルクの坭炭層に於て遺物の發見されたる状態に基いて居る。兩所とも上部は鐵器を出し、中部は青銅器を出し、下部は石器を出したのである。是に於て人類は石器時代から銅器時代に移り、銅器時代から鐵器時代に移つたものであるといふのである。然しながら人類は必ずしも三時代を経過するものではない。現に我が國の如きは、石器使用の時代に次いで直ちに銅器及び鐵器の使用が一時に大陸方面から輸入されたのであつて、石器時代から次第に發達して銅器時代を経て鐵器時代に進んだのは頗る趣が異つて居るのである。要するに石器時代の後には金屬時代が續いて發達するといふ事だけは確實である。

石器時代と云つても、これを人類一般の上から見るときは、年歴の意味はないのである。例へば日本民族のみについていふ時は、石器時代は金屬時代よりも古いが、或野蠻人は今日尙石器を使用しつゝあるのである。故に諸地方諸民族を通じて石器時代は、今から何年程以前であるといふことは出来ないのである。

人類初期の文明は、埃及のナイル河口と西南亞細亞のチグリス、ユーフラート兩河の沿岸邊りに興つたものと考へられて居るが、埃及の第一王朝は凡そ五千年前既に組成されて居つた。而して此王朝時代の前は即ち先史時代で、少くとも今から五六千年前のことである。此時代は原始的酋長の時代で、當代の遺物に石器土器の類がある。然るに日本の石器時代の末期は古墳時代に接続するもので、比較的近世に屬し、凡そ三千年位のものであらう。前世界の動物の骸骨、例へばマンモスの骨などは往々我國からも發見されるが舊石器の發見されたことはなく、主として新石器時代のものが發見されるのである。

要するに我が石器時代の住民は新石器を使用したる民族で、彼等の生活状態を知ることにはやがて我國體を理解するに必要な準備である。故に又我が古代史の出發點であると同時に我が宗教思想史の發足點である。

第二章 我が石器時代の文化

我が石器時代の遺蹟は到る處に發見される。郊外の田圃を散策する時などに少しく注意

第二圖 日本石器時代の貝塚
常陸國稻敷郡安中村土浦字陸平貝塚



東京帝國博物館藏 長原孝太郎氏寫生

するならば、耕地の一隅或は畔のほとりに貝殻が層をなして露出して居ることがある。

我が考古學者は斯の如き遺蹟を貝塚といつて居る。貝塚は石器時代の民族が食用に供した貝殻を捨てたる場所である。英國の考古學者は貝塚を Shell mound といつて居る。貝塚からは主として土器や土偶や骨器が發見される。又土器が聚合して發見されることがある。俗に之を土器塚などといふ。石器は貝塚や土器塚からも發見されるが、地下に挟まり、或は地上に散在して發見される事が多い。又稀には彼等の住居の遺蹟である竪穴から發見される。斯の如き遺蹟の所在は、東京

帝國大學人類學研究室から發行されたる「日本石器時代人民遺物發見地名表」を見るとよく判る。此表によると大正六年までに學界に報告されたる遺物發見の箇所は五千八百八十八ヶ所ある。

今遺物の種類を挙げると、石製品では石皿、石臼、石槌、打製石斧、磨製石斧、石鏃、石錐、石槍、石匙、石小刀、石庖丁、石鈷、石棒、岩版など重なるもので、又土器には容器、土偶、土版等がある。其他骨器、角器、貝器或は玉類も稀に發見される。

竪穴は、淺い圓形の穴で木の柱を掘り立てて周を圍み、屋根は草などで覆ふたものと思はれる。これは彼等が一種の穴居民族であつた事を示すものである。鳥井龍藏氏の報告によると、北海道の色丹島のアイヌは、近年まで斯様な竪穴に住居して居つたもので、多分石器時代に於けるアイヌ民族の遺風と察せられる。

さきに一言したる貝塚は主として海岸線に於て發見される。此事實は當時海濱に近く住居をトして居つた土族が盛に貝類を食つたことを證するものである。然し貝塚からは、往々魚類、鳥類の骨も發見されるから貝類以外魚鳥獸の肉も食したものである。其他果實の

我が石器時代遺物の種類

石器時代の土器の模様

第三圖 日本石器時代の土器の模様
常陸國稻敷郡高田村椎塚發掘



東京高島多米治氏藏

類を食つたことは、敢へて説明を要しないことと思ふ。

土偶の形狀模様等によると、彼等は筒袖の上着を用ひ、腰部には股引様のものを著たものと考へられる。

土器の類は、其種類が頗る多い。而して土器に應用されたる模様には、第三圖の如くなか／＼精巧なるものが少くない。玉類は彼等が佩用したるものと思はれる。土器の形狀模様等より察すると、其裝飾的藝術は頗る進歩せるものである。

之を要するに、當時は尙ほ文化幼稚にして金屬器の使用を知らざる時代ではあ

るが、石器時代としては恐らく最も進歩せるものであらう。蓋し其石器の金屬に近似せるものあると其模様の美術的なることは、既に金屬器の文化を入るゝに十分なる發達を成したるものと察せらる。

さて次で起る問題は、斯の如き遺蹟と遺物は如何なる民族によつて吾人に遺されたのであるかと云ふのであるが、吾人は章を新たに於て研究する所あらんとするのである。

第三章 我が石器時代の民族

人類學者ならざる吾人と雖も、東北人と關西人は、其體質及び氣質に於て頗る違つて居る事に氣付くのである。東北人に毛深い人が多いのは何人も目に付くであらう。アイヌの毛深い事は誰しも知つて居る所で、昔は毛人などと云つたのである。東北地方には其外、體格に於てもアイヌに酷似せる人が往々見受けられるのである。素人觀察にも其間に於て多少人種關係が想像されるのである。

日本人と南洋の土人

又近時洋服を著けたる南洋土人の觀光團が、我が海軍士官に引率されて市中を徘徊する

東北人とアイヌ種族

日本人とシブキム國の土人

を見るに、日本人と伍して其類似の甚しきに、吾人をして驚かしめるのである。

チベット、ニポトル、ブータン及び印度の四國に包圍されたる山間に、英國の屬領シブキム國 SIKKIM 國がある。邦人の此國に入るものは、其土人の邦人に酷似せる、恰も故郷に歸りたる如き感に打たるといふ。

素人の外觀的觀察に於て既に斯の如く吾人と同種の民族が亞細亞大陸及び南洋諸島に散布せる如く思はしむるのである。

翻つて我が日本民族の由來を考ふるに、吾人は皆天孫民族で、皇孫に従つて此國に天降來つた民族であると信じて居る。然しながら思へ、天孫降臨は先住民族を悉く一時に剿滅して彼等と入れ代つたのではない。彼等を同化融合したのである。此事は後編に於て詳細に論せんとするのであるが、要するに天孫民族は我が國に於て創造されたる民族である。是に於てか、我が先住民族即ち石器時代民族研究の意義が理解されるであらう。

我が石器時代民族の研究に四の方法がある。歴史的、人類學的、言語學的、及び考古學的研究即ち是れである。人類學的及び言語學的研究は未だ十分に學術的調査が行はれて居

天孫民族と先住民族

石器時代民族研究法

石器時代に於けるアイヌ

ない。現今に於ては歴史的研究と考古學的研究が相俟つて稍重きをなして居る。以下述ぶる所は即ち其研究を概括したるものである。』
我が石器時代に蝦夷、即ちアイヌ種族の居つたことは、總ての學者の一致する所であるのみならず、石器時代の遺物中には、現に北海道のアイヌが作れる模様と同一系統と認むべきものも少くない。又これを古書或は地名に徴するも、アイヌ民族が、嘗て昔我が本島の東部大半を占領して居つたことは、歴々として疑ふべからざるものがある。

坪井博士のコレボックル説

アイヌの前にコレボックルと稱する民族が住居して居つたといふことは、嘗て故理學博士坪井正五郎氏によつて創唱せられたる所であるが、此説はアイヌの口碑を唯一の基礎として立てられたるものなるが故に、其論據甚だ薄弱にして終に學者の首肯する所とならなかつたのである。醫學博士小金井良精氏は坪井氏の説に反對して、コレボックルも畢竟アイヌ種族であつて、此種族は東北は勿論、本島より四國九州に蔓延して居つた我國唯一の先住民族であると云つて居る。グリフィス、モールス、及びミルン等の諸氏も同説を發表して居るが、我歴史家及び考古學者は此説に賛同しないのである。

小金井博士のコレボックル説及びアイヌ説

三宅博士の所謂石器時代の最古の土蕃

土蜘蛛國

文學博士三宅米吉先生曰く、

「吾人の祖先が此土に來りし以前、又蝦夷が北方から入り來つた以前、既に全土に蔓延して居つた人種がある。余は之を土蕃といふ。皆穴居の蠻民で古書におしなべて土蜘蛛といつて居る。其字義は何れにもせよ、穴居の蠻民を指した名であることは明である。土蜘蛛は又國巢とも八擲脛とも云つた。或は又佐伯とも云つたであらう。本邦諸國に現存する洞穴で、曾て人の之に住んだ形跡のあるものは、大概皆此土蜘蛛の穴居した遺蹟であらう。土穴の中に遺物はないけれども、土穴の近傍にある貝塚又は丘陵からは多くの土器や石器が発見される。土蜘蛛は我國史の初めに於て既に此土に住居して居つたもので、其の時代は略ぼ介墟の出來た時代と一致して居る。乃ち土穴と介墟とは時代と場所とに於て相接近して居るものである。抑吾人の先祖が、此土蜘蛛を討ち從へて此土を領したものであることは、古書に著明なる事實であつて、其土蜘蛛の蝦夷でないことも著しいことである。又土蜘蛛は蝦夷を逐ひ退けて其後を占めたものと思はれない。却つて曾て遠く北部にまで擴つて居たものが、蝦夷の爲めに逐ひ退けられて、我が國史の始

めには常陸以南にのみに限られたもの、様に思はれる。これ余が土蜘蛛を以て我國の土蕃と爲す所以である。此土蜘蛛は穴に棲み鳥を獵し、魚介を漁り、石器土器を使用して居つた土俗で、今より三千年内外の古へ我島中に蔓延して居つたものである。而して此土蕃類はマレイ種、又は類似黒奴ならんかとの想像説を有して居る云々」

此説は三宅博士が明治十九年其著「日本史學提要」に於て論せられたるもので、今日尙學者の敬服する所である。博士の説によると、我が石器時代には、アイヌ種族の前に土蜘蛛と稱する土蕃が全土に蔓延して居つたのである。然し此説を裏書すべき材料は、博士所論の當時はもとより、今日と雖も甚だ不十分で、何人も此説の可否を判断するに躊躇するものである。唯アイヌ以外の或土蕃の居つたことだけは、現今考古學的材料の新發見によつて證明されるのである。要するに博士の所論は、興味ある暗示を包藏せる臆説として尊重すべきものと思ふ。

近來喜田博士は、古書及び遺蹟遺物により此方面の研究に従事して、「倭人考」其他の題目を以て「歴史地理」誌上に、最近は専ら「民族と歴史」誌上に於て續々發表されつゝある。

喜田博士の倭人考

我が石器時代の民族は皆南方より來りしといふの説

其研究は未だ完成されざるが故に、詳細を知ることには出来ない。然し現今に於ける博士の所論の大意は、古史に現はる、蝦夷、蝦狄、毛人等は東方民族で、アイヌ種族に屬し、南方より來りたるもの、如く、又西方民族の名稱の古史に見ゆるものには隼人、熊襲、肥人、薩人、多禰人、夜句人、阿麻彌人などある、名稱は斯の如く相異して居るが、畢竟同一種族で、東方アイヌ民族に遅れて、同じく南方から來た先住民族で、天孫種族と接觸しつゝ、同化せられ、古墳からも往々發掘される所謂土師の土器(彌生式土器ともいふ)を残したるものであらうといふにある。

此説によると、アイヌ式の土器を造したる民族も、土師の土器を造つた民族も、彼等が造つた土器の形式は異つて居るが、共に南から來た所の民族であらうといふのである。最近の調査によると、アイヌ式ならざる土師の土器が往々古墳から發見される。此事實によると所謂土器を使用した民族は、天孫民族と接觸したる後と雖も尙此土器を使用しつゝあつたものと想像されるのである。然しながら其前後の關係は尙未解決の問題である。

京都帝國大學考古學講座擔任の濱田博士は喜田博士と稍所見を異にし、大正七年同學發

行の考古學研究報告第二冊に左の意見を發表されたのである。

余輩は石器時代遺蹟の考古學的研究の結果による人種説を述べんと欲す。關東、東北の貝塚が所謂アイヌに遠き小人「コロボツクル」の造る所に非ずしてアイヌの祖先(若しくは近縁の人種)のものなりとする小金井博士の所説は夙に余輩の信じたる所にして、特に土器の紋様よりして卑見を述べたることありき。余輩は現今に於ても大體に於て此説を信じて未だ之を疑はず。然れども當時小金井博士其他の研究せられたる際に於ては、彌生式土器を出す石器時代遺蹟は未だ發見せられたるもの殆ど無く、學者の注意を促すことなかりき。故に日本全國の石器時代の遺蹟は皆此等東北地方のもの同一人種の殘したるものなるべしとの考を抱くもの多かりしは怪しむに足らず。然るに

第四圖
一其 器 土 式 ヌ イ ア

見發原河下村川倉佐郡澤贈國中陸



藏館物博室帝京東

第五圖
二其 器 土 式 ヌ イ ア
見發町宮手區權小國志後



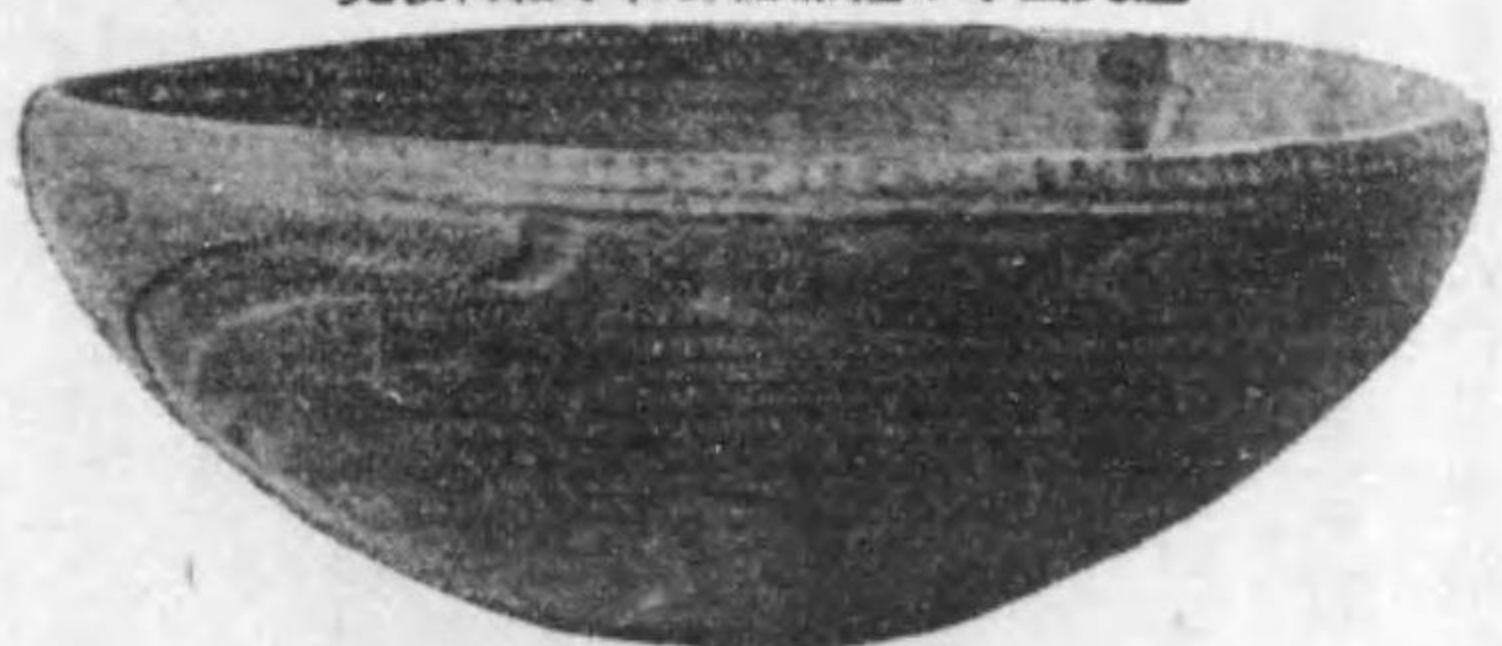
藏館物博室帝京東

間に於ける距離は、之を寧ろ人種的差異に本づくものなりと思惟するに躊躇せざるなり。加之、原日本人の日本島に分布せる時代をより古く認めんと欲する余輩は彼等がアイヌと同じく、又石器時代の文化状態に在りしものなりと信するを以て、此彌生式土器の石器發見遺蹟を以てアイヌ系以外の「原日本人」の所産となさざるを得ず。此點に於ては余

茲に輓近諸學者の注意によりて漸次認められ來れる新事實は、彌生式土器を出す石器時代の遺蹟なり。此者は其石器に於ても多少の差異を繩紋土器遺蹟のそれとの間に存するも、其土器に於ける差異は頗る顯著なり。余輩の如く原始繩紋土器の存在を立してアイヌ繩紋土器も彌生式土器も共に此種のものより派出せりとする者と雖も、已成のアイヌ土器と原日本人の彌生式土器との

土器の系統
異人種の差

第六圖
アイヌ式土器
三其 見發内腰十村野居郡輕津中區奥陸



東京帝國博物館藏

輩は全く鳥井龍藏君等と其意見を同じくするものにして、短頭型の人骨が此等遺跡より
發見せられて、東北關東地方の繩紋式土器を出す遺蹟よりは中頭型のアイヌ的人骨を
出すことは、彼是相參考して吾人の所説を確むるも
のあるに似たり。

尙ほ又同書の土器系統に關する博士の所見を見
るに、博士は、喜田博士がアイヌ式土器と彌生式土器
の差異を全く人種的の相異に歸し、彌生式土器を以て
アイヌ民族の後に渡來したる他の民族の所産と認めら
れたるに反し、土器其者の系統より論ずるときは二者
何れも原始繩紋土器より派生したるものであるが、偶、
異りたる民族の渡來によつて相異なる様式が出来上つた
ものと云ふにあるが如く察せらる。されば人種的差異
を認むる點に於ては、結局兩博士ともに同説である。

彌生式土器
使用民族の
分布

第七圖
アイヌ式土器
四其 見發村坂松郡村田國城磐



東京帝國博物館藏

は、此彌生式土器を製造したる民族は新石器時代に於て日本島の西南部より朝鮮滿洲等に
も擴がり、遂に日本人種の大本をなせるもので、アイヌ民族より古く日本に棲息したりし
人種ならんと云はれて居る。

要するに考古學上先住民族を論ずるに當りに最重要なる遺物は土器であるが、何人も其
第三章 我が石器時代の民族

想ふに濱田博士は
土器の系統と人種的
系統とは區別して考
ふべきもので、土器
の系統は即ち人種的
系統を示すものとは
即斷すべからずとい
ふにあるが如し。

更に又濱田博士

土器に二種の區別あるを認める。即アイヌ系土器と土師の土器(彌生式土器)とである。而て此

第八圖 彌生式土器一其
河内中國河内高安村恩智發見



京都帝國大學考古學研究所報告第二册所載

第九圖 彌生式土器二其
尾張國熱田貝塚發見



等二種の土器の相異は其起原は暫く別として、人種的差別に本くものと認めらるゝのである。

アイヌ民族
彌生式民

さて其先住民族の一としてアイヌ民族の存在して居つたことは何人も疑はざる所である。次に三宅博士の所謂土蕃、或は最近考古學者の所謂彌生式民族は、アイヌ民族とは異なる他の民族で、其如何なる人種であつたかは不明であるが、アイヌ以外の民族であつたことは、何れの學者も認めるのである。唯其起原とアイヌ民族との關係に於て異論あるのみである。

最後にアイヌ民族及び所謂彌生式民族が、原史時代に入りて我が國民の組織に取り入れられたのであるから、此等民族の思想が我が國民思想の形成に關係を持ち、殊に其宗教思想に對しては特種の關係あるべきことを考察せざるを得ない。

第四章 我が石器時代民族の宗教的遺物

第一節 土偶、土版、岩版

土偶は古墳から發見される埴輪土偶と區別して貝塚土偶ともいふ。大概粗製で其高さは普通五六寸内外であるが、稀には一尺位のもある。内部は充實せるものと空虚のもの

土偶

土偶に現は
れたる男女
の區別

第一編 日本石器時代宗教思想

二四

ある。其形態は大體に於て甲乙の二種に別つことが出来る。甲は頭髪部比較的簡單で、面部には眼鏡様のもの（遮光器ならんともいふ）を著け、口邊には間々裝飾を加へ、衣は筒袖で胸部を開き腹部は連つて、シャツ形をなして居る。袴は膨れてタツケに似て居る。乙は頭部比較的複雑で、面部は、黥飾あるもの或は覆面様のものを著けたるものがある。衣は筒袖で前の合せ目は全長に互つて居る。股引は細く脚に密著して居る様に現はされて居る。乙の乳房部は概して著しく突出して居る。又其腹部は通則として膨れて居る。之を

第一〇圖
石器時代土偶一其
下總千葉郡六通貝塚發見



東京帝國博物館藏

る。乙の乳房部は概して著しく突出して居る。又其腹部は通則として膨れて居る。之を

土偶に現は
れたる老幼
の差別

第四章 我が石器時代民族の宗教的遺物

二五

第一一圖
石器時代土偶二其
陸奥西津郡館岡村發見



東京帝國博物館藏

のは妊娠の状を示せるものかと思はる。土偶の姿勢は直立のものが最も多い。然し中腰のもの、又稀には腰掛けて居るものもある。男女の區別の外、老幼の差別も認められる。更に其首部に重きを置いて分類すると、目、鼻、口等の自然に近いもの、山形の輪廓内に異様な目鼻のあるもの、木兎キウ或は稀には猫に似たるもの、又は非常に大なる眼を備へ、兩

要するに甲は男子の形で、乙は女子を現はせるものであらうと察せられる。乙の腹部が膨脹して居る

土版

眼以外鼻口等の無きもの等種々ある。

土版とは長方形又は橢圓形をなせる葉書大の素焼製で厚さ五分程ある。而して其兩面には彫刻模様がある。土版の或ものは明かに目鼻がある。扁平なる土偶様のものもある。土

偶の腹部に屢々

現はされたる縦

の凹線に類する

ものもある。是

等の諸點を考へ

ると土版は土偶

の變形したるも

のである。岩版

は土版と同一の

ものであるが其

第二一圖 石器時代土偶三其
見發塚貝通六郡葉千國總下



東京帝國博物館藏

岩版

土偶の目的

第一三圖 石器時代土偶四其
見發塚貝山平郡葉千國總下



東京帝國博物館藏

之を宗教的遺物として認めて居る。其宗教的遺物たる點に於ては吾人も同説である。然し如何なる點に於て宗教的であるかといふに就ては、尙研究を要すべきものと思はる。

抑、原始民族の有する宗教は、民族宗教 Ethnical Religion である。一種族の有する信仰は同一であつて、各自に於て選擇の能力を持つて居ないのが普通である。然るに我が石器時代の土偶は上に述べたる如く、其形態に老幼男女の區別あるのみならず、其面貌は事ろ千差

偶土代時器石 圖五一第

(六 其)

掘發越腰字大町子丸郡縣小國濃信

後

前



(藏館物博室帝京東)

オシリス神

圖四一第
五其 偶土代時器石
掘發駒黒上村駒黒郡代八東國斐甲



藏館物博室帝京東

萬別といひ得るのである。又同一の遺跡に於て數個以上發見されることもある。若し土偶が超自然的の神として崇拜せられたるものであつたならば、其形態は少くとも或一定の特徴を備へて居るべき筈であるを考へられる。

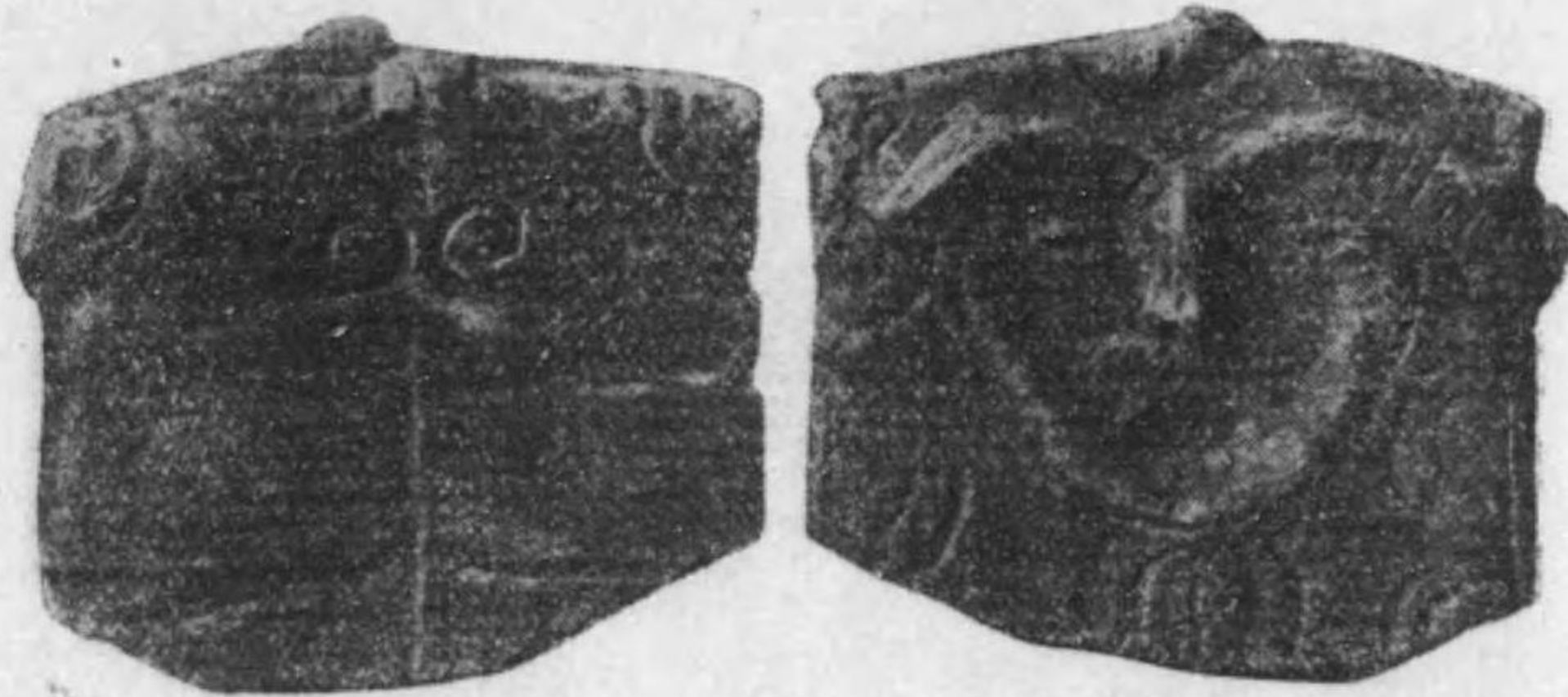
神であるが故に常に太陽の標象を頭上に戴いて居る。然るにかゝる標象もなければ神像と

例へばエジプトのオシリス神は太陽を神格化したる

土偶の目的
に就いて二
様の解釋

土偶は死者
の像ならん
かの

第一六圖
土版
其
下總國狹島郡弓馬村馬寄發見



裏 表

東京帝國大學人類學部教學室藏

第四章 我が石器時代民族の宗教的遺物

認むべき點が乏しい。然らば何ぞや、試みに
二様の解釋があらうと思ふ。

或は之れ死者愛惜の情よりして造られたる
亡者の像で、其の像に死者の靈魂が留まるも
のと考へ、其の遺族の祀つたものではなから
うか。此と同じ様な例は、南洋諸島にも行は
れて居る。即ち人死すれば其亡靈の住家とし
て死者の像を造つて家内に祀る風俗がある。
斯くの如き像を土人はコロールと云つて居
る。然し土版及び岩版が、土偶から變化した
ものであるとする解釋が動かぬものとする
と、此解釋は稍困難となるのである。何とな
れば、若し土偶が斯の如き目的の爲めに造ら

土版、土版
岩版は崇拜
者の肖像な
るべきか

第一七二圖
土版 其二

下總國葛飾郡川間村東金野井貝塚發見



裏 表
東京帝國大學人類學部藏室

はあるが、男女の圖を畫いてそれに年齢、干支、住所、姓名等を附記したるものを、彼等の崇拜する神佛の前に奉納することは、現今尙は行はれて居るのである。石器時代の土版乃至土版、岩版の類も或は此意味を有せしものではあるまいか。外國の石器時代の偶像に

れたるものとする、其が段々形式化して殆ど人間の形を認め得ぬ程に變化して土版となるといふことは、頗る不自然のこと、考へられるからである。

然らば第二に、吾人は斯く考へて見たい。土版、土版、岩版の類は崇拜者自身の肖像ではなからうかと考へるのである。後世の繪馬にも祈願者自身の肖像を神前に懸けるといふ思想の現はれて居るものがある。例へば其圖は粗末極まる仕入れもので

も吾人の此推測を幾分か裏書すべきものがある。

アンゼン、ハ、モソン Angelo Mosso 氏は其著「地中海沿岸文化の曙光」 Dawn of Mediterranean civilization に記して曰く、

「ドクトル、エバンス Dr. Evans 氏がクリット島クノッス Knossos で發見したる新石器時代の人形は、其形甚だ單純にして殆んど其人形なるや否やを判別するに困しむ。頭部は圓錐形の小突起を以て現はされて居るのみで、下部は縦に一線を與へて兩脚の區別を現はしたる高さ一寸計の小像である。此小像に就いてドクトル、シュリーマン Dr. Schliemann 氏は、土地の保護神なるべしといつて居る。然し余は實際に於て崇拜者自身の像であるかと考へる。埃及エジアン Aegan 及び歐羅巴大陸にも其例は少くないのである。」

と斯様にいつて居る。なほ同氏の研究によると、バトミール Butmir の石器時代の遺蹟から木兎に似たる人形を發見したといつて居る。我が國の土版にも木兎に似たるものが往々發見されることは頗る興味ある類似であつて、此は又一の新らしい研究の材料であらうと

クリット島
發見の石製
土版

木兎に似た
る土版

信ずる。

要するに未だ幼稚なる域を脱せざる我が石器時代の民族が、高等なる天孫種族の文化に接觸して其劣等なる宗教思想が如何やうに發達して其後の文化に對し如何なる關係を持つに至りしか、此邊の消息を理解することは我宗教思想及び國民性の根柢を知るに必要な條件の一であらう。

土偶の宗教的遺物たる以上、其性質を判明ならしむることは此方面の理解に密接なる關係がある。然るに今吾人が假りに與へたる二様の解釋は未だ十分に實證明されて居ない。是れ吾人の以て甚だ遺憾とする所であるが、有力なる材料の出現を將來に俟つより仕方がないのである。

第二節 石棒と石の崇拜

石棒は石器時代の遺物から發見される石製の丸味ある棒である。其兩端或は一端に頭のあるもの、或は全く頭の無きものもある。頭部には比較的精巧なる彫刻を施したるものもあ

宗教的遺物
としての土
偶の價值

石棒の形状

る。大なるは長さ三四尺以上に達するものがある。小なるは一尺にも達しないものがある。其横断面は圓形、橢圓形、或は區圓である。大なるは大概粗製で、小なるは石質も堅く其製作も精巧なるものが多い。我が考古學者又は人類學者の説によると石棒の或物は食料品等を舂きくだく爲めに用ひ、隻手を以て把持するに適當なる小形のもの、是會長等が半ば威嚴を示し、半ば護

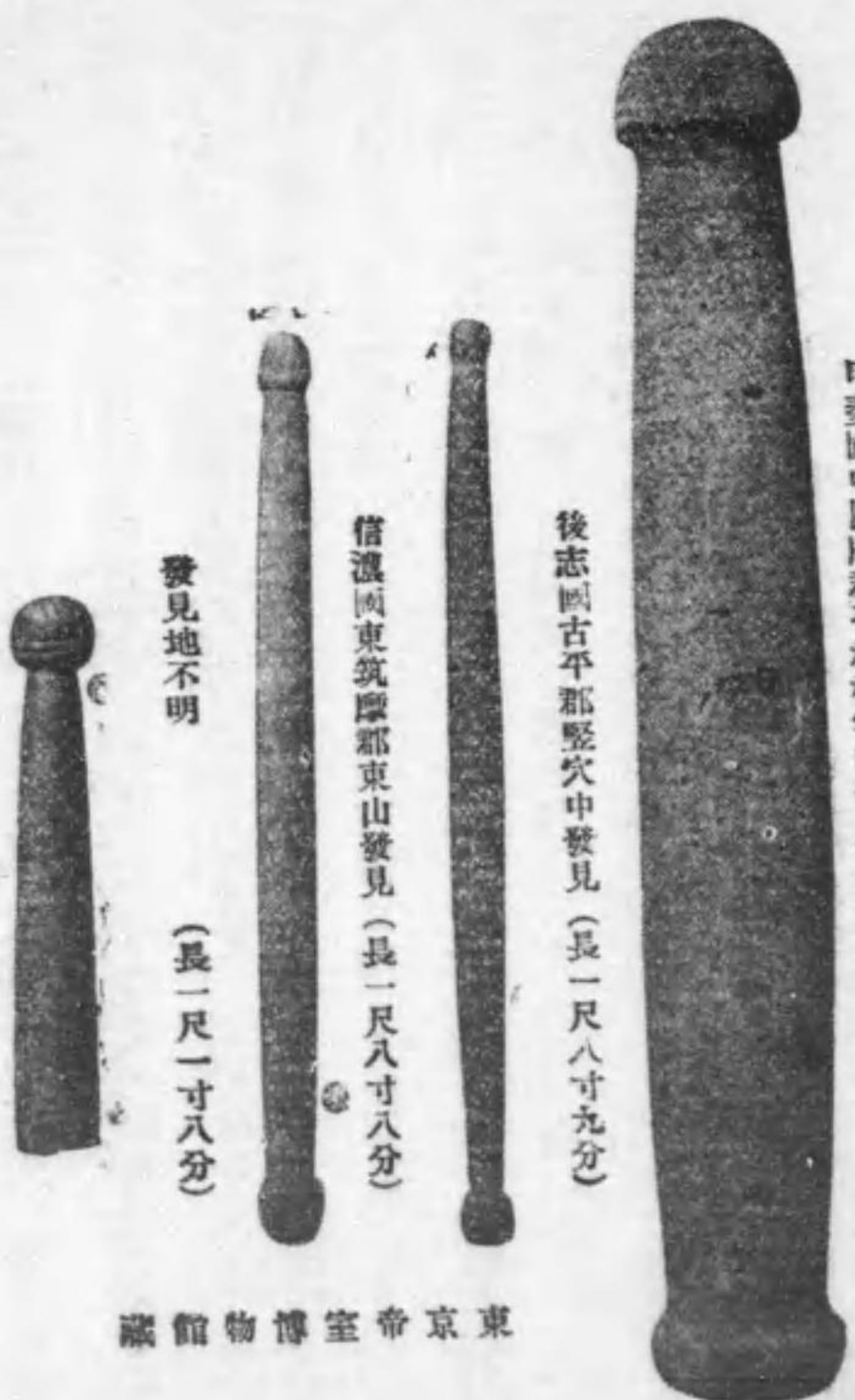
第一八圖 石棒

甲斐國中巨摩郡平林村字向發見(長二尺七寸四分)

後志國古平郡堅穴中發見(長一尺八寸九分)

信濃國東筑摩郡東山發見(長一尺八寸八分)

發見地不明 (長一尺一寸八分)



東京帝國博物館藏

第四章 我が石器時代民族の宗教的遺物

石棒の目的

身用の武器として携帯せしものであらう。又其他の大形石棒は宗教上の或用に供せしものならんといつて居る。其宗教的のものならんを推定されたる理由は日用品として大に過ぎるといふの外別に説明が與へられて居ないのである。

是に於て吾人は果して石棒中には宗教的のものがあるか、若しありとすれば、其形の大なるものゝみが宗教的のもので、他の石棒は總て非宗教的のものであるか。先づ此等の疑問に對して研究するの必要があらうと思ふ。此疑問を解く爲めに吾人は外國の石器時代の遺物及び近世野蠻人間に其類例を求めたのであるが、余の参考したる圖書に於ては、我が石棒と類似の石製物が崇拜せられ、或は宗教的目的の爲めに使用されたる類例を知らないのである。

然しながら、日常、生活の爲めに必要な器物は、世界何れの石器時代のものも、大體に於て共通的の形狀を備へて居るが、宗教的のものになると其根本思想は同一であつても、外界との關係の相異等によつて其形態に差異あることは別に怪むに足らないと思ふ。兎に角石器を使用しつゝあるが如き原始民族の信仰は、自然崇拜及び庶物崇拜を出でざるのみ

亞弗利加土人の石崇拜

メキシコ土人の石崇拜

スコットランド人の石崇拜

ならず、石器の崇拜は野蠻人の間に到る所にある信仰であり、又我が古記録にも石を崇拜する思想は頗る古くから現はれて居るのである。故に吾人は我が石棒の中には大小に論なく宗教的のものがあらうと思ふ。少くとも其大なるものは考古學者、人類學者の説の如く宗教的のものとして考へて誤りがなからうと信ずる。吾人の此考察に對して一層可能性を與へるものは近世野蠻人の石崇拜の習慣及び後世我國の民間信仰に於ける石器崇拜等である。アフリカの土人は直立せる大なる岩石に種々雜多なる色の縷を纏ひ付けて崇拜するの風習があるといふ。(Ratzel—History of Mankind vol. I p.45)

メキシコ土人は奇形なる石を雷電と密接なる關係あるものと信じて之を崇拜するのであるが、かやうなる石崇拜はメキシコ到る所に行はれて居る。而して石器時代の石斧、石鏃或は刀子等を雷電と呼び、雷光の製作したるものと信じて居る。

スコットランドの東北部の百姓も石器時代の石製の武器を雷電 thunder-bolt と呼び、必勝の守護神と信じて居る。又ブリチッシ、アイランドに於ても石鏃、石斧類を普通に雷電と云つて居る。(Frazer-The Golden Bough Part VII vol. I. P. 14)

アルメニア人の石器崇拜

亞細亞の西部に住するアルメニア人の如きも、燧石製の武器を雷電であると信じて居る様である。(Frazer-The Golden Bough Part I vol. II P. 374)

石器崇拜の意義

彼の有名なる「原始的文化」Primitive Culture の著者タイラー Taylor 博士は火花を發する燧石によつて雷光を聯想することは、原始民族の心理状態より考へて最も自然的であると云つて居る。

ジュピターの石器

古代の希臘人及び羅馬人等の如きも嘗て雷電を以てジュピター神の武器であると信じた。是れ亦同一の信仰に屬するものである。

雷、霹靂の意義と支那思想

斯の如く外國の例を見て然る後、我が國に於ける石棒、石斧等の稱呼を研究して見ると、そこに又共通點を見出すことが出来る。即ち我が國でも古く石棒を雷槌、又は霹靂槌と云ひ、石斧を雷斧と呼んで居る。名は實の寶であるといふことが此の場合にも應用が出来るならば、我が石棒石斧の類も同じ様な意義に解釋されて居つたものと推察されるが、直接の影響としては落雷せる所を掘れば金屬製の雷斧が發見されるといふ支那の民間信仰ではなからうかと思はれる。即ち此支那思想の影響によつて我が雷槌又は霹靂槌などといふ名

イスラエル人其他の石崇拜

稱は徳川時代末期に於て起つたものかと思はれるのである。
イスラエル人も石を崇拜したる時代があつた。ノールウェー人及びスウェーデンの土人も石を必勝の守護神と信じて之を所持したることあり。又その古代の詩にも屢々石を尊崇するの句がある。

南洋土人の石崇拜

南洋のメラネシア人種 Melanesian の間にも、廣く石の崇拜が行はれて居るが、彼等は石を精靈の住家と考へ、或は其形によつて偉大なる靈魂を聯想するからである。凡そ彼等の神聖視する箇所は石と關係を持たざるなく、石あれば即ち其地を神聖視するの風習がある。若し何等崇敬の設備のない所で偶然石を發見したる時は恐怖心を惹起して之に近寄らざることがある。ニュー、ヘブリディズ New Hebrides、バンクス、アイランド Banks' Island などでは、耕作をなす場合には、必ず豫め彼等の食料であるブレッド、フッドの形に似たる珊瑚石を埋めて良き收穫を祈り、然る後初めて植付けをなすといふ。(Collington-The Melanesians, studies in their anthropology and folk-lore P. 175, 178, 183)

次で我國の古書例へば奈良朝の初即ち千二百年前に出來た古事記、日本書紀、或は諸國の

石神と多伎
魂都比古の御

古風土記などにも屢々現れて居る。其他平安朝以後の文献に現れたものは枚舉に遑がない。出雲風土記に曰く、楯縫郡神戸里に石神あり。高一丈周り一丈許。側に小石神百餘許あり（中略）所謂石神は即ちこれ多伎都比古の御魂なり。ひでりに雨乞するときは必ず雨降らせ給へり。

神功皇后と
石神

筑前國風土記に曰く、怡土郡兒饗野村の西に白石二顆あり。一顆は長一尺二寸。太一尺、重四十一斤、一顆は長一尺一寸、太一尺、重四十九斤。昔氣長足姫尊新羅を征伐せんと欲し、此村に到り、御身姪ませるが、忽ちに生れまさんとす。即ち此二顆石を取らして御腰に挿み神に祈りて給はく、朕西の國を定めんと欲して此野に來り著きぬ。姪める皇子若し神にしまさば、凱旋の後に生まれましたまへと。遂に西の國を定めて還りませし時に生れ給ふ。所謂譽田天皇是なり。時人其の石を號けて皇子産石といふ。今訛つて饗石といふ。（釋日本紀卷十二）

世田姫石神

肥前國風土記に曰く、佐嘉郡佐嘉川上石神あり、其名を世田姫といふ云々。前記右出雲風土記の石神は大なる自然石にして、筑前國風土記に所謂神功皇后の産石は

現今各地の
石神

石棒様のものかと想像される。

又現に各地方に於ても石棒が神體として崇拜されつゝあることは、我が土俗を研究する者の熟知せる所である。奥州に多くある駒形神社又は金精神など皆最初は石棒が神體であつたと云ふ。東京附近では南多摩郡新井の石明神社、比企郡下伊草の氷川社、秩父郡栃谷の御前社など皆石劍其他の石を祀つて居る。其他諸國に於ても石棒を初め石に關する種々雑多なる民間信仰は頗る廣く行はれて居る。（柳田國男著「石神問答」東京人類學雜誌十七卷一五九號）

石神の名稱

石神は古來種々異なる名を持つて居る。其名の異なるに従つて其屬性も異つて居ると考へられる。即ちしやぐじん、いしがみ、しやくし、おしやもじ、石尊様、雁田大明神、羅石金精神、屁之子地藏、石根様、男莖形神、天神石、雨候石、福石、子持石、致富石、陰陽石、崇石、神牛石、護法石等實に其名は多いのである。（「石神問答」昭和九年木内重曉著雲根志）斯く古今東西に涉つて石神崇拜の風を覓むるならば、殆んど際限なく蒐められるであらうが、既に列舉せる所によつて石神崇拜は頗る原始的俗信で、且つ頗る普遍的のものであることを知るに十分であらうと信ずる。

第三節 赤色と宗教的遺物

石器時代の遺物に赤色を塗つたものがある。既に述べたる土偶、土版、石棒等を始め、高坏、瓶其他の土器石器に赤色を塗抹したるものがある。(東京人類學雜誌第一七二號)赤色は一般に野蠻人の愛する色で、宗教的器物に限つて塗つたものとは限らないが、宗教とは特に密接なる關係を持つて居ることは明かである。

又之を近世内外の民間信仰に徴するも、頗る顯著なるものがある。岩代國安積郡山村では馬脾風(病名)の流行する際は一尺四方位の赤紙へ馬字を三字倒書して戸口に貼り付けるのである。(東京人類學雜誌三九號)。甲斐國甲府でも同じ風俗がある。即ち赤紙の真中に馬俗除と書き、右傍に大津、左傍に東町と書いて貼るのである。又赤紙に何年男留守と書いたものを帖る。(東人四〇號)同じ類の迷信は到る處に行はれて居る。

又疱瘡神を祭る時には紅色紙を以て幣を作り、紅色の菓子、小豆飯、赤鯛、ほうぼう、かながしら、及び紅紙で口飾をしたる御酒徳利を供へるのである。(東人四〇號)現に東京市

疫病と赤紙

疱瘡神と赤紙

二王と赤紙

シツキム國の赤鬼と赤色の供物

南洋の石神と赤色

伊太利亞の石器と赤色

北米印度人の宗教的儀禮と赤色

外田端に赤紙二王といふ石の二王が俗人の崇拜を受けつゝある。其高六尺餘、此二王に祈願する者は線香をたき、一尺四方計の赤紙を二王に貼り付けて願を懸けるのである。故に此二王は常に全體赤紙で覆はれて居る。

シツキム國では悪鬼を赤鬼といひ、其祭には血の供物或は赤色の物を供へるのである。(The Gazetteer of Sikkim. Published by Bengal Government 1894. p. 356)

南洋土人の石神崇拜のことは、既に述べたのであるが、ニューペリディヌの土人が崇拜する自然石には往々赤土或は若き椰子の汁を塗て赤くするのである。(Codringtons Malansions p. 183)

伊太利のアプリア Apulia に於て嘗て鑛物性の繪具を以て赤く塗つた石器時代の石斧が発見せられた。此赤き石斧に就いてアンジエロ、モッソ氏は赤色を塗れるの故を以て宗教的のものとして認めねばならぬと云つて居る。同氏は又同地の墳墓内に於て辰砂で赤く塗つた二本の矢を発見したと云つて居る。(Angelo Mosso—Dawn of Mediterranean Civilization. p. 134)

北米印度人(ダコタ人種)の宗教的儀禮に於て繪具は頗る重要なもので、赤色は犠牲

を標象すべき宗教的色彩である。即ち赤く染めたるスワンは彼等の宗教的祭祀に於て重要な犠牲の一と成つて居る。(Annual report of the Bureau of Ethnology—Smithsonian Institution, 1889. p. 512)

第四節 結 語

我が先住民族が土偶を造つて神を崇拜し、石神を拜み、或は赤色を使用して神を祀つたことは何れの民族にも見るべき共通の現象であるが、我が石器時代の民族の経験に於ては、其處に自から彼等の特種性があつたのであらう、然しながら、事、有史以前に屬し、今日には到底明かに知ることは出来ない。唯其後文化の發展につれて斯の如き民間信仰が如何に變遷し、又社會と如何なる關係にありしかは、蓋し興味ある問題として後の研究に俟たねばならぬ。

第二編 神道の成立と原史時代の宗教思想

第一章 時代の範圍及び研究材料

我が石器時代の宗教思想と當時の社會生活との關係如何に就ては、研究資料の乏しい爲め、論じて十分なる事が出来なかつたのであるが、本編に於ては銅器鐵器の並び使用されたる原史代の宗教思想、就中特に神道の成立したる過程を研究せんとするのである。先づ吾人の所謂原史時代の範圍を定め、且つ其研究資料を調査せんとするのである。

さて茲に所謂原史時代は、古事記、日本書紀に記載されて居る神代から佛教渡來に至る間をいふのである。神武天皇以後の記事は、有史時代に編入すべきものであらうけれども、吾人は時代を論ずるのではなく、主として思想を研究するのである。故にたとひ、其記事に時代的の區別が與へられてあつても、何れも同一時代、即ち奈良朝の初期に残存して居つた古傳で、思想發達の徑路が其記載の順序の如く發展したものと云ふことは不可能であ

原史時代の
範圍

り、又其性質より見るも相前後せる如きものも認められるのであるから、佛教渡來前に於ける各種の宗教的思想を一括して原史時代の宗教思想と呼ぶのである。やがて又此思想は神道の成立と深い關係があるのである。

我が國民の宗教思想史の出発點は、實に此原史時代にあるのであつて、石器時代は、未だ國家の組織せられない時代で、其宗教思想は國民思想の建設せらるゝに當て融和せられ、或は混和せられたるものと思はる。石器時代の思想は此點に於て重大なる關係を後世に持て居るものといはねばならぬ。

さて此原史時代の宗教思想は、何によつて研究すべきか。記録文書に於ては、日本書紀、古事記、古風土記、古語拾遺、舊事記、萬葉集、及び延喜式祝詞等其重なるもので、諸社の縁起等にも多少參考すべきものがある。

文献以外に於て、最も重要な材料は、古墳墓で、其墳墓の形状と、其中に副葬せられて居る遺物は、彼等の宗教思想を研究する上に於て看過すべからざる關係を持て居る。斯の如き墳墓の築造が何れの時代に始つたかは不明であるが、其盛に行はれた時代は原史時

代、即ち佛教渡來前である。佛教渡來以後に於ても奈良朝に近い時代までは、尙多少此風の行はれたことは、考古學的研究によつて容易に認められるのである。

吾人は已上の材料を基礎となし、後世に於ける我國の宗教、風俗、及び外國の類似思想等を參考して我國初期の宗教思想を分拆し、更に之を綜合して、神道の特徴と其本質を可及的明瞭ならしめんと欲するのである。

第二章 カミなる言葉の意義と神名の解釋

神とは何ぞやといふ問題は、原史時代に於ては未だ思索上の對象ではなかつたのであるから、神の資格に就ても彼等によつて與へられたる定義はない。従つて又カミの語義も漠然たるものであつたことは、古書に於ける其用例に見て明かなる所である。

鎌倉時代に仙覺がカミは照し見る義であるといひ、其後彼と同じ様な説を室町及び江戸時代の學者も唱へた。其他カミは隱身カクリミの約言であるとか、又牙萌カシモエ或は隱靈カクリミといふ意義の言

カミは牙萌
カクリミ
照し見る、又は

葉であるといふ説もある。（「かみ」の意義に關する諸説―穂積陳重著 譯に關する疑―帝國學士院第一論文集第二號參照）

天野信景、新井白石、加茂真淵、貝原益軒、伊勢貞丈などいふ學者は、カミは上の義で人の貴い者を呼ぶ語であるといつて居る。此説は頗る自然的の解釋で無理のない説である。

エジプト語で普通神といふ語は *Neter* といふ。此字の語義は不明であるが、*Budge* 氏の説によると王朝時代（凡五千年前）には高き、高められたる、崇高、神聖、或は神の如き、などの意味に使用されて居た様であると云つて居るが、我がカミの意義を上と解する説と頗る類して居る。

然し宣長はカミの語源は不明であるといひ、凡ての説を採らず、其古事記傳第三卷に「凡てカミは古の御典ごにも見えたる天地の諸々の神たちを始めて其を祀れる社にます御靈をも申し又人はさらでも云はず、鳥獸草木のたぐひ、海山など其餘何にまれ尋常ならずぐれたる徳のありて可畏き物をカミとは云ふなり」と述べて居る。宣長の説は大體に於て、よく古意を得たる説であるが、後段にすぐれたる徳ありて可畏き物をカミとはいふと云へるは少しく注意を要すること、思ふ。宣長の説ではすべて善良なるすぐれたる徳のあるも

カミの語源は不明なりといふ宣長の説

エジプト語の神も亦いふ語にも亦いふ語もあり

カミは上の義なりといふ説

神名は如何にかに解すべき

言語と記號の意義

のをのみカミと云た様に解せられるが、古書の用例を見ると決してそうではない。肥前風土記三養基即姫社郷の條に荒神アワカミあり、行路の人多く殺さる云々など云へる記事があるが、此と類似の荒神、即ち人類に危害を加ふるものをも神と呼んだことは古書に屢々見えて居るのである。要するにカミの語源は宣長の説の如く不明であるが、其適用された範圍は、宣長の説よりも廣く、人間に危害を加ふるものをも神と云たのである。

さてカミなる言葉の語源は、何れにありとするも、言葉に現はれたる神名其者は如何に解すべきか。由來言語は人間の理智によつて作られたもので、思想を現はすべき一種の記號である。記號には色々種類があつて、秘密佛教の事相の如きは、宗教的記號の甚だ複雑なるものであるが、記號として其意義を平明に標示する點に於ては蓋し言語以上に出づるものはあるまい。我古史に現はるゝ神名も此意義の記號に過ぎないのである。然しながら茲に最注意すべきは、記號其者は實在でないこと云ふことである。即ち神名は或實在に與へたものではなく、想像上の或假想に與へたもので、宗教的の生命は寧ろ此點にあると云ふ事が出来る。但しこは理論であつて、實際信仰に於ては自覺的假想物を神と稱したのでは

なく、其信仰上では實在性を持つて居るのである。茲に於てか其信仰上の實在性は如何なる信仰を基礎として構成されて居るかといふことが重要な問題となる。即ち天照皇太神宮なる神名は、此神に關する傳説の理解によつて或自覺が與へられ、此自覺より寫象せられてここに初めて實在的の神に對する信仰が神名に附隨する様になるが、其主觀に現はれたる神格は各自に相異なるものである。

我が古典に現はれて居る神々は即ち斯の如き思想に支配されて生まれた神名で、宗教學上神人教 (Theanthropic religion) に屬する諸神であるが、其神名の出来る遙か以前より存在せる宗教思想が神名の下に或る實在性を持つ様になつたものである。さて如何なる宗教思想が神名の下に抱擁されて居るかといふ問題は、實に本論主題の一面であるが、本章ではカミといふ語の古義と神名の解釋について概念を知るを以て足れりとなすのである。

第三章 古史神話に現はれたる宗教思想

第一節 別天神及び神世七代諸神の神格

神話の性質

一民族の有する原始的神格觀は、其神話に於て見ることが出来る。蓋し神話は人類の原始的宗教であつて、彼等が宇宙萬象を解釋せんとして努力したる精神的所産である。而して神話が幼稚なる宗教である所以を考ふるに未開人種は宇宙萬象の或物に彼等自身以上の力ある神靈の存在を想像し、其神靈の恩威を信仰の對象となすが故である。要するに一民族の有する神話の研究は、其民族の人文史を知る爲めに必要缺くべからざるもので、殊に其民族の思想を考究せんとするには最も重要な方面である。

さて我神話を研究するに當り、最も大切な源泉は古事記及び日本紀の神代卷である。記紀神代卷は純然たる神話でもなければ、又勿論歴史的事實の記述でもない。其外形より論ずる時は歴史的編纂の形を取つて現はれた神話であるが、其内容には幾多の歴史的事實が混入して居ると思ふ。

次に注意すべき點は記紀編纂の由來である。我上古に於ては語部カタリベと稱する一部族があつて舊事古傳を語り傳へて居たのであるが、天武天皇の御代其舊説、古傳の漸く亡佚し、又虚偽に流れんことを憂ひ、稗田阿禮に古傳説を誦み習はしめ給ひしを元明天皇の朝に至り、

記紀神代卷の内容

記紀の編纂由來

太安萬侶に詔して阿禮の口誦を古言舊辭のまゝ筆記せしめられたのが即ち古事記である。又日本書紀は元正天皇の養老四年舎人親王以下太安萬侶等をして撰せしめられたものである。其編纂の態度は、當時蒐集されたる材料を歴史的に排列したもので、異説のあるは一書に曰くとして一々列挙して居る。即ち其態度は史家の鑑とすべきもので、誠に忠實なる方法を守て居る。さて記紀編纂の時代は斯の如く奈良朝の初期で、此時代は支那文物模倣の時代であるから編纂者の思想もまた其影響を受けしことの少からざるは、太安萬侶の序文に見るも、其内容に徴するも明かなる所である。然し書紀編纂の態度は、今云へる如く傳承の眞を失はざらむことを是れ力めたるものなるべきは明かである。故に其編纂當時に於ける傳承の眞相を傳ふる點に於て本書は恐らく遺憾のないことと思はれる。

記紀の神代卷は天地開闢神話を以て始まつて居る。古事記によると、天地の初發に高天原に成りませる神は、天之御中主神、高御產巢日神、神產巢日神の三神である。さて高天原といふは如何なる所を指すのか、何等説明する所がない。然しながら其字義と此三神が國土の未だ稚くして浮脂の如く、又久羅下の如く漂へる時に高天原に成りませる神なりと

云ふ傳説を考へ合すれば、天界の神と察せらる。又其御名天之御中主神の御中は眞中といふと同一なれば、此御名の意より考ふるも亦天界の神たること彌々明かであるが。其神格に就ては何等の説明もない。唯天に於ける三神存在の信仰を語るのみである。然るに日本書紀は天地開闢の状態を説明して頗る巧妙を極め、其中に出現したる神に就ても具體的に説明を與へて居る。即ち曰く、

古天地未剖。陰陽不分。渾沌如雞子。溟滓而含_レ牙_及其清陽者薄靡而爲_レ天。重濁者淹滯而爲_レ地。精妙之合搏易。重濁之凝場難。故天先成而地後定。然後神聖生_レ其中焉。故曰。開闢之初。洲壤浮漂。譬猶_三游魚之浮_二水上_一也。于時天地之中生_レ一物。狀如_二葦牙_一。便化_レ爲_レ神。號_二國常立尊_一。次國狹槌尊。次豐斟淳尊。凡三神矣。乾道獨化。所以成_レ此純男。

とある、以て如何に進歩せる想像説たるかを見るべきである。即ち天地及び其神、生成の順序を叙して天先づ成りて後地定るといひ、天地定て然る後に其中に神生ると説き、開闢の初め天地の中に一物生る、狀葦牙の如し、便ち神となる、國常立尊と號すと云て居る。さて此神は國狹槌尊及び豐斟淳尊と共に三體一座の形式を採て居る神であるが、如上の説

宇宙最初の
神に關する
傳説

明より考へると宇宙最初の神である。然るに此正傳の外、書紀には、宇宙最初の神に關する異傳が八種擧げてある。就て見るに、天地の初の時、虚中に自ら化生の神を國常立尊となすもの三種。又一書には天地未だ生れざる時、其中に一物生る。葦牙の初めて渥中に生れたる如し、これ即ち國常立尊なりと云へり。此等四種の異傳は其説明に多少の相違あるも、共に天地最初の神を國常立尊となすもので、此點に於て正傳と同説である。次に又一書の異傳には天地の初めに生れたる神を可美葦牙彦舅尊と稱し、國常立尊を此神の次に置きたるもの二種あり。又一書には天地の初めに物ありて葦牙の如くにして空中に生れたる神あり、天常立尊と號すといひて其の次に可美葦牙彦舅尊を擧げて居る。斯く異傳を擧げ來る時は、國常立尊と葦牙彦舅尊は如何にも混亂して傳へられてゐるが、之を要するに、國常立尊を以て最初の神となすもので、正傳に其狀、葦牙の如しといへる國常立尊の本體的性質を直ちに葦牙彦舅尊と呼び、國常立尊とは別神の如くに云へるに過ぎざるものと考へらる。されば國常立尊、國底立尊、可美葦牙彦舅尊、或は天常立尊と稱するも結局は同神異名といふことになるのである。

國常立尊、
國底立尊、
可美葦牙彦
舅尊、及天
常立尊は同
異名なり

天之御中主
神國常立
尊との比較

然るに今一書の異傳は、天地最初の神として高天原に生れました天御中主尊を主座とする三體一座の三神を傳へて居る。此三體一座の諸神は古事記に於ては別天神の初めに現はれ給ふ神々で、國常立尊とは其神格を全く異にするものであるから、分離して考ふべきものと思ふ。但し天御中主神の傳説は甚だ不充分で、既に述べたる以上論すべきものがないのである。これに反し國常立尊に關する傳説は遙に多い。故に國常立尊は天御中主神よりも、より一般的信仰の對象であつたものと考へらる。

國常立尊の
神格と植物
崇拜

斯く論じ來る時は、國常立尊は、葦の泥土より生ずる状態を觀察して、そこに潜在せる一種の神秘的創造力を神格化したる神である。然しながら此原始的な神格觀其者が我國に於て自發的に發展したのであるか、又は高等なる文化の力によつて低級なる一般民族の爲めに説明的に作爲されたものであるか、こは今直ちに論斷し得べき問題でないと思ふが、斯の如き信仰は原始的植物崇拜に屬すべき思想で、我國のみに限られた現象ではない。例へばギリシヤの神アフロダイト Aphrodite の如きも、其もとは東洋地方でイスター Istar アスターテ Astarte 等の名によつて崇拜せられた植物崇拜の神で、元來はギリシヤの神では

ギリシヤの
アフロダイ
ト神

ないのである (The Sacred Tree, or the Tree in Religion といはば我葦牙の神話の如きも、全然天孫種族の思想より起つたものと思はれないのである。蓋し天孫種族の渡來せし當時は、決して原始的な神話作成の時代ではない。況んや記紀編纂當時は大に文化の見るべきものありしは、茲に更めて云ふまでもないのである。

さて天御中主神と國常立尊の二神によつて當時宇宙最初の神について二種の説話の存在せしことが知られるのである。次に吾人は別天神及び神世七代の諸神を概観するの要がある。

古事記には先づ五柱の別天神を挙げ、然る後神世七代の神々に及んで居るが、書紀は直ちに神世七代の諸神を挙げて居る。記の別天神は即ち天御中主神、高御産巢日神、神産巢日神、宇麻志阿斯訶備比古遲神及び天之常立神である。紀の神世七代の諸神は乾道によつてのみ化れる神、國常立尊、國狹槌尊、豐斟淳尊の三神と、湍土煮尊より伊弉諾、伊弉冊に至る耦生の八神四代の神々である。今此等記紀の諸神を比較するに、天御中主神と産巢日二神よりなる三神一座の神は既に論じたる如く全く紀の諸神と異なる神であるが、次に舉

げたる宇麻志阿斯訶備比古遲神、天之常立神及び國之常立尊の三神も前にいへる如く同神異名であるが故に、別天神及び神世七代の諸神は結局天御中主神と産巢日二神を除けば、古事記、日本書紀兩書ともに大體一致して居る。唯日本書紀には角材、活材の二神を缺き(但し一書の所傳にはある)、古事記の神世七代には日本書紀の國狹槌尊が現はれてゐないのである。

別天神及び國常立神については畧ぼ研究を了へたと信するが故に、以下其他の諸神について研究を進める。宣長の古事記傳によると豊雲野より訶志古泥までの九神は、國土の初と、神の初の形狀を次第に配當して名けしもので、豊雲野、宇比地邇、妹須比智邇、意富斗能地、大斗乃辨は國土の始のさま、角材活材、游母陀琉、阿夜訶志古泥は神の始のさまである。又篤胤は古史傳に於て宇比地邇、須比智邇神より伊邪那岐、伊邪那美の神まで十神は、實は岐美二柱の神のみにて宇比地邇、須比智邇より面足、惶根と云ふまでは、伊邪那岐伊邪那美二柱の神の御身の漸々に成坐るを以て次々に御名を負はせ奉れるを終に五代とは語り繼ぎたる事と所思といつて居る。

要するに、別天神と神世七代の古傳に於て吾人は三團の重要な神を認めることが出来る。第一團の神々は天之御中主神と産巢日の二神である。第二團は國常立尊、國狹槌神及び豊斟淳の三神である。最後に第三團の神々は即ち那岐、那美の二神である。

神世七代の諸神中最も重要な神は、蓋し伊邪那岐、伊邪那美二神である。此二神は實に地上に於ける最初の神で、國土諸神を造り給ふた造化の神である。而して第一團及び第二團の神は那岐、那美二神に對して天界の神といふことが出来ると思ふのである。さて我が自然神話の骨子を成すものは那岐、那美二神で、此二神は其性質より觀察すれば、乾坤、天地或は陰陽を神格視した神と見られる。又其形の方面より見ると人形を持って現はれた神である。即ち古事記傳を見ると、伊弉諾は誘語イサノコトバといひ、伊邪那比君、伊邪那比女といふことである。又女君と切むれば美となり、交カフに伊邪汝と誘ひ給へる御言を以て御名に負せ奉りしなりとある。されば御名の意より推すも男女の性ある神である。尙ほ亦二神の行狀より考ふるも、傳說的の信仰に於て人形を備へ給へる神であると云ふことが出来様と思ふ。吾人は、さきに那岐、那美二神を以て我が自然神話の骨子であると云つたが、吾人の所謂原

伊邪那岐伊邪那美二神の神格

陰陽哲學の影響

那岐那美二神の生み給ひし貴子

始的神格觀の立場から見ると、國土諸神の創造主であるといふ點が最も重要である。然しながら、此の二神に現はれて居る神格觀は支那の陰陽哲學より影響を受けたもので、葦牙神の神格と比較して大いなる逕庭あるに注意せねばならぬ。

那岐、那美二神について尙ほ注意すべきは、二神の最後に生み給ひし三の貴子ウツコ即ち天照大神、月夜見神及び素戔嗚尊の三神の事である。最初の二神の日月神なるべきは古來學者の定説なるのみならず、古傳説其者によつて明かである。第三の素戔嗚尊は其行狀多岐に渡つて居るが、暴風雨の神と解するが最も穩當であらう。我が自然神話の重大なる部分は那岐、那美二神と三貴子との五神によつて形成されて居る。就中最も重要視せざるべからざるは日の神であつて、人文神話より歴史時代に涉つて重大なる關係を持続して居るのである。故に我國初、天照大神に對し、國民の抱懷して居た崇敬心の内容性質等を明瞭ならしむることは、我が國體の神髓を知る爲めに缺くべからざる基礎的研究と思ふ。故に項を更めて大いに論ずる所あらんとするのである。

第二節 自然神話に現はれたる太陽崇拜と善惡

二神の觀念

天照大神は、日本書紀によると、那岐、那美二神が大八洲國及び山川草木の類を生み了つて後、天下に主なる君として生み給ひし神で、大日靈貴及び天照大日靈尊などは即ち此神の異名である。又此神を形容して「此子光華明彩。照徹於六合之内」といつて居る。故に天照大神は自然神話の立脚點より見る時は、天日、即ち太陽神であるべきは、宣長の解釋を俟つまでもなく明瞭なることである。鈴木重胤が天日を主宰する神なりと云へる如きは、抑々神話を解釋すべき態度を誤り、自己の理屈に落ちたる論といはねばならぬ。古事記によると、天照大神は、伊邪那岐神が黄泉の國より還りて筑紫日向の橋の小門の阿波岐原にて禊祓をなし、左の御目を洗ひ給ひし時に生れ給ひし神である。又此時右の御目を洗ひ給ひし時に生れましし神は月讀命即ち月神である。又書紀の異傳にも同説が傳へられて居る。エジプト太古の神話に於て大ホラス神 *Horus* の右の眼は太陽で、左の眼は月であつたと

天照大神

エジプト神話に現はれたるホラス神と太陽崇拜

傳へられて居る。此エジプト神話では、左右の眼を直ちに日月神と信するのであるが、我神話では、日月兩神が諸神の兩眼から生れたといふ點に於て少しく相違して居る。然し其根本思想は頗る類似して居る。而して此大ホラス神は夜と暗黒と死の神であるセト神 *Seth* を敵として戦つて居る。次に此神の左眼即ち月神は、夜の神であつたが、セト神と争ひ、後ちオシリス神と同視せらるゝ様になつてからは、下界の王となり、死者の判官及び、極樂世界の王であつた。(Guide to Egyptian Collections in British museum. By W. Budge 1909. p.139.) 之に反しセト神は常に日月二神を敵とした惡神である。

我が神話に於ても亦、天照大神は、徹頭徹尾善神である。月讀命の神格については、諸説まち／＼である。即ち書紀、舊事記によると日神と相並んで共に事は興るべしとあり、又他の古傳によると海原を治むべしとある。然るに古事記には、夜の食國 *ウケクニ* をしらせとあつて、我神話に於ける此神の位置は、甚だ不明であるが、日神と相並んで事に當るべしといふ古傳が一番多い。故に此の如き神格の神と見るが、最も穩當であらうと思ふ。然し月神は我神話に於ては、さほど重要な神ではない。

月讀命

天照大神と相對して最も重大なる神は、建速須佐之男命である。此神は諸神の第三番目の貴御子であつて、古事記によると、月讀神を生み給ひし後、御鼻を洗ひし時に成りませる神で、天照大神の善神なるに反して惡神的舉動が多い。此點は即ちエジプトのホルス神とセト神の鬭争に類似して居る。

書紀によると素戔嗚尊は勇悍以安忍にまして、且常に哭泣を以て行となし、國內の人民を多く天折へ、又青山を枯山に變せられた。故に那岐、那美二神は、素戔嗚尊に告げて汝はいと道なし、宇宙に君臨すべからず、遠く根國に適るべしと宣ひ、遂に逐ひ給ふたのである。又古事記によると、天照大御神に暇乞の爲め天に上ります時、山川悉に動み國土皆震りきとある。更に又天照大御神の菅田の阿(畔)を離ち溝を埋め、亦大嘗開食す殿に尿まき散らす等、暴戾極る行をなされた。暴行は此のみならず、最後には、天照大御神が忌服屋に坐まして神御衣織らしめ給ふ時、其服屋の頂を穿ちて、天の斑馬を逆刺に刺きて墮入れられた。此忌服屋の出來事は、記紀に多少の相異はあるが、要は大神が忌服屋にありて神衣を織り給ふ時、素戔嗚尊が天上から投げ入れられた斑駒によつて驚動し給ひ接にて陰を衝

○ 神ありき
大神は神らしき

きて神退り給ひしといふにある。斯の如き素戔嗚尊の行状は、自然神話の上より觀察すると、善神たる日神に對して暴風雨を人格化した所の惡神の態度と見ざるを得ない。さて神退り給ひし天照大神は、天石窟に入り給ひ、磐戸を閉して幽居在したのである。斯くて天地常闇となり、晝夜の別もなく萬の妖悉に發りきといふ。そこで諸神議を凝して天石屋戸の前に祈禱と神樂を行ひ、八百萬神等皆咲ひ叫んだのであつた。此が爲に天照大神は天石窟を細目に開き、出で初め給ふたのである。之即ち天照大神の蘇生を意味するものである。吾人は此天照大神の蘇生について特に讀者の注意を求めたい。此觀念は吾人の想像説ではない。古傳説其者に於て十分に認められるのみならず、我が上古の墳墓の遺蹟によつて、更に之を裏書する事が出来る。大神が天石窟に入り、天磐戸を閉ちて幽居ましぬといへるを、古墳墓の形式に徴するに、當時墳墓の大なるは、後章に説くが如く、山腹又は平地に石室を築き平地にありては其上に盛土をなし小山を造り而して其入口は石戸を嵌め込み閉閉するに便ならしめたものもある。これ即ち古傳に所謂石窟と盤戸に該當するものであらう。故に大神蘇生の思想は斯の如き墳墓と聯關せる靈魂觀と密接なる關係あるものと

思はる。即ち天照大神の死と其蘇生は初めから此傳説に包含されて居る思想である。而して此傳説の宗教的生命は實に此點にあると思ふ。

次いで諸神は素戔嗚尊の罪に對し、千座置戸チソラヤキドを科し、髪を抜き手足の爪をも抜かしめて其罪を贖はしめた。

天照大神に關する神話は其蘇生を以て一段落を告げて居る。而して此神話は太陽崇拜の一形式である事は、何人も容易に理解し得る所である。太陽崇拜にも種々の階級があるが、我が古史神話の此部分は果して如何なる程度に屬するか、吾人は此點に研究を進めたい。

「自然神話に於て自然現象の或ものに生命の存在を信じて、之を信仰することは最も原始的階級に屬するものであるが、此信仰が極度に發達すると之も人格化して崇拜する様になるのである。

我が天照大神及び素戔嗚尊は即ち太陽と暴風を人格化したもので、恩恵及び恐怖より來る信仰の最高に發達したものである。太陽或は月に對し人間的性質の存在を認めて、男女の生命を附與せんとする思想は、世界至る所にある現象で、哲學的思索の初歩である。

我太陽神話の形式

自然神話の立脚點より見れば、天照大神及び素戔嗚尊に關する説話に現はれたる原始的宗教要素は已上述ぶる所の如くであるが、茲に最も注意すべき事は、此神話作成の時代に於ては太陽其者を直ちに信仰の對象としたのでなくして、唯斯の如き原始的信仰が基礎をなしたものである。要するに天照大神に對する信仰は古傳其者にあるのであらう。又素戔嗚尊も暴風雨を神格化したものではあるが、斯の如き根本思想は忘れられ、専ら人格的行狀を對象として強暴神に對する信仰が行はれたもので、所謂天孫種族が統一的努力を樹立したる當初に形成された思想であらうと思ふ。

第三節 大國主神の國土經營神話に現はれたる

宗教思想

大國主神の國土經營に關する傳説は、何れ程まで史實として考へることが出来るであらうか。古事記、日本書紀の神代卷の記載は飽くまでも神話として取扱はねばならぬと思ふ。吾人が文化史的に觀察し得る所は唯其神話の構成に際して混入したる史的事實について議

大國主神の蘇生

論をなし得るに過ぎないのである。
古事記神代卷の記載によると、大國主神は八十神に幾度も殺されて居るが、其度毎に蘇生して居る。又大國主神の經營に關する記事は、古事記に詳細なるに反して、日本書紀には殆んど閑却され、僅かに一書の所傳に於て影を留めて居るに過ぎない。此等の諸點を考察すると彼は到底神話上の人物たらざるを得ない。尤も大國主神及び其一族が天孫降臨に先つて豊葦原瑞穗國を經營して居つたことは事實であらう。又其首長が大國主神であつたことも確かであらう。

さて吾人の茲に學ばんとする所は、大國主神の傳説に遺つて居る宗教思想其物を知らんとするのである。

古事記神代卷に左の如き記事がある。

大國主神既に八十神を平げて出雲の御前の御前に坐す時、波の穂より天之羅摩船に乗り鵝の皮を内剝に剝て衣服にして歸來る神あり。其名を問へども答へず、且所從の諸神に問はすれども皆知らずと白す。爾多邇具久白言さく、此者久延毘古そ必ず知りたらむと

申せば即ち久延毘古を召して問はす時に、此者神産巢日ノ神の子少名毘古神なりと答へ白しき。故爾神産巢日御祖命に白上しかば、此者實に我子なり。子の中に我手俣より久岐斯子なり。汝葦原色許男命と兄弟と爲りて其國作り堅めよと詔給ひき。故それより穴牟遲(大國主神の一名)と少名毘古那と二柱の神相並ばして此國作堅め給ひき。然る後、其少名毘古那神は常世の國に渡りましぬ。故其少那毘古那神を顯し白せし所謂久延毘古は今に山田之曾富騰といふ者なり。此神は足は行かぬとも天の下の事を盡に知れる神なり。

少名毘古那神の船に乗り海を渡つて大國主神の眼前に出現したといふ傳説は日本書紀一書の所傳も同じあるから、此の神は或は外來の神であつたかも知れない。大國主神が此の神のことを全く知らなかつたことも古事記日本書紀の所傳の一致する所である。大國主神は即ち此の神を知らんとして先づ其の從者に問ふたのであつたが、知る者が無つた。然るに多邇具久の注意によつて久延毘古といふ者に聞いて初めて少名毘古神といふことが判つたのである。

少名毘古那神と大國主神

多邇具久は
蟾蜍なり

久延毘古は
即ち曾富騰
なり

さて多邇具久とは如何なるもので、又久延毘古とは何者であるか。宣長の古事記傳によるとタニグクは蟾蜍のことで、グクは其鳴聲である。タニは谷で物のはざまに居る故にいふのである。其靈異あることは漢籍にも見え、世人も知れる如くなれば、此事も由ありと覺ゆといつて居る。次に久延毘古は、古事記に久延毘古は今に山田の曾富騰といふ者なりとある。又此神は足は行かねども天下の事を盡くに知れる神なりとある。故に曾富騰の何者であるか判れば即ち久延毘古の意味も判るのである。

宣長は古事記傳に於て山田の曾富騰の天下の事を知れるは、如何なる故とも測り難しと疑を存し、一説を試みて容貌見ぐるしく微賤き者とても侮るべからずとの譬喩ならんと想像し、更に論じて日本書紀に此故事の省かれたるは、漢意に遠きが故なるべしと説明して居る。又平田篤胤は古史傳に於て左の如くいつて居る。

曾富騰に關
する篤胤の
説

曾富騰は鳥獸を驚さむ料に假初の如く作り立てたる物にしあれば、實は靈のあるべくも非るに天下の事を盡くに知ると云ふことの餘りにしたたかなるに就いて考ふるに深き由ありげに覺ゆ、其は此に足雖不行と云へるに、上文に召久延毘古而問之時云云とあ

曾富騰は禰
禰者の禰人
の類なりと
いふ説

れば言語は更なり召によりて歩み參出たりとも聞ゆ。然れば此神はしも體に固有の靈魂は無けれど、他より問はるゝ事に從ひて神また人或は物にまれ、何にまれ、其事を知れる靈の禰託に誨ふる故に天下の事悉く知らるゝにて實は曾富騰の本より知れるにはあるまじくおほるたり。其は古くも今も巫祝などの禰人と云ふを立て神また人の靈を祈り禰せて物問ふことあるも同じ意はへになむありける。また此神の事を顯し白せりし谷具久もいみじき神になむありける。

宣長・篤胤
兩説の優劣

宣長が曾富騰即ち案山子を以て賤しきものも侮るべからざる譬喩なりといへるは、當時の原始思想を考へずして余りに倫理的に偏したる僻論なりと云はねばならぬ。之に反し篤胤の説の禰禰者の禰人の類なりといふへるは大いに進歩したる議論である。

曾富騰は禰
禰者の禰人
の類なりと
いふ説

さて吾人の見解によると、大國主神が少名毘古那神のことについて曾富騰に尋ねたのは、當時斯の如き宗教風俗があつた爲めであらうと信ずる。即ち曾富騰は當時一種の魔術的祈願の對象であつたと考へられる。従つて曾富騰の答へは神の啓示 revelation を見たい。吾人は更に一步を進めて少名毘古那神の如何なる神であつたかを研究せねばならぬ。

古事記によると此神は神産巢日神の手僕より生れ出でたる御子である。又日本書紀の一書には、

是時海上忽有人聲。乃驚而求之。都無所見。頃時有一箇小男。以白薺皮爲舟。以鰓鷗羽爲衣。隨潮水以浮到。大已貴神(大國主神)即取置掌中而翫之。則跳盪其類。乃怪其物色。遣使白於天神。干時高皇產靈尊聞之而曰。吾所産兒凡有一千五百座。其中一兒最惡不順教養。自指間漏墮者必彼矣。宜愛而養之。即少産名命是也。

とある。
又此神と大國主神の國土經營の事については古事記には神産巢日神の命によつて此神が大國主神と兄弟となつて北國を作り給ひし由の記載がある。日本書紀一書の所傳には此等二神力を戮せ、心を一にして天下を經營すとある。

今、古事記日本書紀二書の神話を綜合して判断するに少産名神は大國主神の國土經營を

少産名神の人格

大國主神及び少産名神は醫療神なり

大いに助けたる神であることは明かであるが、彼を以て直ちに大國主神と共に具體的に天下の經營に従事したる所の史的人物であるといふ事は出来ない。即ち大國主神は、其國土を經營するに當て少産名神の冥助を得給ひしことを示すものであらう。要するに少産名神は大國主神の國土經營を助けたる神で宗教的要求の對象となつた神であらう。故に少産名神は宗教的には人格的の神であるが、其歴史的人格は認められない。即ち吾人の分析的研究によつて判断するときには斯く考へざるを得ない。此傳説を生んだ當時の人心に寫象されたる少産名神はもとより斯の如き分拆比判の結果によつて信せられたのではなく、此傳説其者によつて直觀されたる幽玄なる神である。即ち傳説其物の中に眞の生命があつたものといはねばならぬ。

さて大國主神は少産名神と顯見蒼生及び畜産の爲に病を療むる方を定められたといふ事が日本書紀の一書及び古語拾遺に出て居る。又伊豫國風土記には此等二神は温泉に浴すること教へたといふ遺蹟が伊豫の温泉に在ると記載されて居る。此等の記載によつて大國主神、少産名神が醫療の神として信仰されたる一面を知ることが出来る。

大國主神は又少彦名神と共に鳥獸昆蟲の災異を攘はむ爲に禁厭の法を定む。是を以て百姓今に至るまで威恩頼を蒙ると云ふ事が日本書紀の一書に傳へられて居る。飯田武郷が日本書紀通釋に於てこの一段を解して禁厭の法療病の法となり、療病の法即ち禁厭とはなれるものならんといへるは頗る敬服すべき解釋といはねばならぬ。當時禁厭の法が治病の手段として最も普通に行はれたること、思はる。然し全く禁厭のみではなかつたのである。既に温泉又は硫黄等の效能も知れて居つたのである。之に反し病氣以外の災害には専ら禁厭の法が行はれたものと信せられる。故に武郷が禁厭の法、療病の法となり、療病の法即ち禁厭なるべしといへるは、稍斷定に過ぎたる説で、禁厭よりも進んだ醫療の法も當時既に多少行はれて居つたものと云はねばならぬ。

大國主神の定めたる禁厭の法とは如何なるものであつたかは、もとより不明であるが、かの十種の神寶、又は用明天皇紀に作太子彦人皇子像與竹田皇子像一厭之とあるに類するものと察せられる。之を要するに禁厭の法は宗教學者の所謂マジックに相當するものである。當時かくの如き方法が大國主神によつて教へられたことは大いに注意せねばならぬ。

第四節 蛇神拜の思想

人間の靈魂が或獸類の形を取つて現はれるといふ思想は、原始民族の考へる所である。亞弗利加の野蠻人は生存中に人間の魂が獅子や鰐に移るといふことを信じて居る。蛇の崇拜も此に類する思想から起つたものである。小蛇が夜密かに室内の隅に入り來り、又時は寢床の中にまで侵入することがある。斯の如く人家に入り來る蛇を其家族の死者が、蛇の形に化つて歸つて來たものだといふやうに信することは、亞細亞、亞弗利加、又は亞米利加土人の考へる所である。

蛇神の崇拜は殊に熱帶地方に多い。故に印度には蛇の崇拜が最も廣く行はれて居る。印度で最もよく神として繪畫彫刻などに現はされて居る蛇はコブラ (Cobra) である。自然のままの蛇形を現はしたるもの、又は人身蛇頭のものである。コブラは最もよく人家に侵入する蛇である。エジプトに於ても此種の蛇が盛んに崇拜の對象となつて居つたのである。即ち崇拜の對象となつた蛇は人家へ屢々侵入する種類である事が察せられる。

崇拜の對照
蛇は人家へ
侵入する小
蛇である

我が國に於ても蛇の崇拜は頗る廣く行はれて居るのである。佛教の輸入と共に印度から入つたものも少くないのであるが、古くは三輪神と關係して蛇が屢々現はれて來るのである。而して其傳説にも多くは人家へ侵入したる事が傳へられて居るのである。

大物主神と小蛇の關係

倭迹迹日百襲姫命爲大物主神之妻。然其神常晝不見而夜來矣。倭迹迹姬命語夫曰。君常晝不見者。分明不得視其尊顏。願暫留之。明且仰欲觀美麗之威儀。大神對曰。言理灼然。吾明且入汝櫛篋而居。願無驚吾形。爰倭迹迹姬命心衰密異之。待明以見櫛篋。遂有美麗小蛇。其長大如衣細。則驚之叫啼。時大神有耻。忽化人形。謂其妻曰。汝不忍令羞吾。吾還令羞汝。仍踐大虛登于御諸山。(日本書紀、崇神天皇十年の條)とある。即ち大和の大三輪に祀れる大物主神(大國主神の和魂)となり倭迹迹日百襲姫の家に夜通つたのであつたが、正體の現はれるまでは美男子の如くに思はれて居つたといふのである。

丹塗矢の話

又古事記神武天皇の條に三輪の大物主神が丹塗矢に化つて美人勢夜陀多良比賣を姪ませたる話が出て居る。此神は釋日本紀に引用されて居る山城風土記にも見えて居るのである。此話も先の話に相類するものである。

尙又古事記崇神天皇の條に大物主神、夜毎に活玉依毘賣の許に通ひし話がある。此も類似の傳説である。

更に又肥前風土記を見ると小城郡の條に、弟日姫子、狭手彦連と別れたる後彼に似たる男毎夜來つて共に寝ね曉に至つて去る。婦人之を怪みて竊かに絲を其人の裾に取り付け、其絲のまゝに隨つて尋ね行きしに、沼振峯の上の沼の邊に寝ねたる蛇であつた。此蛇の身は人の形をなし沼の底に沈み、頭は蛇にて沼の壑に臥して居つたといふ傳説が残つて居る。此傳説も大物主神が活玉依毘賣の許に通つたのとよく似たる話である。

常陸風土記行方郡の段に繼體天皇の時の事として傳へられ居る傳説には蛇を夜刀神といひ、耕作を害したるを以て神地を與へ、社を設けて恨み崇ることなからしめたといふ事が記載されてある。

夜刀神

第四章

文献及 古墳に 現はれたる 靈魂觀と未來觀

第一節 墳墓の築造及び副葬品に現はれたる

靈魂觀と未來觀

生死の區別の因て來る所以を理解せんとするは、人類が生理的知識の必要を感じたる初めであらうが、其解決の法として肉體以外に靈魂の存在を認めたる事は、宗教思想の哲學的基礎に重大なる關係を持つて居る。蓋し靈魂とは何ぞやの問題は、人類の未だ蒙昧なる時代より今日に至るまで、其解釋に苦しみつゝある哲學上の高遠なる宿題である。随つて人智の幼稚なる時代に於ては、多くの迷信を生じた。即ち靈魂を氣息、心臓、陰影或は火ならんと解釋したる如きは、頗る原始的のものであるが、結局人間は肉體と靈魂とを有し、其靈魂は肉體を離れて存在する事を得、死は靈魂の肉體より永久に分離した結果ならんとするに歸著して居る。

靈魂の認識
と原始的宗教

我が原史時
代民族の靈
魂觀

さて我が原史時代の民族は靈魂について如何やうに考へて居つたであらうか、殊に死後に於ける靈魂の存在に關して如何なる信仰を持つて居つたか。此問題は我が原始神道と密接なる關係あるが故に細心の注意を以て研究を進めねばならぬ。吾人は先づ遺蹟遺物によつて、此研究に入る事が出来る。此に遺蹟遺物と云ふは、古墳墓の遺蹟と、其中より發見せらるゝ棺及び副葬品を指すのである。既に述べたる如く墳墓の築造は我が原史時代に於て盛んに行れたるものにして其形式は疑もなく彼等が抱懷して居た靈魂觀によつて支配されたるものである。

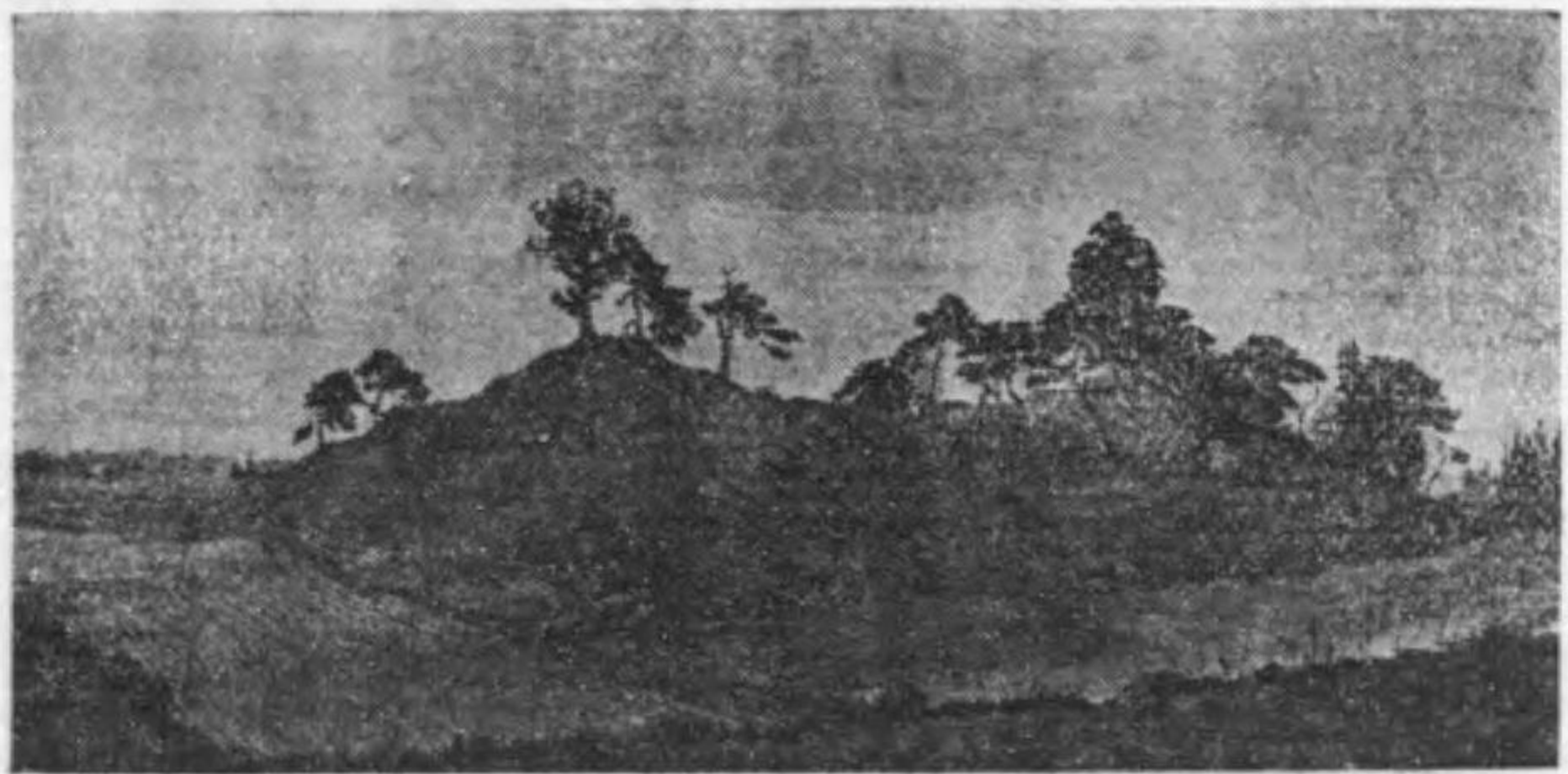
古墳を其構造より大別すると二種ある。即ち地上に土を盛つて築いたものと、丘陵の側面に穴を掘り込んで造つたものがある。普通前者を狭義に於て古墳と稱し、後者を横穴と呼んで居る。

古墳の構造

狭義の古墳を更に其形狀に隨つて甲乙の二種に別つことが出来る。甲は平面圖が圓く土饅頭形をなすもので、之を圓塚といふ。乙は高いところが二個所あつて、丁度瓢を半ば土に埋めたやうな形で之を瓢塚といふ。此瓢形古墳の中で最も形の整つたのは、前方は角ば

古墳の内部

第一九 古墳の形類
上野多野郡美里七村山古墳



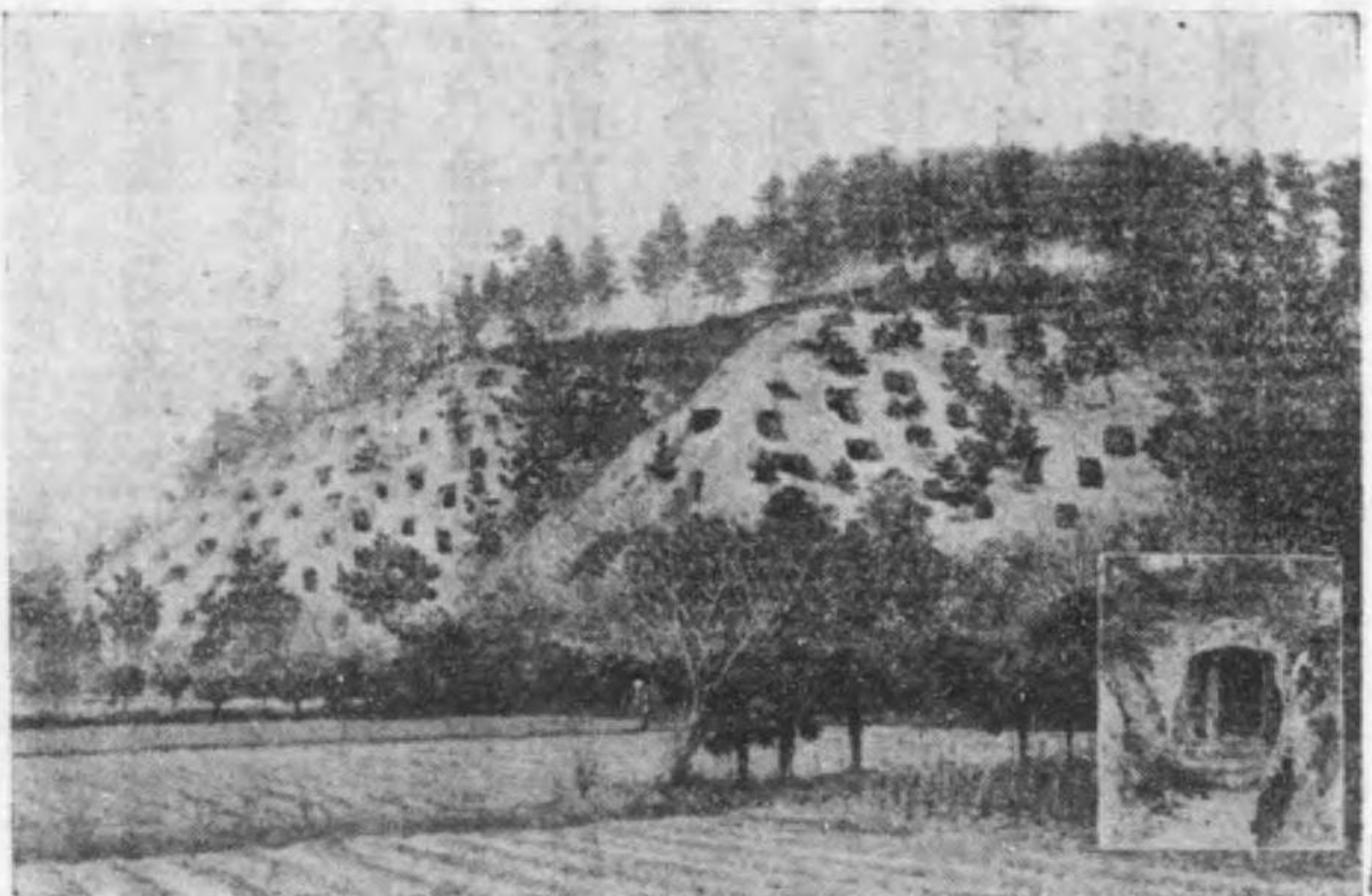
長原孝太郎氏寫生 東京帝國博物館藏

り、後方は圓くなつて居る。此を前方後圓の墳、または車塚といふ。古墳の周圍には濠を繞らしたのものもある。次に位置から云ふと平地に築いたものもあれば、山の上にあるものもあれば又山腹の傾斜面にあるものもある。(日本考古學、中澤澄男、八木興三郎共著、二二二―二三八。考古學、高橋健自著、六〇―六一)

古墳の内部は石室に成つて居るものがある。此を石槨といふ。車塚の前方部は何方に向いて居るといふ定りはないが、石槨の入口は大概南に向いて居る。石槨の口から奥の廣い所に通ずる路のあることがある。此を羨道といひ、奥の廣い室を玄室といふ。稀には殆

穴の構造

第二〇 穴の集群
武蔵國金比郡西見村吉見穴(俗稱百穴)



五姓田芳柳氏寫生 東京帝國博物館藏

ど羨道の無いやうな古墳もある。玄室は多くは一室であるが、二室も三室も同一の方向に同一の平面上にある場合がある。石槨の用材は左右兩側及び奥の壁面には大小色々の石が積まれて居るが、天井は巨大なる平石を使用したものが多い。玄室の床は丸石又は砂利を敷いたものがある。

横穴は山腹に掘込んで造られて居るが、矢張り石槨の如く羨道と玄室とあつて、玄室には奥左右の側壁に接して一箇所或は二箇所以上の段がある。天井は丸みをつけて削り取り、床には細

現存の古墳

い溝がある。此段の上は主として屍體を安置した所で、稀には石槨の奥壁に接して石棺を横に置いた様に棺を造り出したものもある。(考古學一六一、六六。日本考古學二三二—二三六)

今現存の古墳について二三の例を示すと、筑後國久留米市日輪寺にある古墳は、現在に於ても比較的大形の封土を有し、略ぼ南面の瓢形墳で、現狀に於て主軸の長約九十尺、前方の幅五十尺、後圓部と認めらるゝ部分の徑七十尺、高約二間ある。又肥後國飽託郡小島町千金甲高城山古墳中丙第二號古墳は比較的緩なる傾斜面に築かれた圓塚で、徑約三十五尺、高十四尺ある。(京都帝國大學文科大學考古學研究報告一第一冊一三〇頁) 次に余の調査する所によると、大和國高市郡高市村大字島莊の平地に露出せる石槨は、其羨道部が土中に埋没して正確なる測定は困難であるが、長凡四十五尺、幅七尺餘、高十尺餘ある。其石材の巨大なる實に驚嘆すべきものである。

文献上に現はれたる古墳

古く文献に現はれたる古墳では、筑後國風土記に、上妻縣、縣南二里有筑紫君磐井之墓墳、高七丈。周六丈。墓田南北各六十丈東西各四十丈。石人。石盾。各六十枚。交陳成行。周匝四面云々とあるは、非常に大なるものである。其形容或は事實に相違する所ありとす

るも、其必らずや巨大なるものであつたことは現在せる大和の垂仁天皇の御陵より推すも明かである(筑紫國造盤井の墓—考古界第二卷第一號)

古墳墓の表飾
野美宿禰の墓

盛土を施した墳墓の表面は、小石を以て葺いたものもある。今日は完全に残て居るものはないが、小さい丸石を以て表面全體を敷きつめたものと思はれる。少しく古墳を實見したる者は、其近邊に残石の散亂して居るのを容易に發見するのであるが、記録上に於ても之を徵する事が出来る。即ち播磨風土記揖保郡日下部里の條に昔土師努美宿禰往來於出雲國。宿於日下部野。乃得病死。爾時出雲國人來到。連立人衆。運傳上川磯。作墓山云々とある。

墳丘の封土は小石の外、埴輪を以て表飾されて居るものがある。而して葺石及び埴輪の兩方を施したもの、或は其何れか一方だけのものもある。

さて埴輪は赤褐色素焼製の圓筒、人、馬、家屋等にして封土の周圍に樹て繞らしたものである。埴輪の起源に就いては、日本書紀垂仁天皇紀に、天皇詔して殉死の風を禁じ給ひ、後、野見宿禰の建議を採用し、埴輪を以て殉死に代へ、皇后日葉酢媛の御墓に始めて埴輪

埴輪

第一二圖 埴輪土偶(裝武)
上野國新田郡世良田古墳發掘



東京和野田千吉氏藏

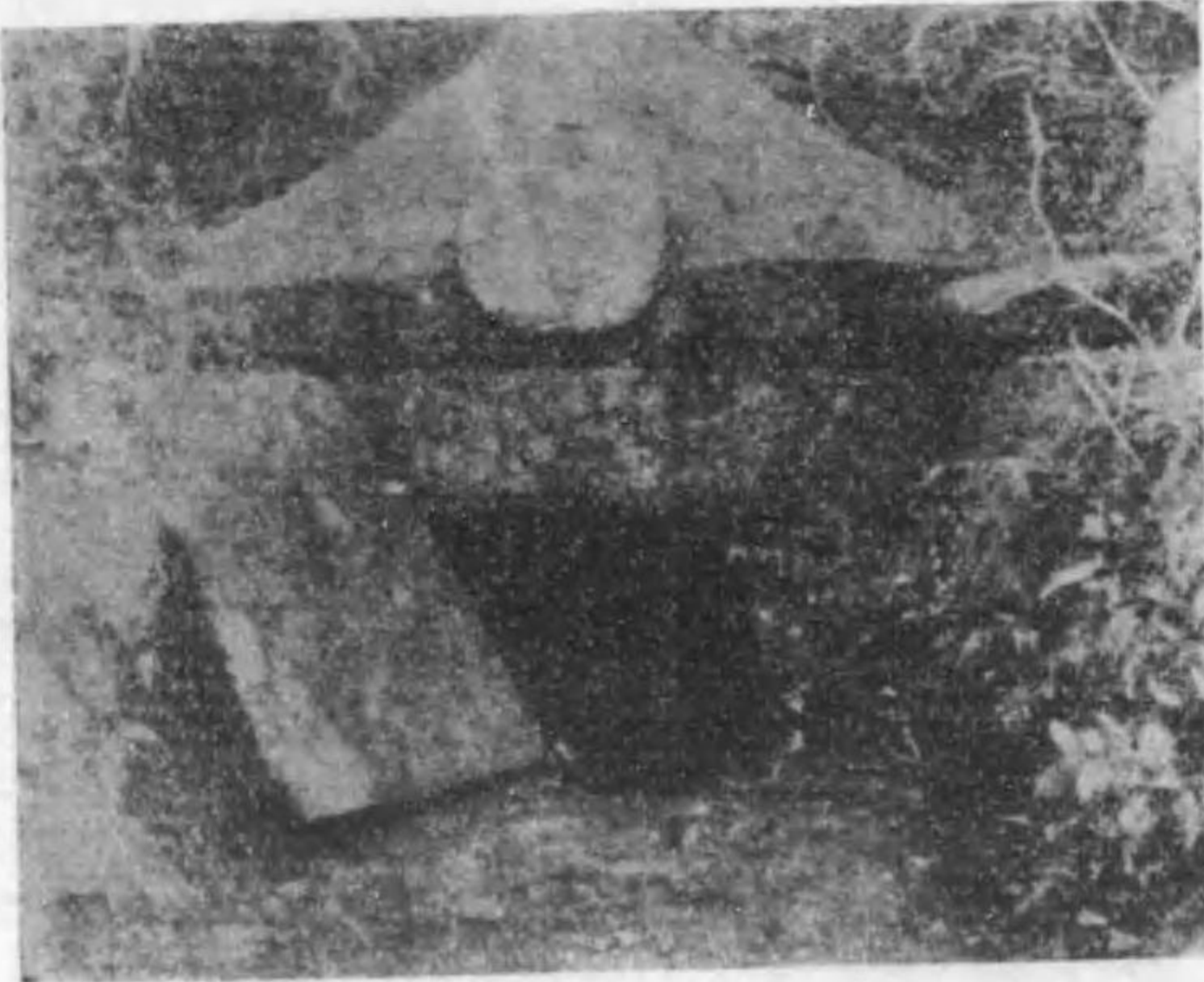
八〇
を樹て給ひ、此時
命を下して以後陵
墓には必ず是土物
を樹て、人を傷く
ることなからしめ
られたとある。然
し此を以て直ちに
埴輪の起原となす
事は出来ないが、
其製作の動起に關

する卑見は後にいふ。

埴輪圓筒は古墳の周圍に玉垣のやうに樹て、土留めにしたものであらうといふ説もあるが、埴輪中最も多く發見せられ、其形も甚だ大なるものがある。埴輪土偶は男子又は女子を

棺の種類及
び形状

第二二圖 古墳家形石室
肥後國玉名郡江田村

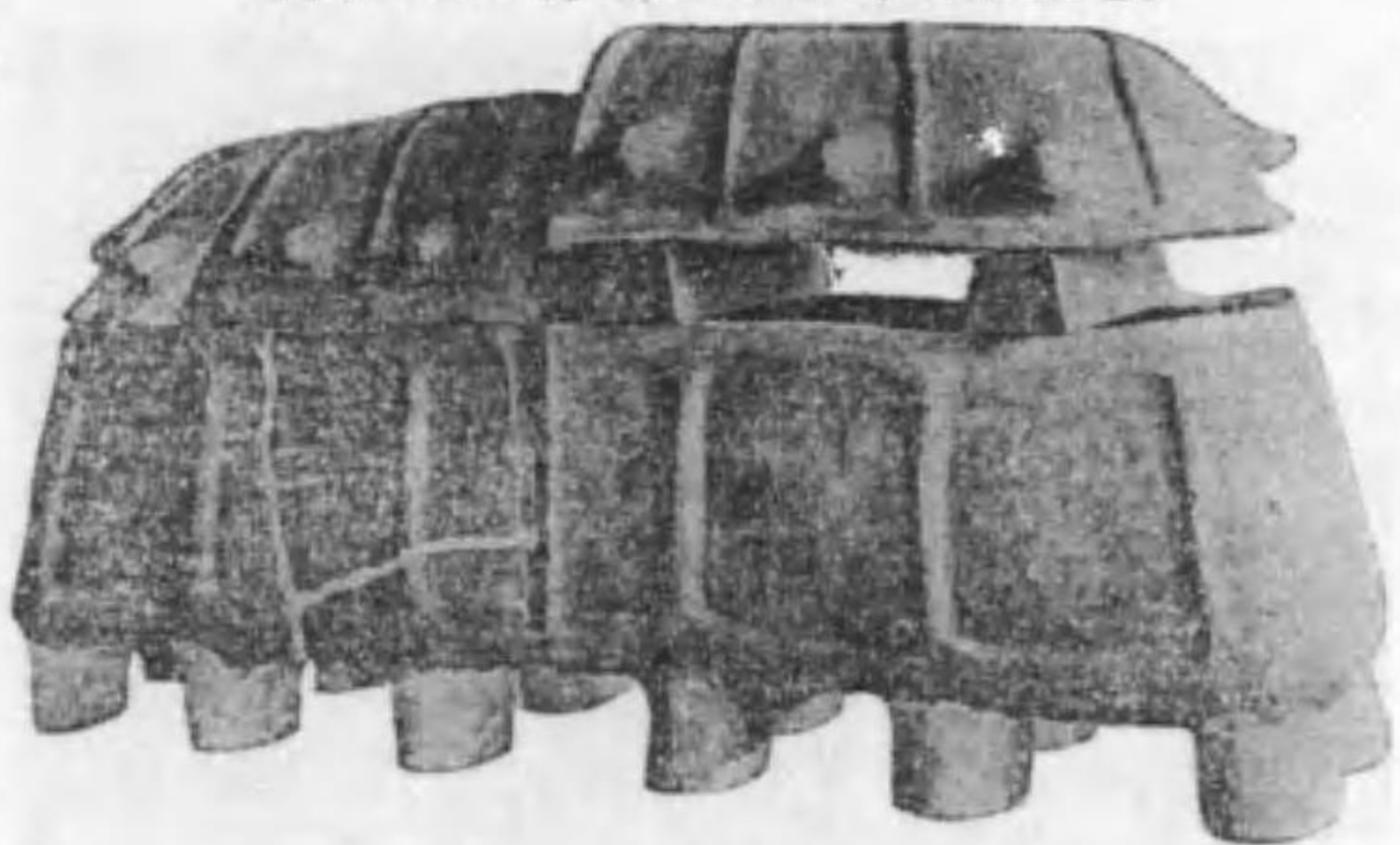


第四章 文獻及び古墳に現はれたる禮器觀と未來觀

象つた人形で、男子は武裝したもので或は平服を着けて居るものがある。大小種々あるが、二三尺位のもの最多く、四尺以上のものは稀である。埴輪馬は土偶に亞いで多く發見される。家は甚だ稀で、其高三尺内外が普通のやうである。埴輪の器物は、靴ユキ或は鞆トモなどの武器を現はしたものが多く、稀には楯もある。要するに盛土のある古墳は葺石を施し或は埴輪を以て表面が飾られて居る事を記憶して置かねばならぬ。

次に古墳の内部に納める棺は、木製、石製、土製等の種類がある。木棺は最も古く、又廣く使用せられたものと考へられるが、朽腐して稀に小殘片或は釘等を遺して居るのみで、其全形を知るべきものがない。故に其形状は不明である。石

第二 家形陶棺
美作國田郡大野村野形發掘



東京帝國博物館藏

棺は石材を以て上下四方より組み合せて造つたもの、或は大なる石材を刳抜いて造つたものもある。形の上から見ると單純な箱のやうなものや、一節の竹を割つたやうなものもあるが、家形と舟形のものが多い。肥後國玉名郡江田村にある石室は、普通の家形石棺の形を現はして居る土製の棺も家形のものが多いが、従來は之を陶棺と呼んで居る。東京帝國博物館に陳列せる美作國英田郡大野村大字野形發掘の陶棺は蓋に勾配があり、身に若干の脚がある家形の

一列である。

古墳墓には棺と共に多くの器物が副葬されて居る。飲食物を盛る器は、主として土器ハゼノツツと陶器スエノツツと二種あつて之を總稱して齋瓮といふが、今此等を列挙すると凡そ十一種ある。

副葬品の種類

- 一、杯 酒或は其他の食物を盛るに使用したもので、蓋杯、片杯、高杯などの種類がある。
- 二、盤 淺平い器をいふ。
- 三、盃ハシ 杯よりも深く酒水等を飲むに用ふるもの。
- 四、卍マシ 酒其他の飲料を容れて置くもの。
- 五、甕 卍より大なるものを云ふ。酒を醸造する時に用ひたものであらう。
- 六、甕ハシ 此は水指の如きものであるが、未だ其用途が明瞭でない。
- 七、瓶 卍の様で、頸が特に細く口も小さい、恐らくは液體を納れるものであらう。
- 八、平瓶 口が横にあつて體が平扁である。
- 九、提瓶 瓶の類で轆轤を使つた圓い面が垂直になつて其上部に口が付いて多くは一方が膨れて居る。扁平な器である。大抵は一對の耳が兩肩に付いて居る。酒や水などの飲料を容れて携帯したものであらう。
- 一〇、横瓮 俵の形をしたもので俗に俵壺といふ。酒など運搬するに用ひたのであらう。
- 一一、裝飾付齋瓮 祭器として用ひられたものであらう。(考古學一六九、七二、七四、七セ)

次に銅鏡、刀劍、斧、弓矢、甲冑、馬具、裝飾用玉類、金屬製裝飾具、又稀には農工具等も棺の内外に於て發見される。

已上列舉したものは、總て實用品であるが、往々葬儀用として特に作られた石製の模造品が發見される。其中で最も多く發見されるのは石製の刀子で、時としては、一古墳から數十或は數百も出た例がある。此外劍、斧、鑿、鏃、楯、鏡、或は下駄などの模造品も發見さるゝ事がある。上來述べたる所は、我古墳墓に關する大體の説明であるが、其構造、副葬品等は總て當時の思想より直接影響を受けたものである。即ち當時の人民が其靈魂觀或は未來觀を、文字によらず行爲によつて表示したもので、此方面を觀察すべき最も貴重なる資料である。故に吾人は進んで其意義を研究せねばならぬ。

古墳の構造は、盛土のものが正則で、横穴は自然の丘陵を利用したる便法と見ることが出来る。さて既に述べたる所によつて明瞭なる如く、巨大なる墳丘を造り、内に石柵などを築いて死體を納めることは、要するに祖先の死體を丁寧に保存し、且つ尊敬するの意思よりなされたるべきは毫も疑ひなき所である。又直接死體を納める棺其物の形に家形の多

古墳墓の構造及び副葬品に現はれる思想たる未來思想

くあるは、確かに死者の住宅としての目的を持つて居るものと考へられる。即ち彼等は死後生前に類したる生活を営むものと考へたのである。此考へよりして、又副葬品の必要が起つたのである。副葬品の土器の中には食物を盛る日用の器物の多く發見せらるゝ事實は、當時飲食物を盛て副葬したることを證明するものである。又日本書紀推古天皇二十年二月の條を見るに、堅鹽媛を檜隈の大陵に改葬したるとき其靈に奠られたる明器、明衣の類萬五千種なりとある。

斯の如き思想の下に死者が生前に使用したる各種の實用品或は其他の物品を死者の身邊に埋納したるが故に、吾人は今日其行爲の動機を考へ得るのみならず、當時の文化の程度を知るべき唯一の材料を得ることが出来るのである。

古墳墓には往々裝飾模様を施したるものがある。斯の如き裝飾は、副葬品と相俟つて考察すべきものである。さて裝飾のある古墳、横穴は筑後と肥後の兩國に於て多く發見され、本土に於て發見さるゝ事は頗る稀である。今其裝飾模様を大別すると、實物の模寫と純模様のものとの二種ある。實物即ち副葬品を模寫したるものでは、刀劍、盾、鞆等の圖が

古墳墓の裝飾模様と其意義

最も多い。斯様な圖は、石室の壁面、或は入口の外邊、石棺の蓋上或は石室の内部に特に設けられたる柳壁面などに施されて居る。(京都帝國大學文科大學考古學研究報告―第一冊) 而して楯、刀劍等の武器が最も多く描寫され、且つそれが死體に接近したる箇所、或は入口に施されてゐるのは、死者所用の爲めと云ふよりも、寧ろ死者を守護する爲めに副葬されたものであらう。楯或は刀劍其物に或神靈の存在が信せられて居た事は、文獻に徴するも明かなるが故に斯の如き信仰のありしは當然であらう。

さて我が古墳墓より發見さる、副葬品の性質を一般的に觀察すると、直接支那風俗の影響を蒙つて居る事が著しく視はれるのである。さきに引用した推古紀の明器、明衣及び孝德天皇二年の詔に「瓦器を以て古の塗事芻靈之儀に合すとある、皆これ支那の古典に其徵證の歴々たるものである。即ち禮記檀弓に「塗車芻靈、自古有之」とあるを鄭注をなして「芻靈、束茅爲人馬。謂之靈者神之類」と云つて居る。又文選の「祭古冢」の文を注して翰曰く「芻草也。言束草爲人馬。塗車以塗爲車。即明器也」とある。之を要するに支那に於ては周代より葬式に明器及び人器を副葬したのである。人器は實用品で、明器は死者

我副葬品の
由來と其意
義

と共に埋むる目的の爲め、特に造られたもので、實用に堪えざるものである。

又古墳墓の表飾として樹てられたる埴輪も支那秦漢以後の風俗に淵源せるものなるを思はしむ。即ち唐の封演が封氏聞見記に

秦漢以來、帝王陵前、有石麒麟、石辟邪、石象、石馬之屬。 人臣墓前、有石羊、

石虎、石人、石柱之屬。皆所_レ以表飾墳墓。如_レ生前之儀衛_ト耳

とある。我が國に於ても石人、石馬の類を以て墳墓を表飾したる例は、筑後風土記に筑紫國造磐井の營みし墳墓に石人、石盾、石猪、石馬等を置きし事につき記載あるを始め、現に筑後豊後地方に其遺物が殘存して居る。(釋日本紀卷十三、筑後風土記逸文及び柴田常惠編「筑後石人寫

眞集參照)

斯の如き風俗は、必ずしも支那や我が國のみに限ぎられてゐない。イングランドのヨークシャー地方の古墳に於ても武器、器物、裝飾品或は動物的食料品の遺物が屢々死者と共に發見さるのである。(Forty years Researches in British and Saxon Burial Mounds of East Yorkshire.

By J. R. Mortimer.)

第四章 文獻及び古墳に現はれたる靈魂觀と未來觀

埴輪の由來
と其意義

イングラン
ドに於ける
類似風俗

伊太利古民
俗の類似風

クリート島
に於ける類
似風俗

埃及に於け
る類似風俗

第二編 神道の成立と原史時代の宗教思想

八八

又エトラスカン人 Etruscans の風俗にも同様の思想がある。エトラスカン人は羅馬に共
和國政治が勃興する以前に於ける伊太利中部の住民で、餘程文化の進んだ人民であつた。
彼等の遺した最大なる古墳は、徑二百四呎、高四十五呎以上ある。而して是等の古墳より
發掘される副葬品には、精巧なる金製裝飾具、優美なる家具、花瓶、鏡、輪、寶石細工及
び青銅製肖像等がある。(The Great Religions. By James Freeman Clarke. Part II. P. 322, 323.)
文學博士濱田耕作先生の調査によるとクリート島のクノソス Chosos やザフェール、パプ
ラ Zafel Papura 又はインバタ Iaputa の古墳にも同様の風俗がある。亞米利加ネブラスカ
洲のオマハ族 Omaha tribe の如きも、最上の衣服を死者の上に置き、或は武器及び楯等を
死者と共に葬る。其他類似的の風習は到る所に發見されるが、未來觀を最もよく具體的に表
示したるものは蓋し埃及の古墳であらう。

埃及人は豊富なる經驗と非常に發達したる工藝技術を以て此種の民間信仰を遺憾なく現
して居る。即ち死體の滅却を防ぐ爲めに、又其飢餓と渴を癒すが爲めに、あらゆる努力を
盡して居る。上長者の死に對しては、一層大なる尊敬の意を現はす爲め、苟も其墳墓内に

埃及のミイ
ラ

於ける死者の生活を縮め、或は其幸福を破壊するが如き機會を防禦せんが爲めには、最善
の方法が講せられて居る。即ち先づ死體は注意周到なる學術的方法によつて木乃伊となし
て其潰滅を防ぎ、第二には之を水害なき最も高き場所に安置して其流失の恐れを無からし
める。此外墳墓内へ他人の侵入を防ぐ爲めには、巧妙なる建築法を應用して其入口を巧み
に隠して居る。更に又木乃伊の外に死者の像を多く造つて墳墓内に納めて居る。これは彼
等の思想によると、死體其物の保存だけでは物足らない。萬一其死體が滅却した時は、其
靈魂も滅亡せざるを得ない。故に死者の肖像を多く作つて斯の如き不慮の場合に備へんと
するのである。されば時としては一墳墓内に於て驚くべき多數の肖像が發見せらるゝので
ある。要するに死者の像を多く作る事は、其靈を不滅ならしめんとする彼等の思想より起
つて居るのである。(The History of Ancient Egyptian Art. By G. Perrot Vol. I. P. 134)

要するに、斯の如き風俗は、宗教思想發達の過程に於て何れの人種も必ず經過すべき一
の階梯で、死後に於ける靈魂の存在を信じ、而して其靈魂は生前に類する或生活状態を送
るものならんとの考が、根本的共通思想であらう。斯の如く死後、靈魂の存在を認めて之

に奉仕するからには、何等かの形式によつて之を祀つた筈である。即ち我が原史時代に於て死者の靈を如何にして祀つたであらうかと云ふのが、吾人の問題となるのである。古墳墓内に發見さるゝ裝飾付齋甕の如きは果して何の爲めに副葬されたのであらうか。此土器は何れの點から考へても實用品ではない。又支那の明器の如く實用品の模造でもない。恐らくは死者の靈を祀つた祭器であらう。然し墳墓を離れて別の所に廟を作つて祭祀を行つた事もあつたやうである。即ち日本紀皇極元年紀に是歲蘇我大臣蝦蟇立已祖廟於葛城高宮而爲八佾之舞遂作歌曰云々とあるは其一例であらう。然し身分の卑ひ者は、別に祖廟等を設けず便宜自家に於て祭祀を執行したものであらう。尙此等の問題に就いては、後段更に研究の機會があらうと思ふ。

第二節 文獻に現はれたる靈魂觀

吾人は更に文獻に徴して當時の靈魂觀の研究を進めたい。日本書紀及び舊事記によると、日本武尊崩御の時、其神靈は白鳥と化り給ひしといふ傳説がある。舊事記の文は紀と異なる

日本武尊の神靈白鳥と化り給ふ

所なければ、左に書紀の文のみを擧げると

詔群卿命百寮仍葬於伊勢國能褒野陵時日本武尊化白鳥從陵出之指倭國而飛之群臣等因以開其棺櫬而視之明衣空留而屍骨無之於是遣使者追尋白鳥則停於倭琴彈原仍於其處造陵焉白鳥更飛至河內留舊市邑亦其處作陵故時人號是二陵曰白鳥陵然遂高翔上天徒葬衣冠(日本書紀卷七景行天皇紀四〇年)仲哀天皇元年冬十一月乙酉朔詔群臣曰朕未逮千弱冠而父王既崩之乃靈化白鳥而上天仰望之情一日勿息是以冀獲白鳥養之於陵域之池因以觀其鳥欲慰顧情則令諸國俾貢白鳥(仲哀紀元年)

とある。此傳説によると、日本建尊の神靈は、伊勢國能褒野の陵より白鳥と化りて抜け出で、先づ倭を指して飛び、琴彈原に降り給ひ、更に河内に飛びて舊市に留まりましたが、最後に高く天に上り給ふたのである。此によつて吾人は、我が上古にも、死後靈魂が鳥に化すといふ信仰の存在して居つた事が認められる。然しながら、茲に注意を要すべきは、尊の靈が鳥と化つて天上に運ばれるといふことが所期の目的とはなつて居ない事である。景

行紀に於ては、白鳥遂に高く翔て天に上り、徒らに衣冠を葬るとあるが、仲哀紀には父王の神靈白鳥と化りて天に上り給ひたれば、白鳥を獲て陵域の池に養ひ、其鳥を見て顧情を慰めむと欲し給ひ、諸國に令して白鳥を貢らしめられたとある。即ち此によつて考ふる時は、御靈の永く陵墓内に留り坐さんことを、或は肉眼の届く所に坐まざらん事を願はれたのである。故に此傳説には靈魂について昇天と墓所停住の二様の思想が現はれて居る。

さて靈魂が鳥に化し、或は鳥に於て其存在を持續すると云ふ觀念は、やがて鳥によつて彼岸に運ばれるといふ信仰と結合して鳥船神話の起源をなすものであるといふ説は、シユルツ、フロベニウス、ウント其他の學者の解する所で、穩健なる説であらうと思ふ。然し我が上古に於て鳥船神話の存在を示すものは、甚だ薄弱で僅かに天若日子の神話と關聯して其片影を認むるのみである。天鳥船—米田庄太郎—藝文八ノ二、三、一、大正六年

要するに我が上古に於て靈魂が鳥に化すといふ信仰は、廣く行はれた信仰ではなく、僅かに混在して居つた思想に過ぎないと思はる。然し靈魂昇天の思想は萬葉集にも散見して居る。今其一二を例示すると、弓削皇子薨去の時に東人のよめる歌に

鳥船神話と靈魂昇天思想

萬葉集に現はれたる靈魂昇天思想

安見知之。吾王。高光。日之皇子。久堅乃。天宮爾神隨。神等座者其乎霜。文爾恐美。查波毛。日之盡。夜羽毛。夜之盡。臥居雖嘆。他不足香袋(卷二、二〇四番)

と云ふのがある。其反歌に

王者。神西座者。天雲之。五百重之下爾。隱賜奴

とあり。又柿本朝臣人麿呂のよめる歌に

皇者。神二四座者。天雲之雷之上爾。慮爲流鳴。

とある。即ち天宮爾神隨神等座者。天雲之五百重之下爾。隱賜奴。雷之上爾慮爲流鳴等の句は、皆神魂の昇天を云へるものである。さて東人の歌は文武天皇の時に、又人麿の歌は持統天皇の時によめる歌で、何れも佛教渡來以後の作であるが、佛教渡來以前の思想を繼承したものを見ることが出来る。故に橘守部が宣長に反對して靈魂昇天説を主張したのも理由あることである。

然し靈魂昇天の思想は廣く信せられて居つたものとは思はれない。之に反して最も一般的であつたものは、靈魂は死後墓所に永住するものであると云ふ觀念であつたと思ふ。こ

靈魂は墓所に永住するといふの思想

は古墳墓研究の結果より推定し得るのみならず、書紀神代卷に「伊弉諾尊神功既畢。畢。靈運當遷。是以構幽宮於淡路之洲。寂然長隱者矣。」とあり。又古事記に大國主命の國避の傳説中にも「僕は百たらず八十隈手に隱而侍ひなむとある。共に墳墓に隠れ坐せしことを意味せるものであらう。又天武天皇の時河内王を豊前國鏡山に葬つた時手持女王の歌にも

王乃親魄相哉。豊國乃鏡山乎。宮登定流。

豊國乃。鏡山之。石戸立。隱爾計良思。雖待不來座(萬葉卷三)

とある。又萬葉集の石田王を葬し時丹生王の作りし歌にも隱久乃始瀬乃山爾神左備爾。伊都伎坐云とある。其他類似の歌は枚舉に遑なきまでに多くある。要するに斯の如き歌は皆死者を葬つた墓所に其神靈が鎮座すといふ觀念から詠まれた歌であるのみならず、さきに述べたる昇天思想も天皇王子の如き高貴なる人格の神靈であるから「神にしませねば」といふ言葉を以て崇め奉りたるため、其相稱的關係から天と云ふ言葉を以て詠まれたのかも知れないのである。故に靈魂が昇天すといふ思想は、案外に薄弱で、其反對に靈魂の墓

和魂、荒魂

大國主の幸魂

所に停住すといふ思想の方がより古く且つ一般的であつたと思ふ。

我が古記によく現はれて居る和魂、荒魂の思想も我が上代に於ける靈魂觀の一面として考究すべきものである。和魂は幸魂或は奇魂とも呼ばれて居るが、古く既に大國主神の出雲經營の神話中に

今理此國唯吾一身而已。其可與吾共理天下者蓋有之乎。干時神光照海。忽然有浮來者。曰。如吾不在者。汝何能平此國乎。由吾在故。汝得建其大造之績矣。是時大已貴神問曰。然則。汝是誰耶。對曰。吾是汝之幸魂、奇魂也。大已貴神曰。唯然。迺知汝是吾之幸魂、奇魂。今欲何處住耶。對曰。吾欲住於日本國之三諸山。故即營宮彼處。使就而居。此大三輪之神也。(日本書記卷一書)

とある。此傳説は大已貴神、即ち大國主神が少彥名命と共に出雲地方を平定したる後、此地方の統治につき神の助を求めたる事件に關するものであるが、古事記には幸魂奇魂は見えて居ない。即ち

(前畧)於是大國主神愁而告。吾獨何能得作此國。就神與。吾能相作此國耶。是時有

光^レ海依來之神。其^レ神言。能治^ニ我前^一者。吾能與相作成。若不^レ然者國難^レ成。爾大國主神曰。然者治奉之狀奈何。答言。吾者伊^ニ都岐奉干倭之青垣東山上^一。此者坐^ニ御諸山^一上神也(古事記神代上卷)

とある。此古傳に於ては、書紀に所謂大國主神の奇魂、幸魂が、彼の祈願に應じて海上より忽然として現はれた所の神となつて居るのである。斯く兩者の傳説には、多少思想の混亂があるが、此間に於ける重要な観察點は、靈魂は肉體より游離すべしとなす觀念と、靈魂を神格化して崇拜する信仰の存在を認め得べき點にあると思ふ。更に言ひかへれば、此傳説の裏面には神格化されたる靈魂の客觀的存在が認識されて居つた事と考へらる。

此觀念の根本思想は、野蠻人の夢の解決にも現はれて居る。即ち夢中に現はるゝ種々な事件は、靈魂が睡眠中肉體より游出して其事件の現場に臨み、親しく聞睹し或は自から其事に従事するものなるべしとの考へは、廣く野蠻人の信ずる所である。我が上古に於ても、夢に神の御告を受けたる事は、後章に説くが如く、屢文獻に見えて居る。故に夢が神人交通の方便でありし事は明かである。

靈魂の客觀的存在の認識

大國主神の啓示と夢中の神告

荒魂

さて大國主神と少彥名命との關係説話に現はれたる思想の起原は、靈魂出游の觀念と、夢中に神告を受くるといふ信仰に基礎を有して居ることと思はる。「吾はこれ汝の幸福奇魂なり」との答に對して大國主神は、然り廻ち知りぬ「汝はこれ吾が幸魂奇魂なり」と問答せるは、夢中の事件なるが如く思はる。次に古事記の傳説には夢とは何等關係の認むべき記事なきも、紀の一書の傳説と、夢中に神告を受けると云ふ觀念の古くより存在して居る事より考察する時は、夢中に出現の神を直ちに神と信じたるものにあらざるかとの推論を可能ならしむるものと信ずる。要するに大國主神の幸魂奇魂に關する古傳説其物に現はれたる思想は、其發表の形式が不徹底であるが、此傳説の作者——作者といふも、個人的の作者を意味するのではなく——即ち此古傳に共鳴する者に與へられたる大國主神の啓示が本傳説の根本思想であらうと思ふ。

荒御魂は和御魂と相對して信仰されて居る。即ち日本書紀仲哀紀の神功皇后征韓の段に「既而神有^レ誨曰。和魂服^ニ玉身^一而守^ニ壽命^一。荒魂爲^ニ先鋒^一而導^ニ師船^一。即得^ニ神教^一而拜禮之。因以^ニ依網吾彥男垂見^一。爲^ニ祭神主^一。(中略)既而則爲^ニ荒魂^一。爲^ニ軍先鋒^一。請^ニ和魂^一。爲^ニ

ミナト
王船鎮

とある。又同皇后が凱旋の時、海上で船が進まなかつたので務古の水門に還つて之をトヒ給ひしが其時天照大神の誨に我の荒魂をば皇后に近くべからず。當に御心廣田國に居らしむべしと宣らせられて居る。

されば和魂は柔和にして靜かに理め鎮むる徳ある靈で、荒魂は男性的なるものと理解されて居たことが判る。要するに和魂、荒魂は神格の両面として信仰されて居つたものであるが、其根本には、彼等の靈魂觀の存在を認めねばならぬ。故に和魂荒魂は靈魂の二元觀より生じたものであると思はれる。

靈魂の二元觀は、野蠻人の信仰に於て既に其萌芽を見ることが出来る。即ち南洋のフィジー人は、靈魂を暗き精靈と、明き精靈とに區別し、暗きは影の如きもので、地獄に至り、明きは鏡或は水に於ける反射の如きもので、人の死したる時には肉體と共に留ると信じて居る (Primitive Culture By E. B. Tylor. Vol. P. 484)

又北亞米利加のアルゴンクイン Algonquin 人の信仰にも強烈に此思想が現はれて居る。

天照大神の
荒魂

√
靈魂の二元
觀

靈魂二元觀
の起原

靈魂の不滅
と其祭祀

即ち彼等は一の靈魂が身體より出て、夢を見、他の靈魂は内に残ると信ずる。而して死したる時は、一魂肉體と留り、他の一魂は死人の國へ去るものと信じて居る。彼等が死者に食物を供へるのは其肉體と共に留る所の魂に奉るのである。(同上四三九頁)

結局如上の研究を基礎として我が上古に於ける靈魂觀と其祭祀を歸納的に説明すれば、次の如くいふ事が出来やうと思ふ。即ち靈魂は不滅にして肉體と共に墓所に永く留まるものと信じた、従つて墓所に於て祭祀が行はれたのであるが、他の一面に於ては靈は必ずしも一所に停住するものでないと考へたるが故に、墓所以外の場所に其靈を招請して祀つたのであらう。

第五章 天孫降臨の傳説と皇祖崇拜の意義

天照大神、御子天忍穗耳尊を降して豊葦原の水穗國に王たらしめんとなし給ふ。是に於て尊は、先づ天浮橋に立つて中國の形勢を御覽になつた。然るに、いたく擾亂してありければ天降まさず、還つて其狀を天照大神に奏せられた。されば天照大神、高皇産日神とは

天孫降臨の
先驅

かりて群神を天の安河の河原に集め、評議せしめられたのであつたが、其結果天菩比神を遣はして平定せしめんとなし給ふた。然るに彼は大國主神に媚附て永く復命しなかつた。大神は、よつて又、天若日子を遣はされたるに、彼も亦歸つて來ない。故に天照大神は更に又群神とばかり最後に經津主神及び武甕槌神を遣はされた。此二神即ち武威を振ひ遂に平定の功を奏したのである。

天孫降臨

已上は天孫降臨前に於ける我が國土平定に関する古傳の梗概である。

斯くて中國彌々平定されたれば、天照大神は天孫瓊瓊杵尊を高天原から日向の高千穂峯に天降しましたのである。

即ち此古傳によれば天孫は高天原から降りましたのであるが抑も其高天原は何處であらうか。徳川時代に畫かれたる天孫降臨の圖を見ると、天孫が五伴緒の諸神に護られ、雲に駕して天より天降り給ふ所が描出されてある。然しながら、今日に於ては學問上の常識ある者は、何人も此挿畫を以て満足することは出來ない。そこで地球上の何處かに其地點を求めたくなる。そこで又海外だらうか海内であらうかとの疑問も起つて來る。幸ひ此疑

高天原の所在に關する諸説

高天原は大
陸地方にあ
りしならむ

問が解決されるれば更に其何れの所であるかを分明ならしめねばならぬ。蓋し高天原の所在地は我が國史の淵源に關する重大問題で、我が國民の宗教思想を研究する上に於ても、此事が明瞭になつて居れば裨益する所が少くないと思ふ。かゝる關係あれば、此問題については、古來種々なる臆説が試みられ、或は之を南洋方面に求めんとし、或は又近畿地方なるべしとの説を樹てたる學者もある。其他色々の想像説があるが、未だ定説を見ないのである。吾人も亦此問題を決定すべき何等新たな材料をも持て居らぬが、最近喜田文學博士は、天孫種族の祖國なる高天原は今日之を指定する事は出來ないまでも、其れが大陸の方面にあつたことは、殆んど疑ひを容るべからざる事實であらうと云はれて居る。(日本民族概論—文學博士喜田貞吉述—一四頁) 同博士は如何なる事實によつて此結論に達せられたのであるか。それに就いては別に説明された所がない。然し吾人は下の如き事實を基礎として今日に於ては、此説を以て最も穩當なるものと考へるのである。即ち我が上古の遺蹟である古墳墓より發掘さるゝ遺物には大陸的性質のものが少くない。漢鏡又は刀劍其の他の器物に施されたる模様には其著しきものがある。又亞細亞大陸の西端に位せる朝鮮に最も近い

天孫民族の
渡來

九州地方には大陸的古墳墓の遺蹟が多く残存して居る。此事實は天孫降臨の古傳説と相俟つて天孫民族が此方面より渡來したることを説明すべきものと思ふ。又近時此等の大陸的文化を徵すべき古墳に於て先住民族の遺物が往々發見されるのである。此事實は天孫民族と先住民族の接觸を語るべきものである。此等は即ち吾人が喜田博士の結論に賛成する重なる理由である。故に吾人は暫らく其説を以て満足せんと思ふのである。従つて天孫の降臨は、天孫民族の渡來を意味する者となる。天孫民族の渡來は此時一度に限つたものでなく屢々繰り返へされたであらう。けれども天孫降臨は、最も大なる民族の移住で、喜田博士の所謂大舉移民と考ふべきものであらう。(古史管見—文學博士喜田貞吉述—二五頁) 此れ我が國史の出發點が天孫降臨に置かるゝ所以であらう。かくて大陸より渡來したる天孫民族は、即ち先住の土族(第三章石器時代民族論參照)を同化融合して我國固有の日本民族を形成したのである。かくいへば甚だ簡單であるが、天孫民族の意義については二様の解釋がある。

天孫民族は如何なる民族であるかといふ問題に對する一般の解釋は日本民族即ち天孫民族であるといふ甚だ漠然たるものであるが、其裏面には天孫降臨と同時に渡來したる民族

天孫民族と
は何ぞや

の子孫であるといふ意識が自から含まれて居るものと思ふ。此説は單に一般世俗の信ずる所たるのみならず、又多くの學者も斯く信じつゝあるものと思ふ。

第二説として喜田博士の説を紹介する。即ち博士は其主宰せる「民族と歴史」第一號に於て日本民族の性質を説明するに柑橘栽培の例を以てせられた。博士は先住の土民を臺木に例へ、天孫民族を温州密柑に例へて曰く「其臺木がよしや柚子であつても橙であつても、根殻であつても、それは深く問ふ所ではない。齊しく温州密柑を以て之に接木したならば、悉く温州密柑の甘美な果實を結ぶ。其の培養の方法や、臺木の性質や、氣候の異同等によつて果實に多少の相違は免れぬとは云へ、それが齊しく温州密柑である事は、何人も之を否定せぬ。此の意味に於て余輩は我等が齊しく天孫民族であることを主張する。換言すれば我が日本臣中には、甚だ多くの接木されたる天孫民族が混在して居るのである。是を總稱して余輩は「日本民族」の語を用ひたい。」と即ち博士によつて頗る具體的解釋が與へられた次第である。然しながら一民族が渡來して其地の土族を同化融合し、新らたなる國民を構成する場合に其土族を自己と全く同じ性質に同化し得るといふことは一般に民族融

民族同化の
法則

民族の創造的綜合

日本民族の自覺せる國民性

天孫降臨に關する信仰の創造的結果なる綜合

合の歴史と法則に於て不可能の事である。

吾人を以て之を見るに、我が日本民族は、我が國土に於て創造されたる民族である。即ち民族の同化作用によつて天孫民族我が國へ渡來したる民族といふ意味に於けることも異り又勿論先住民の何れとも違つた新たな民族が創造せられたもので、之を吾人は創造的綜合といふのである。故に喜田博士の用ひられたる比喻は、我が民族同化の事實を客觀的に言ひ現はすものとしては、甚だ不適當である。然しながら國民の主觀的立場から皇室を中心として構成されたる我が國民性の同化作用と、其結果ともいふべき日本民族の自覺を示すべき比喻としては最適當なるものである。蓋し日本民族は其宗家とます皇室を中心として政治上にも、社會的にも、將た又思想の上にも統一せられたるのみならず、各民族が生理的にも融合せられて創造されたる國民であるから、彼等は互に其始祖を同ふする同胞であるといふ自覺に到達したのである。故に各自が主觀的に其祖先を天孫民族なりと考へるは當然であらう。

さて天孫降臨に關する信仰は日本民族其者が斯の如くにして創造されたる時に當つて始

めて出現したる信仰である。即ち天孫降臨の信仰は日本民族獨特の信仰にして我が國に於て創造されたもので、此場合に於ても種々なる宗教思想が綜合されて出來上つた創造的綜合と解するのである。而して此信仰たるや實に神道成立の心髓をなすものである。

天孫降臨について古事記の傳ふる所を見るに

爾天兒屋命。布刀玉命。天宇受賣命。伊斯許理度賣命。玉祖命拜て五伴緒支加て。天降したまひき。於是其遠岐斯八尺勾總鏡。及草那藝劍亦常世思金神。手力男神。天石門別神を副賜ひて。詔者。此之鏡は專我御魂と爲て。吾前を拜如伊都岐奉れ。次に思金神は前事を取持て爲政と宣り給ひき。

とある。此の古傳の解釋については先づ宣長其他の學者の説を擧げ、最後に吾人の解釋を試みんとするのである。伴緒は其部屬の長を云ふ稱であるから、即ち五部屬の長を引率して天降りましたのである。其とは天石屋戸の段の事を指して云ふのである。故に加能と訓ひのである。(古事記傳) 遠伎は書紀の石屋段に思兼神者、有思慮之智乃、思而、白曰、宜圖造彼神之象而、奉ニ招禱一也とある招禱と同じ意義の字である。又海神宮段に風招と

古事記所載の天孫降臨の傳説

天孫降臨に關する宣長其他の解釋
五伴緒

遠伎の意義

云へる事がある。風を招き發す方を云ふ。又萬葉集卷十七に鷹の放逸しと歎きてよめる長歌に、呼久餘思乃曾許爾奈家禮婆とあるも、彼の鷹を招き寄すべき由の無きと云ふのである。此等とかの招禱の字とを合せて考へると、凡て遠岐といふは、物を招き寄せむとする事で、こゝはかの石屋に隠れ坐せる天照大御神を招き出し奉りし行事を云ふのである。(國史綜覽稿—重野安經—卷八、二—三三) 八尺勾瓊、及び鏡は彼の石屋戸段に科玉祖命令作て眞賢木の上枝に取著けたる玉、及び科伊斯許理度賣命令作て中枝に取攀た八咫の鏡とである。當時此等の物を用ひて大御神を招禱奉りし故に遠岐し瓊、鏡と云つたのである。草那藝劍は、かの須佐之男命が八咫遠呂智を切り給ひし時に、遠呂智の尾中より得給ひし異物で、天照大神に獻せられた太刀である。鏡と劍との間に及と云へるは、上の遠岐斯の言が瓊、鏡へのみ係り、劍は異時の物であるから、それを隔むためである。(古事記傳) 常世思金神の常世は、かの天照大神が石屋に隠り坐して、世の間が常夜になりし時に功績を立てた神なる故にかく呼ぶのである。手力男神も同段に出て居る。天石門別神は、古語拾遺の同段に見えて居る神である。さて此等三柱の神は其現御身を天降し給ひしにはあらず、

八尺勾瓊及
び鏡

草那藝劍

常世思金神

手力男神
天石門別神

現身と御靈

(現身は高天原に留りて天照大神に仕へ奉り給ふ)、皆其御靈實(今御靈實と云ふは御靈の託る御體で、俗にはゆる神社の御神體である)を降し給ふたのである。故に上の五伴緒神と同列にはあげずして、今此に三種の御寶の次に連らねて云はれたのである。されば此三柱神の御靈實どもは、鏡にまれ、劍にまれ何にまれ、彼の八咫鏡に添え從へて降し給ふたのである。但し石門別神は古事記の石屋戸の段には見えて居ないから、此御靈は皇孫命の御門の守衛神として降し給ふたのであらむか。又彼五伴緒神は現御身なる故に、此次に各某氏之祖と註せられてあるが、此三柱は御靈體なる故に子孫をば擧げず、たゞ其鎮り坐す處を注して居る。此等によつて現身と御靈との差別ある事が判る。書紀に五部神をあげたれども、此三神をあげざるも、現御身に非るが故である。凡そ神には、現身と御靈との差別があるが、其分ちをいはず共にたゞ同じさまに某神と云へること。天照大御神をば、高天原に坐す現御身をも又伊勢に拜祭る御靈をも共に天照大神と申して其御名には差別なきが如く他神も然なるを、世世の識者差別を得辨へざるが故に事にふれてまぎらはしきことが多い。次に副へごあるは皇御孫命に副ること、賜は授賜ふのである。詔者ごあるは、

大神の御神
靈と御鏡
御靈の用と
體の差別

第二編 神道の成立と原史時代の宗教思想

一〇八

爲^{シテ}我御魂とあるにより天照大神の詔ふのである。爲^{シテ}我御魂とは、出雲國造が神賀詞に
大穴持命乃申給久。皇御孫命乃靜坐^ニ幸大倭國申天。已命和魂乎八咫鏡^ヲ取託^テ天とある如く
大御神の御神靈を此御鏡に取託て賜はるのである。凡て御靈と云ふに又用と體との差別あ
り、此大御神の御於^ニて申さば、高天原を知^レて世を照し^テ賜ふは、廣く御靈の用で
ある。此御鏡は其體である。さて其御靈を専ら此御鏡に取り託けて其御體としたまへば、
其用も悉く此御鏡に具り坐ますのである。然らば其用悉く此御鏡に移り坐して高天原に坐
す現御身には御靈は胎らないかと云ふに、凡て神の御靈はいとも靈異なるものであるから
悉く此所にあるとも、彼所にもいささか減することなく、彼所に減らねども此所にも悉く具
りて其體は千萬所に分つといへども、ほどほどに何れにもその用は缺くことはない。さ
れば天照大神の御靈は全此御鏡に坐ますもので貴くも可畏きことである。書紀の一書に天
照大神手持^ニ寶鏡^ヲ授^テ天忍穗耳尊^ニ而祝^フ之曰、吾兒視此寶鏡當猶視吾可與同床共殿以爲齋鏡
復勅天兒屋命太玉命推爾二神亦同侍殿内善爲^ニ防護^トとある。さて上に三種を擧げながら此
には唯其御鏡の御事をのみ如此懇に詔へるにて此御鏡は中にも貴く著明しきものである。

天照大神出
現の傳説に
蘇生の思想

(古事記傳)吾前とは大御神の現御身の大御前のことである。これまでは皇孫命に詔ふ御命で
ある。以下は思金の神の御靈に仰せたまふ事であるが、御孫の命へ詔ふのである。(國史綜
覽編一巻九、二二頁)思金神は前事を取り持てとある。前事は即ち天照大神の御魂の御前の事
で皇孫の御前の事ではない。さて事とは、たゞ祭祀の行事を云ふにはあらず、譬へば朝廷
の政事の如く此大神の御靈の天下の萬事を御思し處分ひをき賜ふ御政を云ふのである。前
とは上にも云へる如く、其神を指して申す言葉で、御靈の御政事と云ふが如きものである。
思金神は天照大神の御靈の御政を取り行ひ賜ふ神である。故に其御鏡に附け副へて降し
賜ふのである。されば同列に擧げたる手力男、石門別二柱の神の御靈實も共に御鏡に附副
へて降し賜ふ神なることが知られる。(古事記傳)

己上列擧したる先人の解釋によると、天照大神の天孫に授け給ひし瓊と鏡は、天照大神
が天石屋に隠れましたる時其出現を祈り奉つた時のものとして傳へられて居る事が判る。
而して天照大神の出現は其蘇生を意味するもので、此蘇生思想のやがて宗教的生命たるべ
きことは、既に一言して置いたのである。されば此鏡は大神の蘇生を祈り奉つた時の鏡其

物であると云ふだけではなく、特に大神の御魂を乗り移して授けられたものであると云ふ傳説は實に此御鏡をして宗教的對象たらしむる所以であらうと思ふ。

かく御鏡の傳説は、天孫降臨に関する所傳の中心である。故に吾人は更に他の方面より御鏡に関する傳説の研究を進めたい。

先づ天照大神が天孫に鏡を授けられたる一般的動機について考察せんとするのである。

肥前國風土記小城郡の條を見るに

鏡渡—廣國押楯天皇之世遣ニ大伴狹手彦ニ至ニ於此村即娉ニ篠原村。弟日姫子ニ成ニ婚容
貌美麗。特ニ絶ニ人間ニ分別之日取鏡與レ婦。婦含レ悲啼。渡ニ粟川。所ニ與之鏡緒絶
沈ニ中因名ニ鏡渡—

とある。廣國押楯天皇は宣化天皇で、欽明天皇の先帝である。即ち此天皇の時代に於て大伴狹手彦が女子と別るゝに臨んで、鏡を與へたといふ傳説は、斯の如き風習が古くから行はれて居た事を語るものであらう。故に天照大神が天孫に鏡を授けられた事の傳説も其背後には離別の際に鏡を與へるといふ一般的風俗が行はれて居つたからではなからうかと考

御鏡を授けられたる一般的動機

離別に與ふて鏡を與ふ

御鏡傳説の特殊性

原史時代民族の鏡に對する觀念

御鏡傳説の起原と古墳墓の時代

古墳より發見された古鏡の研究の必要

へる。

次に吾人は、御鏡に関する傳説其物の特殊性を考察せんとするのであるが、それには先づ原史時代の鏡について一般的概念を知り置くことが必要であらうと信ずる。

我が原史時代の民族が鏡について如何なる觀念を持つて居たかと云ふ事は、我が古墳墓より發掘される鏡の研究によつて略ぼ理解することが出来る。我が古墳墓は既に論じたる如く、我が原史時代に日本民族が殘したる遺蹟である。そこで、御鏡の傳説は古事記、及び日本書紀の記載によれば、神代の初めにありし事である。さて最も古い古墳墓の時代と、此古傳説の起原とが同一時代に屬するや否やは、今日に於て何人も知る能はざる所である。然しながら、我が石器時代に連続して起つた我文化は即ち古墳に殘つて居る文化である。換言すれば我上古の墳墓は、日本民族の殘したる最古の遺物を藏する遺蹟である。故に我が原史時代、即ち古墳墓の築造されたる時代に於て、當時の人民が此御鏡の傳説を如何様に考へつゝ、ありしかを考察せんとするには、必ず古墳墓から發見したる古鏡其物の研究に俟たねばならぬ。

徳川時代の
鏡

南天と迷信

鏡には色々種類がある。丸、角、花形、柄のあるもの、或は無きもの、なか／＼種類に富んで居る。今日吾々が使用する鏡は、悉く硝子製で、主として面を照し、姿を影すのみで、別に深い意味はない。裏にも縁にも別に裝飾といふ程のものはない。然るに、少し前の徳川時代には、もつと深い意義があつた。徳川時代の鏡は、今日尙往々骨董商の店先に轉つて居るが、銅製で其多くは、背面に鳳凰や、鶴龜松竹梅や、南天の模様がある。鶴龜松竹梅や鳳凰の目出度い模様であることは何人も知る所である。南天は其字音が難轉であるから、難を轉する魔力あるものと考へられ、手洗鉢の側に植ゑたり、鏡の裏に其圖を現はすことが行はれて居つたのである即ち南天の圖は一種の軽い迷信から起つて居る。

更に逆つて足利時代、鎌倉時代、平安時代にも、多くは銅鏡が用ひられた。而して此等各時代の鏡が今日發見されるのは、主として鏡が宗教風俗と結び付いた結果であることは大いに注意すべきことである。即ち鏡は此等の時代に供養の爲め書寫したる佛典を土中に埋藏する際、一所に埋めたのである。それが今日に及んで土中から屢々發見されるのである。或は又其昔神社佛閣に奉納したるものも往々にして發見される。然るに奈良朝の鏡は

古墳内發見
の古鏡

もと奈良東大寺の寶藏であつた正倉院内に所藏されて居る以外に於ては非常に稀である。今其理由に論及する餘白を持たないが我が各時代の鏡は當時の技藝を知るべきのみならず宗教風俗を徴すべき貴重なる材料である。さて各時代の鏡を通覽するに徳川時代の鏡と茲に吾人が述べんとする古墳時代の古鏡に現はれたる思想は甚しく支那思想の影響を受けて居るのである。實に一面の鏡と雖も其時代の思想が反影されて居ることがある。

我が古墳から發掘される鏡には、絶対に柄がない。又方形のものもない。皆圓形で、青銅又は白銅製である。其鏡背の中心には、必ず紐を通すべき鈕があつて、それを基點として全面に種々興味深い模様が表はされて居る。其の模様の著しい部分に従つて多くの違つた名稱がある。例へば神像の四體ある鏡を四神鏡と呼び、神像と怪獸のあるを神獸鏡、十二宮の動物が居る鏡を獸帶鏡、龍龍のあるを龍龍鏡、所々に乳の突出せる鏡を乳紋鏡、葡萄の模様のあるを葡萄鏡、又直線と弧線を巧みに組み合せた模様のあるを直弧紋鏡、直弧紋といふは、最近京都帝國大學の濱田文學博士によつて與へられたる名稱である。鏡背には往々銘文がある。其銘文は悉く形式的の吉祥文句であるが、其銘文中に「長宜子孫」と

か、或は「位至三公」などいふ文句のあるものを總稱して長宜子孫鏡とか、或は位至三公鏡などいふ命名法もある。又鏡の周圍に鈴の附着せるものは鈴鏡といふのである。さてかやうなる鏡は、日本で自然に發達したのではなく、全く支那の影響によつて出來たのである。試みに宋の王黼が撰だ博古圖の鏡の部を取つて見よ、又清の馮雲鵬の編輯したる金石索の鏡鑑部を開いて見よ、又近くは支那金石學の大家羅振玉氏の編したる古鏡圖録に載つて居る摺影圖を見よ、此等の圖録には、古來支那で發掘されたる漢代乃至六朝頃の古鏡の圖が蒐めてある。

支那の古書では毛詩、周禮、莊子、韓非子などにも鏡のことが出て居るが、遺物に於ては漢代以前のものあるを知らない。さて、かくの如き圖録を一見すれば何人も我が上古の鏡の支那鏡に類似するの甚しきに一驚を喫するであらう。尙實物について比較研究せば、更に思半に過ぐるものがあるであらう、昨年未歿した京都帝國大學講師富岡謙藏氏は、我が國に於ける唯一の支那鏡研究者で又蒐集家であつた。志ある者は同氏の論文を參考すべきである。蓋し此類似のある決して偶然でないのである。我が古書を案するに、垂仁天皇の

我が古鏡と
支那の古鏡
との類似

上古に於け
る支那の古鏡
輸入

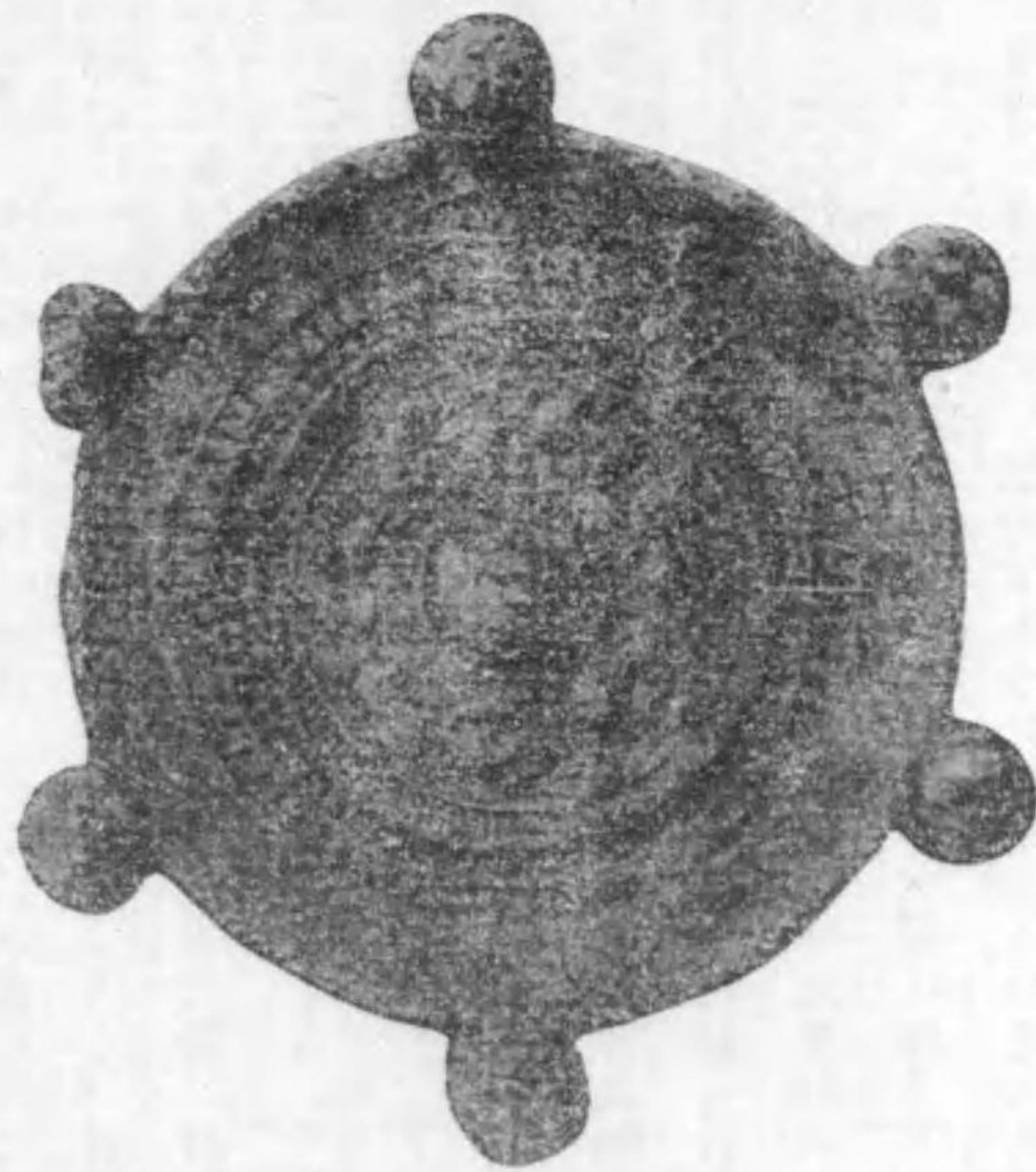
倭人傳

時、新羅の王子、天日槍が我が國に歸化した時に日鏡を持つて來て居る。又神功皇后及び應神天皇の御時にも百濟から鏡を獻じた事が見えて居る。當時朝鮮の文化は、全く支那文化を繼承して居るのであるから、此等の記事は、支那の鏡が朝鮮を経て我國へ傳へられたる事を證するのである。次に支那の文獻について調査するに、魏志の倭人傳を見ると、景初二年六月倭女王に種々の品を贈つた記事がある。其品目の中に銅鏡百枚といふ句がある。魏志は晋の陳壽が編纂したるもので、支那三國時代魏の國の歴史を書いたもので、其倭人傳は、日本に關する事が書いてある。さて陳壽は此時代の人物で、我が應神天皇の頃に相當する時代に書いた歴史であるから、我國の事を書いた最も古い貴重なる史料である。さて我が國へ鏡を贈つたといふ景初二年は、實に我が神功皇后の御時で、今から凡そ千七百年前の事である。かく單に鏡のみについて日支の文獻に徴し又は、遺物を比較研究するも、兩國文化の交渉が當時如何に緊密であつたかが知られるのである。

さて我が古墳から發見される鏡の多くは、今いつた様に漢代（凡そ二千年前）乃至六朝頃（凡そ千四百年前）の支那鏡と全く相類して居るが、唯鈴鏡と直弧紋鏡は未だ嘗て支那か

ら発見されたることが無いのである。此等は恐らく日本國有の形式と模様が施されたものであらうと考へらる。其他の鏡は、悉く支那に類品がある。故富岡氏の年號銘ある支那鏡の研究によると王莽始

第六 鏡
(分二寸三徑製銅青) 鏡 六
掘發町山金郡奥伊城磐



東 京 帝 室 博 物 館 藏

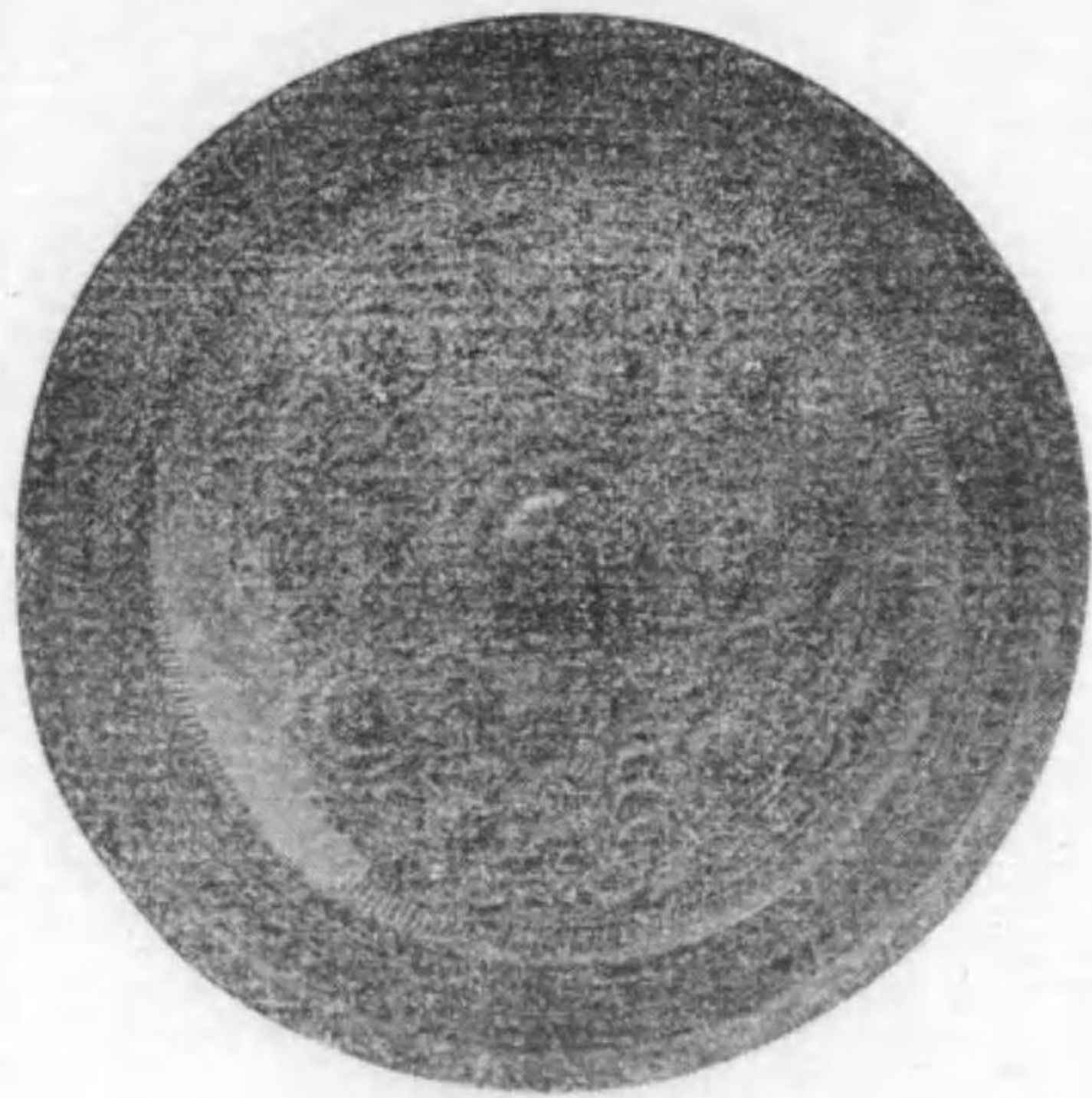
建國二年(西曆一〇)の銘あるものが最も古い。此鏡と同形式ものが我國からも時々発見される。要するに我が上古の鏡は支那から輸入され、或は我が國で模鑄されたるものが多いのであるが、最も多く発見される鏡は、

支那に類品が古鏡我が

神獸鏡の形式其一

神獸鏡

第二 五 鏡 獸 神
(分九寸六徑製銅青) 一 其 鏡 獸 神
掘發崎金字町井櫻郡城磯國和大



格 中 天 王 日 月 銘 文 あり
東 京 帝 室 博 物 館 藏

神像と怪獸のあるもので神獸鏡と稱せられて居る。此神獸鏡の時代については多少異説もあるが、漢代乃至六朝時代に行はれたるものと考へられる。故に吾人は此神獸鏡の模様と其銘文に現はれたる宗教思想を研究せんとするのである。神獸鏡以外の鏡にも種々なる思想が含まれて居るであらう

が神獸鏡の如く宗教的標象に富めるものはないのである。今其の代表的二三の神獸鏡について研究を進める。

第五章 天孫降臨の傳説と皇祖崇拜の意義

第二十五圖に示せるは大和國磯城郡金崎村で發掘した鏡であるが、其二體の神像は、何れも冠を着け、肩から蕨狀の線が三本宛出てゝ居る。之は翼の積りであらう。神像に接し

第二十六圖 神鏡其二 (青銅製徑六寸七分)
近江國栗太郡織部村大南字大村田湖郡太栗近江



銘曰新出師出洛陽 彫文影 剛三律幽 配德君子 清而且明 銅出徐州 孫子宜 藏館物博室帝京東

て幅が樹つて居る。又幅の側には小人物が立つて居る。神像の兩間には怪獸が一疋づゝ居る。一方の怪獸には二本の角があり、他の方には其が無い。何れも大口を開き眼を怒らして居る。此模様の外廓には「天王日月」の文字が鑄出してある。

近江國栗太郡織部で發

掘されたる白銅製の神獸鏡にある怪獸は、屈曲せる鐵棒の様なもので阻止せられ、其に喰い付いて居るやうに見える。

近江國野州郡宮波村で發掘した、鏡に現はれて居る神像は、二體並んで居る。一方は冠を戴き、他方は鬚を結つて居る。之は男女を現はしたものと思はれる。怪獸は大口を三角形に開いて牙を露出して居るが、金棒の様なものはない、怪獸の横に虎といふ字がある。これは余程珍である。此模様の外周にある銘文は、「陳氏作鏡、甚大好、上有□、守□□□身有文章□銜□、古有聖人王□父母、渴飲玉泉、飢食菓」とある。

近江國栗太郡織部村の古墳から出た鏡の神像にも男女の區別が示されて居る。又此鏡の銘文は「新作明鏡、幽律三剛、配德君子、清且明、銅出徐州、師出洛陽、彫文刻鏤、皆作文章 取者大吉 宜于子孫」とある。(第二十六圖参照)

第二十七圖に示せる大和國北葛城郡佐味田字貝吹で發掘したる神獸鏡には、珍らしくも、蓬萊山の圖がある。それは龜の背中に蓬萊山が乗つて居る圖で、山の兩側に魚が居る。此魚は水を聯想せしむる爲めであらう。龜が海中で蓬萊山を背負つて居ることは列子にも出

來蓬萊鏡の由

て居るが、蓬萊は元來支那人が欲望の理想境を夢想した仙島である。前漢の武帝なども蓬萊の仙人安期生を見て丹砂を黄金に化して不死を得んとしたる話もある。要するに蓬萊は財寶と長壽の理想境である。支那の道教はかやうなる我利一點張りの思想から發達した宗教である。此道教思想は古くから佛教にも取り入れられたのであるが、吾々は此鏡によつて蓬萊に關する思想が我原史時代に於て既に我國へ輸入されたことを知るのである。

第二十八圖は故富岡氏が大金を投じて支那から求めたる神獸鏡の珍品であるが、其神獸は全く我が神獸鏡のそれと同一なることが観取されるのである。

已上述べたる所の神獸鏡について注意すべき點を一括していふと、必ず神像が二體以上あること。而して男女の別が認められること。必ず翼があること、又多くの場合幢のあること又神像と相對して怪獸が配されたること。一般にて神像及び怪獸の形が踏襲的であること等であらう。

此種の神像及び怪獸と頗る形式を異にせる神獸を有する他の一種の神獸鏡がある。先づ其代表的の標品について研究をする。

神獸鏡の形
式其ノ二

第二十八圖 支那神獸鏡

青銅製



(故富岡謙蔵氏藏)

第二十九圖は大和國廣瀬郡佐味田村で發掘されたる白銅製の神獸鏡である。其神像の冠の形は前掲の鏡とは全く異つて居る。又其衣服は兩襟の襟に襟がくりぬいてあるが、前の鏡にある神像の衣は左衽若しくは今の西洋服の襟々合した様なものである。次に此神像には翼がないのである。而して神像の兩側には侍者が控へて居る。鈕を隔て、更に一座の神像がある。

此等二體の神像の間には馬車を驅つて居るもの及び之と相對して人物が怪獸に乗れる如きものがある。其銘文は「尙方作鏡佳且好、明而日月世少有、刻治分守悉皆右、長保二親宜孫子、富至三公利古市、傳告後世樂無已」とある。

大和國宇陀郡榛原町で發掘したる同式の神獸鏡は、其二體の神像の中間に龍と虎が居る龍虎と相對して一人の跪坐せる人物が居る。此鏡にも銘帯がある。曰く「□氏作鏡□且明而日月之□□此鏡者□咲□壽而東王公西王母山人子高而松□□二親宜」。

我が古墳から最も多く發見される所謂神獸鏡は、大體に於て前述の如く二種の形式に分つことが出来る。即ち第一の形式に屬する鏡背の神像は、有翼で第二の形式に屬する神像

黄帝蚩尤の
神話

は無翼である。而して有翼の神像と一所に居る怪獣は不明である。次に無翼の神像の両側には大概脇士が居る。而して其動物は龍虎であらう。要するに全體の調子は彼此餘程相違して居る。有翼神像の意義に就ては、此神像と共に往々「日月天皇」又は「天王日月」などいふ銘があるから日月二神を表はしたるものであらうとの説がある。然し「日月天王」の文字は、神像を説明して居るものとは考へられない。何となれば、日月天王の文字ある鏡の圖象と同様のものに色々異なつた銘文が出て來るからである。故に銘文は必ずしも圖象を説明するものではない。従て日月神であらうと推斷することも出來なくなるのである。さて銘文が圖象を説明するに足らぬものとするならば、吾人は其神像に配せられて居る怪獣によつて一應考察する必要があると思ふ。此怪獣は既に説明した様に口を開き牙を露はし、目を怒らして居る。此對照は正しく神像の大慈に對する邪鬼の相ではあるまいか。神像と怪獣が斯くの如き對照にあることは黄帝蚩尤の神話を思はしめるものがある。即ち山海經に「蚩尤作兵犯、黄帝乃令應龍攻之冀州之野、應龍已殺蚩尤又殺夸父乃去南方、處之故南方多雨」云々とある。其他黄帝蚩尤の戰に關する神話は多少殘つて居るが、皆天象に關係

第二九二圖 神一人鏡

青銅製 徑六寸九分

大和國廣瀨郡佐味田村發掘



(東京帝國博物館所藏)

して居る。即ち「常有五色雲氣、蚩尤幻變多方、微風召雨、吹煙噴霧、黃帝師衆大迷、王母乃命九天玄女、授帝以三宮五音陰陽之略」云々等の文句がある。斯の如き神話に神獸鏡の模様を對象して考へると相互に何か關係のある様に思はれる。然し之は臆測に過ぎないのである。支那神話の多くが湮滅に歸したる今日確然たることは知りがたいのであるが、所謂神獸鏡は神話乃至神仙談に關聯して居るものと思ふ。而して其根柢は天體天象に起源して居るものが多い事は疑ふ事は出來ない。此他同時代の鏡背面には青龍、白虎、朱雀玄武或は十二支等の方位に關する動物、又は扶桑木と思はれる様な模様があつて天體天象と關係あることが知られる。斯様な圖象を鏡背に應用することは單に裝飾といふやうな軽い意味でなく、鏡の靈威、靈妙なる功德を表示する目的に出たもので道教思想と深い關係があると思ふ。

要するに支那古鏡の鏡背模様は積極的又は消極的の迷信によつて現世的幸福を得様といふ支那人の俗的信仰を満足せしめんが爲めに對象となりたる神々、又は標象シヨウゾウに關するものである。我が上古の鏡は即ち此思想を支那から傳へたものである。

神獸説の銘
文に現はれ
たる意義

東王父
西王母

聖

已上は主として鏡背の模様に見はれたる宗教的意義を考察したのであるが、其銘文に於ても同一思想が現はれて居る。即ち既に説明したる鏡の銘文について見るも、先づ其鏡の美なるを稱讚し、次いで富貴安樂、長生、子孫繁榮、賢者高顯、取者大吉等の現實的幸福要素を内容とせるものが多いのである。此外神仙談に關する文句、例へば東王父、西王母、不知老、渴飲玉泉、飢食紫雲の如き句あるものも少くない。東王父、西王母の句は古くは漢の靈帝の年中の年號ある漢鏡にもあり。(漢代より六朝に至る年號ある古鏡に就いて—宮田謙蔵—考古學雜誌七卷五)又支那漢代墳墓の石室の壁面に彫刻されたる神像の上にも刻まれて居るのであるが、由來東王父、西王母は、古くから支那の神話に現はれたる神話上の人物である。吾人は更に進んで鏡の形態及び其質に關する支那人の思想を研究せんとするのであるが其圓形について考へて見たい。

支那に璧と稱する玉製の珍寶がある。其形丸くして中央に圓孔又は方形の孔がある。此珍寶は、古來天又は神を拜する時の捧げ物、或は高貴なる贈物として用ひられたのであるが、其形狀について、後漢明帝の時、即ち約千九百年前、支那の歴史家班固が撰集したる漢書白虎通義に璧の丸きは天を象り、孔の方形なるは地を象つたのであると説明して居る。此説明は移して以て鏡の圓形を解くに足ると思ふ。即ち鏡の圓形は天體に象つたものである。

次に鏡の質について支那人は古來好んで下の如き説をなすのである。即ち昔黃帝氏、液金以作神物、於是爲鑑、凡十有五、採陰陽之精、以取乾坤五五之數、故能與日月合其明、與鬼神通其意、以防魘魅、以整疾苦、歷萬斯年而獨常存、今也去古既遠、不可盡攷云々。(宣和博古圖二十八)

又李時珍なども鏡は金水の精なりとも云つて居る。

さて天を象るに圓形を以てし、地を象るに方形を以てするは、東洋哲學者の所謂方圓思想である。而して天は陽にして地は陰である。故に方圓思想は即ち陰陽思想である。又其質について鏡は金水の精なりといふは、五行思想である。よつて考ふるに、鏡の形は陰陽思想を、又其質は五行思想を伴つて居るものである。支那の最も古い典籍の重なるものは書、詩、易の三經であるが、五行思想は既に書經洪範に見はれて居る。さて五行とは、即ち

鏡の金質に
關する支那
人の思想

方圓思想と
陰陽思想と

五行思想

水火木金土の五要素をいふのであるが、陰陽五行説は漢代以後に於て之を奉ずるもの甚だ多く、種々なる現象を解釋するに此思想が適用されて居る。要するに萬有を解釋せんとする支那人の哲學思想である。而して此思想の發達は道教思想に負ふ所が少くないのである。これに類する思想はギリシア及び印度の古代に於ても既に考へられたるもので、タールスの哲學や印度のウパニシヤド哲學にも現はれて居る。蓋し陰陽五行思想が支那より我國へ古く輸入されたることは、甚だ顯著なる事實で、日本書紀にも其卷頭に「古天地未剖陰陽不分」とあるを初めとし至る所に發見されるのである。我が古墳の鏡は更に此より古く具體的に此思想を傳へて居るのである。

最後に吾人は支那古鏡の用法を研究して我が古鏡の性質を知るべき參考となす。即ち古來支那人は鏡の性質及び用法について下の如き考を持って居る。

支那古鏡の用途

時珍曰、鏡乃金水之精内明外暗古鏡如古劍若有神明故能辟邪魅忤惡凡人家居懸太鏡可辟邪魅劉根傳云人思形狀可長生用九寸明鏡照面熟視令自識己身形久則身神不散疾患不入。葛洪抱朴子云萬物之老者其精悉能託人形惑人唯不能易

支那に於て鏡を室内に懸けたる風俗

枕頭の明鏡

道士の明鏡

鏡中眞形故道士入山以明鏡徑九寸以上者背之則邪魅不敢近自見其形必反却走轉鏡對之視有踵者山神無踵者老魅也云々。(本草綱目卷八、古鏡拾遺)

此文中に凡そ人家には、大鏡を懸けて邪魅を辟くべしといへるは、支那に於ける鏡の目的の一面であるが、此と同じ風俗が我が國最古の歌集萬葉集卷五に神龜五年六月二十三日筑前守山上臣憶良が其妻を亡ひたる時の詩序の中に現はれて居る。即ち

何圖僧老遠於要期。獨飛生於半路。蘭室屏風徒張。斷腸之哀彌痛枕頭明鏡空懸。染筠之淚滄落。泉門一掩。無由再見。嗚呼哀哉

とある。枕頭の明鏡空しく懸るといへるは、同じく宗教的意義を以て室内に鏡を懸けたるもので、全く支那風俗の影響であらう。

又晋代の道家、抱朴子が明鏡を持って山に入れば邪魅近づかずといつて居るが、此思想も亦我が國へ傳へられて居る。即ち常陸風土記久慈郡の條に

東山石鏡昔有魑魅。萃集菴見鏡則自去。俗曰。疾鬼面鏡自滅。とある。

已上述べたる所によつて我が上古に於ける鏡の性質及び用途について其一般的概念を得るに十分であらうと信ずる。即ち鏡は面を照す目的の外に、幸福を齎らし、悪鬼を退くべき魔力あるものと考へられ、室内に懸け、或は携帯せしもので、其思想は主として支那の道教に胚胎せることが判つたのである。吾人は今や我が御鏡傳説の特殊性について結論を與ふべき機會に到達したのである。我が原史時代の鏡は其形式に於て斯の如く支那の民間思想が著しく表現されて居るが我が天孫降臨の傳説が全く支那の思想によつて出来上つたものといふのではない。唯我が上古の鏡の形式に於て支那思想と認むべきものが顯著であるといふに過ぎない。天孫に授けられたる鏡其物が果して吾人の今いふ支那鏡の如きものでありしか否かは吾人の到底知る能はざる所たるのみならず、天孫降臨の傳説には此以外我が土俗の民間信仰が織り込まれて居る。天石屋戸前に於ける種々なる所作の如きは即ち我が國在來の宗教風俗であると思ふ。要するに天孫降臨に關する傳説の背景には種々なる宗教思想があるが、其本質的のものは祖先崇拜の思想が太陽崇拜と結び付けられたる所にあると思ふ。天照大神が天孫に御鏡を授け給ひ、此鏡は専ら我御魂として吾が前を拜くが

鏡 菜 蓬 獸 二 神 三 圖 七 二 第

分 一 寸 七 徑 製 銅 青

掘發吹貝字田味佐字大村合河郡城葛北國和大



(列陳館物博室帝京東 藏所寮陵諸)

天照大神の
神格

國祖と最高
神との關係

國家の特徵
と其偉大性

如く伊都岐奉れと詔せられたる此の言葉其物に對する信仰こそ眞に天孫降臨に關する傳説の神髓である。國家的宗教の曙光は實に此信仰にある。又國家的統一思想も此に其根柢があるのである。

天照大神の歴史的人格は、もとより知ることは出来ないが、此傳説には、人格を備へ給ひし大神として傳へられて居る。即ち我が國初に於て吾人の祖先は此傳説を歴史的事實として認識した、隨て天照大神は人格的皇祖として崇拜されたのである。

凡そ國祖を以て其國民の信仰する最高神の子孫であると考へる信仰は、其君主に對する絶大なる尊敬を有するより生ずるものである。國家建設の歴史に於て、相類する形式のあるは人類に通則ある所以にして一國家が眞に國家として偉大なる所以のものは其國家が他の國家と共通的形體を有しながら而かも其間に發達したる獨特なる偉大性を有する點にあるのである。國家の強弱優劣の別るゝは、實に此微妙なる特徴如何にあるのである。されば我が國家成立の形式が他の國家建設の場合と類すことのあるも、決して我國の眞價を貶す所以でない。若し我が國家が他の國家と何等類似の認むべき點の無き程、形式の異つた

ものであるならば、我國家は却て國家として價値のない國家であらう。即ち國家としての畸形兒たらざるを得ない譯である。故に真に我が國家の偉大なる所以は全世界に於ける國家の全體系とは離るべからざる關係にありながら、而かも我國獨特の卓越せる體形と國家的精神を有する點にあらねばならぬ。これを誠に我國體の精華である。

今少しく外國に於ける君主崇拜の起原を考へて見たい。

十六世紀の初葉、メキシコを征服したるコルテス Cortez がメキシコに上陸したる時、アズテック人 Aztecs は彼を以て其太陽神たるクエツァルコトル Quetzalcoatl の再來であると信じた。Primitive Culture—Edward R. Tylor, vol. I, p. 319, 1874. The Secret of the Pacific—C. R. Ennock, p. 97, 1913.)

三度皇帝の冠を辭したる羅馬の大政治家ジュリアス、シーザー Julius Caesar の歴史も太陽神話に掩はれて居るのであるが。(Primitive Culture—E. B. Tylor vol. I, p. 319) 文學博士坂口昂氏は羅馬に於ける皇帝崇拜の事蹟を述べて、羅馬の軍人は現在の皇帝を羅馬の守護神にしてカピトルが岡に鎮り座すジュピテルと同一視し、世々のシーザー(羅馬皇帝の尊稱)をジ

外國に於ける君主崇拜の起原
メキシコ征服者コルテスと太陽神

ジュリアス、シーザーと太陽神

アレキサンダー大王と太陽神

ユピテルの化身と考へた。この崇拜はシーザル、ジュピテル合同の信仰であつて、當時東西統一の羅馬帝國即ち希臘羅馬渾一の社會に於ける官僚的宗教中に於て最も肝要なるものになつたのであると云はれて居る。(古代の宗教界—文學博士坂口昂—無蓋燈二二ノ一)

ギリシヤのアレクサンドル大王は西暦前三三二年イサス Issus の戦にダリユウス二世を亡ぼし、エジプトのメンフィスに乗り込んだのであつたが、彼のエジプトに来るや、救世主として歓迎せられ、シーワ Siwah オアシス Oasis に至りてアメンラー Amen-Ra 寺院に入り、こゝに祀られたる太陽神を禮拜したる時、神は彼が其子たることを承認した。

茲に大王は初めて正當なるエジプトの國王と成たのである。(A Guide to the Egyptian Collected in the British Museum. By E. A. Wallis Budge. 1909. p. 226.)

斯の如き外國の例は、皆有史時代の事であるから、此を以て我が神代の事を類推せんとするは、當らざる事も多からうが、君主崇拜の外形に於ては類似せるものがあるのである。

故に天照大神は皇孫崇拜の關係上人格化せられたる所の當時の最大神即ち太陽神ではなからうかといふ想像も起るであらう。然し我が祖先の腦裏には史的人格として信仰された

皇祖崇拜の意義

るものであらねばならぬ此信仰が歴史的事實に基礎を有するか否かは吾人の知らざる所である。此信仰は國家の發達と共に益々強固を加へ、常に我が國家の統一の勢力であると同時に忠君愛國思想の原動力である。此思想が建國の肇より一貫して今日に至り、彌々邦家の隆盛を見るは、萬國に比類なき所、眞に日本帝國臣民の誇である。

第六章 原史時代に於ける國事と宗教

第一節 神武天皇時代に於ける國事と宗教

事は幽遠の昔であるが日向の高千穂峯に天降りましたる天孫瓊杵尊、此地は韓國に向ひ貫通る笠沙の碕にして朝日の直刺國、夕日の日照國、こゝぞ甚吉地であると宣ひて、底津石根に宮柱布斗斯理、高天原に、水椽多迦斯理て大宮を定め給ふたのである、かくて此地に三代を經過し給ひしが、此地は西陲の地東方の遠國未だ王澤に霑はなかつたのである。

神武天皇の
東征

されば神武天皇、慨然、天業を恢弘せんとして諸皇子等と議し給ひ、遂に親ら諸皇子及び舟師を帥めて東征されたのである。

日の神の威

當時櫛玉鏡速日命は既に倭國にありて土酋長髓彦の奉ずる所となり、其他の諸虜また所在に割據して、何等の統一もなかつた。是に於て天皇先づ此地を平定して都を奠め、皇基を樹てんとなし給ふた。然るに長髓彦兵を起して拒み戦ひ、其の爲めに五瀬命流矢に中て薨じ、皇師進み戦ふこと能はず、天皇之を憂ひ、神策を運らして宣はく、今我はこれ日神の子孫にして日に向つて虜を征つ、これ天道に逆ふ所以である。されば退いて神祇を禮祭ひ、背に日神の威を負ひて進み戦はば、敵自から亡びんと。衆即ち之に和す。

かくて熊野に赴く途中海上卒かに暴風起り皇舟漂蕩、時に稻飯命歎きて、嗟乎吾が祖は即ち天神、母は即ち海神である、如何ぞ我を陸に厄め、また我を海に厄むやといひ詠るや、劍を抜き、海に入りて鋤持神となる。三毛入野命もまた恨みて「我が母及び姨は並に是れ海神である、何爲ぞ波瀾を起して灌溺すやと云ひて浪秀を蹈んで常世郷に往く。

かく重なる災害にも屈せず、天皇は皇子手研耳命と共に軍を帥めて進み熊野の荒坂津に至り丹敷戸畔と云ふ者を誅し給ひしが、或神毒氣を吐きて人物咸くに瘁伏したのであつた。これが爲め皇軍また前進することが出来なかつたのである。此時熊野の高倉下といふ

鋤持神

者太刀を齎らして天皇に献した。すると天皇寤めまして長寝しつるかもと詔ひ、次いで毒にあたる士卒等もまた醒め起きたのである。高倉下此太刀の由来を述べていふ。己れの夢に、天照大神、武甕雷神に云つて、夫れ豊葦原の中國は猶ほ喧擾てあり、汝また往きて之を征てと、武甕雷神こたへて、予行かずとも予が平國し劍を下さば即ち國將に自から平ぎなると。天照大神宜はく諾べなりと。時に武甕雷神己れ(高倉下)に告げて、予が劍の號を甌靈といふ、今當に汝の庫の裏に置かんとす、汝宜しく取つて之を天皇に献れと。即ち翌朝彼高倉下は夢中の教に従つて庫を開き見るに、果して落ちたる劍庫の底板に立つ、よつて彼は之を取つて天皇に献上したのであるといふ。

既にして皇師中洲に進まんとするに山中峻絶にして行くべきの路なし。其夜天皇の御夢に天照大神顯はれ給ひ、誨へて宜はく、朕今頭八咫鳥を遣はす。宜しく郷導者となすべしと。果して頭八咫鳥あり、空より翔び降る。天皇即ち宜はく、此鳥の來ること自から祥夢に叶ふ。我が皇祖天照大神基業を助け成さんと欲せるかど。かくて皇軍は遂に倭の菟田に入る事が出来た。

師 靈

頭八咫鳥

咒 詛

水 無 餘

嚴 鏡 を 丹 生 川 に 沈 め し む

然るに國中賊勢頗る盛んである。帝之を惡み給ひ、或夜天皇自ら祈て寝ましたのであつたが、天神又天皇の御夢に顯はれて誨へ給はく、天香山の社中の土を取つて天平鏡、八十枚を造り、又嚴鏡を造りて天神地祇を敬ひ祭り、亦嚴の咒詛をせば虜自ら平伏なむと。是に於て天皇御教の隨を爲さんとし給ふや、弟猾も亦御夢と同じ夢を見て其由を白し、かば、天皇益喜び給ひ、乃ち椎根津彦と弟猾に勅して汝等天香山に到り、潜かに其嶺の土を取り來たれと宣ふたのである。こゝに椎根津彦等神に祈びて賊地を過ぎ、竟に土を獲て還つた。

天皇大いに悦びたまひ此埴を以て八十平鏡及び手抉り造れる八十枚の嚴鏡を持つて丹生川の川上に陟り、之を用ひて天神地祇を祀り給ふた。即ち菟田川の朝原(丹生川上と同所ならむ)にて嚴の咒詛をなし、且つ祈びて宜はく、吾今八十平鏡を以て水を用ひずして飴を造らむ飴成ならば、即ち吾れ必ず鋒刃の威を假らず、居ながらにして天下を平げんと。即ち飴を造り給ふに、飴自からに成る。天皇又祈びて今當に嚴鏡を以て丹生川の川上に沈めしむ。もし魚大小となく悉く酔ひて枝の葉の浮き流るゝが如くならば、必ず此國を

定むることを得ん。若しかくの如くならずば、終に成るところなからんと宣ひて嚴鏡を川に沈めしめ給ひしに、其の口下に向ひ、暫らくして魚皆浮び出でて、天皇の祈ひ給ひし如くなる。

高皇產靈神の親祭

天皇大いに喜び給ひて丹生川の川上の五百箇の眞坂樹を抜にして諸神を祭り給ふたのである。即ち道臣命に敕して宜はく、今高皇產靈尊の爲めに朕親しく顯齋をなさむ。汝を用ひて齋主となし、嚴媛の號を授く。其所置埴鏡を嚴鏡となし、又火の名をば嚴香來雷となし、水の名を嚴罔象女となし、クラヒコ 糧の名をば嚴稻魂女となし、薪の名をば嚴山雷となし、草の名をば嚴の野槌と名けて祭を行ひ給ふた。

大國玉神を祭る

かくて天皇其嚴鏡の糧を嘗め給ひて御軍を勅へて出で給ひたれば、八十梟師、兄磯城、兄猪、長髓彦等皆服従して中國悉く治まりぬ。(日本書紀) 又天日別命を伊勢に遣はして伊勢津彦を國避しめ(亡ぼし)、其大國玉神を崇祭り、荒神を代平しめられた。(伊勢國風土記、倭姫世紀)

かく神を敬ひつゝ、不伏人等を撥ひ平げ給ひて都を畝傍の橿原に定め、神籬を樹て高皇產

八神殿

靈神以下八神を御祭りになつた。(古語拾遺、舊事記) 神祇官八神殿といふは、即ち之を云ふのである。(延喜式) 天太玉命の孫、天富命は天璽の鏡劍及び八咫瓊勾玉を捧げて正殿に安置奉り、天兒屋命の孫、天種子命は壽詞を奏し(舊事記、古語拾遺)、宇摩志麻治命は詔を受けて布都主大神を殿内に齋ひ奉り、又天璽の瑞寶を齋ひ奉りて天皇、皇后の御爲に御魂を崇め鎮めて壽祚を祈り奉つた。(舊事記)

海内の平定と天神の祭祀

天皇の即位四年、詔して我が皇祖の靈天より降臨して朕が躬を光し助け給ひ、今や諸虜已に平ぎ、海内事なくなりぬ。宜しく天神を祭り、大孝を申ふべきである。即ち靈時を大和國宇陀郡鳥見山の山中に建て、皇祖天神を祭り給ふたのである。(日本書紀) 又徧く群神を祭て其恩に答へ給ふた。(古語拾遺)

皇宮と神宮未だ分かれず

天皇既に八咫鏡を奉じて天祖の神靈となし寶劍及び勾瓊と共に殿を同じくし、床を共にして海内に臨馭しました。當時帝と神と未だ遠からず皇宮神宮常に一であつた。故に宮内に齋殿を建て、齋部氏を其職に任じ、國々の調物を納められ、神の物と官物の分別なく天種子命、天富命等専ら神事を掌り、兼て朝政に參し惟神なる道自から行はれたのであ

る。(日本書紀、古語拾遺、舊事紀、神皇正統記)

己上は神武天皇が日向を發し給ひしより都を大和の地に奠め給ひしまでの間に起つた宗教的事件を古書の記載によつて列擧したのであるが、これによるも當時、其宗教思想が如何に人心を支配し、其國事に影響せしかを知るに足るであらう。

今こゝに少しく其内容を分析批判せんとするのである。

先づ第一に日に向て軍を進むるの不利を説き、日を背にして戦はゞ必ず勝つべしとて士氣を鼓舞されたのは、其背影に太陽崇拜のありしことを示して居る。若し當時の人心に太陽崇拜の思想が盛でなかつたならば、其反響は望むべからざる事であつたであらう。

稻飯命が劍を抜いて海に入り、鋤持神となり、三毛野命も亦海波を踏んで常世に渡りましたといふは荒ふる海神ごもを鎮めむとの思想より出でたるもので風波の起るは海神の所爲と信せられたものであらう。

武甕槌神が高倉下に憑り、其平國の劍を降して天皇に授け給ひしといふは、歴史的には或は武器の補給を意味せるものかも知れないが、こは餘りに臆説に走る嫌がある。直接の

神武天皇の御世に於ける太陽崇拜

海神

寶劍と其神

解釋としては宗教的の意義にとらねばならぬと思ふ。即ち寶劍の神靈を崇拜する思想が存在して居つたものと認められる。出雲地方平定の時にも、武甕槌神を降し給ひ、又神武天皇が中國を平定し給ふや可美真手命をして殿内に誦靈を祀らしめ給ふたことなどに徴するも此邊の消息を知るに足るであらう。

誦靈は武甕槌神の作用即ち功績であつて、其靈威ある劍を神格化したるものと解すべきである。即ち誦靈は神靈であつて、平國の劍は其形體である。

皇軍が道を失つた時には、天照大神が頭八咫鳥を遣はして皇軍を導びき給ふたのであつたが、其頭八咫鳥の八咫は八當といふことで、單に大なることの形容に過ぎないのである。古事記の序、又は姓氏録には、單に大鳥とのみある。さて鳥は太陽崇拜と深い關係を持つもので、皇祖天照大神の教を天皇に傳へるといふ傳説は、太陽神話と鳥類神話が結合して起つたものであらうと思ふ。又日中に三足鳥ありといふ支那の古傳もあれば、或は支那思想の影響がないとも限らない。

椎根津彦と弟猾が老人、老嫗に身を變し潜かに敵陣に入つて天香山の土を採り來つて祭

頭八咫鳥と鳥類神話の關係

器を造らしめられたことには如何なる意義が含まれて居るか、甚だ不明であるが、察するにこれは、魔術的宗教思想より起つたもので、敵陣に深く入り特に其神聖なる地域の土を採り來ることの成ると、成らざるとは勝敗を卜知すべき一手段として考へられたものであらう。こは彼等二人に對する天皇の詔に、汝等を以て基業の成否を占ふとあるによつて知ることが出来る。

次に又此土を以て造られたる八十平瓮を用ひ、水無くして飴を造り、或は又嚴瓮を丹生川に沈めしめられたることも皆魔術的宗教思想より生じたる行爲で、神意を知るが爲めの手段であつたのである。

さてすべての事が天皇の御祈の如くに成つたといふは、やがて神助の皇軍と共にありしことを士卒の間に確信せしむる結果を生ずるのであるから、皇軍の士氣が鼓舞されたるは勿論であらう。されば天皇大いに喜び給ひて眞坂樹を抜にして諸神を祭り給ひ、又此と同時に道臣命を齋主として高皇産靈神を親祭されたのである。

かくて御軍を進め給ひしに、果して中國悉く平定した。是に於て天皇大和の橿原に都を

奠め、高皇産靈神以下の八神を祭り、三種の神器を殿内に安置し給ふたのである。

最後に即位の四年に至り、新に詔して靈時を鳥見山中に建て、皇祖天神を祭り大孝を申べ給ふたとあるは、皇祖崇拜が最も重んぜられた所以であつて、我が國民の宗教思想と當時の政治がこの皇祖崇拜によつて統一されたのである。

これと同時に最も注意すべきは皇祖を祀り給ふと共に群神を祭て其恩に答へ給ふたことである。即ち君民同治の大御心を以て建國の大本と成し給ふたのであつた。

第二節 崇神天皇以後佛教渡來前に於ける國家的

祭祀と神道の成立

神武天皇の後、綏靖天皇から開化天皇まで、八代の御事蹟は甚だ不明であるが、崇神天皇の御代は俄かに史實豊富にして我が國體の根本義を研究すべき最重要なる時代である。

崇神天皇夙に天業を経綸せんとして神祇を敬重し給ひ、即位四年に詔して、我が皇祖、諸の天皇等宸極を光臨すことは、御自身の御爲ではなく、人と神とを司牧へて天下を統

禦なし給はん爲めであつたのである。(日本書紀) 又即位六年、詔して磯城、神籬を倭の笠縫邑に立て、天照大神及び天叢雲劍を宮中より遷し奉り、皇女豐登入姫命をして齋き祀らしめられた。(日本書紀) 此と同時に齋部氏をして鏡と劍を模造せしめ殿内に奉安して護身の御璽と爲し給ふた。これ即ち歴世踐祚の日に獻る所の鏡と劍である。(古語拾遺)

是れより先き倭の大國魂神も殿内に祀られて居つたが、此神をも此際淳名城入姫命をして遷し祭らしめられた。(日本書紀) 適、國內疾疫多く、民大半死し、百姓流離す、天皇大いに之を憂ひ、日夜神祇に祈られたのである。

七年更に詔して昔我が皇祖大いに鴻基を啓き、其後聖の業逾、高く、王風轉、盛であつた。然るに今朕が世に當て數々災害あり。これ恐らくは、朝に善政なくして咎を神祇に取れるか。宜しく神龜に卜て災を致せる所由を極むべしと。是に於て天皇、神淺原に幸まして八十萬神に祈り、災害の原因を卜ひ給ふた。時に大物主神、倭迹迹日百襲姫命に神明憑して、天皇何ぞ國の治らざるを憂ひ給ふや、若し我を敬祭らば必ず自ら平きなむと。天皇即ち此神を齋ひ祭り給ふた。然るに何の驗もなかつたので、更に天皇沐浴、齋戒して殿内

大物主神の
祭祀

を淨め祈りて宣はく、冀くはまた夢の裏に教へて神の恩を顯はし給へと。即ち夢に大物主神、天皇に告げて曰く、天皇國の治らざるを憂ひ給ふな。若し吾が兒大田々根子をして吾を祭らしめ給はば、則ち直ちに平がむ。また海外の國も歸伏すべしと。たましく倭迹速神淺茅原目妙姫、大水口宿禰、伊勢麻績君等三人各夢みたる所を奏して曰く大田田根子を神主として大物主神を祭らしめ、又市磯長尾市をして倭大國魂を祭らしめば、天下必ず大いに平かむと。天皇益悦び給ひ、天下に布告して大田々根子を求められたのであつたが茅渟縣陶邑に於て大田々根子を得て之を貢つた。

天皇また神淺茅原に幸まして諸王卿及び八十諸部を會へて大田田根子に問ひて宣はく、汝は誰が子ぞと。答へて曰く、父をば大物主神といひ、母をば活玉依媛といふと。天皇宣はく、朕榮えんとするかも。即ち伊香色男をして神班物者と爲さしめんとして占ひ給ふによし。此と同時に他神を祭らしめんとして占ひ給しによからず。よつて伊香色雄をして祭神の物を造らしめ、大田田根子をして大物主神を祭る神主となされた。又長尾市をして倭大國魂神を祭らしめ、然る後他神を祭ることを卜ひ給ひしに此度は即ちよしと顯はる。

天神、國社、
神地、神戶
を定む

赤楯及び矛
を奉じて神
を祀る

人民の調物
を以て神祇
を祭る

出雲大社の
寶物を徵せ
しむ

即ち別に八十萬群神を祭り、天社、國社及び神地、神戶を定め給ふた。是に於て疫病始めて息み、國內漸くに謐まり、五穀實り、百姓賑ふたのである。(日本書紀)

即位八年高橋邑の人、活日をして大神(大物主神)の掌酒となし、大田田根子をして大神を祭らしめられた。此時天皇神宮に幸ました。活日、天皇に神酒を獻じ、天皇諸大夫と神宮に於て宴をなし、歌を賦し、騶を極め給ふた。

即位九年天皇夢に神人の誨を受け給ひ、赤楯及び赤矛を宇陀の墨坂神に奉り、又黒楯及び黒矛を大坂神に獻じて此等の二神を祭り給ふたのである。(日本書紀、古事記)

即位十年には四方に群臣を遣はし、遠國を平定せしめられ、悉く王化に服せしめられた。是に於て人民を校し、男子の弓弮の調、女子の手末の調を定め、始めて熊鹿皮角及び布等の物を用ひて神祇を祭り給ふた。

即位六十年武諸隅を出雲に遣はして神宮の寶物を徵せしめられた。此神寶は出雲振根が主る所であつたが、彼筑紫國に至りてあらざりしかば、其弟飯入根、皇命を奉じて獻上したのであつた。然るに出雲振根歸り來り、弟に向ひ輕々しく神寶を獻じたるを責め、終に彼

垂仁天皇と
神祇崇拜

を殺した。出雲振根は此罪に坐して誅せられたのである。出雲臣等此事に畏れて大神を祭らなかつた。時に丹波水上人、水香戸邊の小兒の言ふ所異あり、水香戸邊思へらく、これ神の小兒に憑り給ふのであらうと。即ち皇太子に其由を啓せしに皇太子之を天皇に奏せられたれば天皇出雲臣に勅してもとの如く大神を祭らしめられたといふ。(日本書紀)

垂仁天皇亦深く神祇を敬ひ給ひ、即位二十五年、天照大神を豊相入姫命から離しまつりて倭姫命に託け、神地をトせしめられた。爰に倭姫命大神を鎮めさせむ所を求めて菟田の笹幡に行き、更に還つて近江國に入り、東、美濃に廻りて伊勢國に至る。その時天照大神倭姫命に誨へて、是れ神風の伊勢國は常世の浪の重浪歸國、傍國可憐國である。此國に居らんと思ふとおほせられた。故に大神の教に従ひ其祠を伊勢國に建て、齋宮を五十鈴の川上に建つ。是を磯宮と謂ふ。(日本書紀) 是時倭大神、穗積臣の遠祖大木口宿禰に著り、誨へて曰く、太初の時の約束に天照大神は悉くに天原を治らさむ。皇孫尊は専ら葦原中國の八十魂神を治らしむ。吾は即ち大地官を治らすべし。然るに先皇御間城天皇(崇神)は神祇を祭ると雖も、其源根を微細は探り給はず、以粗に枝葉に留め給へり。故に天

皇は短命であつた。この故に今汝御孫尊先皇の不及を悔ひ、慎みて祭り給はば則ち汝尊の壽命ながく、復天下太平なるべしと。時に天皇是言を聞き給ひ、即ち中臣連の祖探湯主に仰せて。誰人を以て大倭大神を祭らしめんやとトへしめられた。即ち淳名城稚姫命トに食ひたれば彼をして大倭大神を祭らしめ、穴磯邑に神地を定めて大市長岬に祠る。然るに彼既に身體弱くして祭ること能はざれば大倭直の祖長尾市宿禰に命じて祭らしめられた。

(日本書記一書)

即位二十七年天皇祠官に命じて兵器を神幣せむとトへしめられたるに吉と顯はる。それ故諸社に弓矢及び横刀を納め、更に神地、神戸を定め、時を以てこれを祭らしめられた。

即位三十九年には皇子五十瓊敷命、劔一千口を作り、石上神宮へ藏さめられた。此後五十瓊敷命に命じて石上神宮の神寶を主らしめらる。(日本書記)

景行天皇の即位三年天皇紀伊國に幸ましてもろ／＼の神祇を祭祀らんとして占ひたまひしに吉らざりしかば、行幸を止め給ひ、屋主忍男武雄心命を遣はして祭らしめられた。即ち彼は何備柏原に居て神祇を祭祀り、此所に停住すること九間年に及びしと

景行天皇と神祇

いふ。(日本書記)

即位十二年天皇親しく兵を筑紫の野に進め、土蜘蛛を討たんとして柏峽大野に宿り、先づ此地にありし大石に祈りて宣はく、朕土蜘蛛を滅ぼし得んとならば、此石を蹶むに柏葉の如く擧かれと。かくて其石を蹶み給ひしに、其の如く大虚に上る。故に其石を蹈石といふ。此時に禱りまつれる神は、即ち志我神、直入物部神、直入中臣神の三神であつた。又天皇城原に至り水上にてトひて後兵を勸へ、敵を征め打援といふ土蜘蛛を破り給ふたのである。(日本書記)

景行天皇と日本武尊

志我神直入物部神直入中臣神

即位二十年五百野皇女を遣はして天照大神を祭らしめられた。(日本書記)
即位四十年天皇、日本武尊を遣はして東妹を征せんとして宣はく、今朕汝の人爲を察するに、身體長大、容姿端正、力能く鼎を扛ぐ、猛きこと雷電の如く、向ふ所敵なく、攻むれば必ず勝つ、即ち知る、形は則ち我が子なるも實は神人である。是れ寔に天、朕が不叙、且つ國の太平ならざるを感み給ひて天業を経綸して宗廟を絶たさらしめ給ふのであらうと。皇子勅命に答へて、嘗て西を征したる時は、皇靈之威により、三尺劔を提て熊襲國を

撃ち、未だ浹辰も經ずして賊首罪に伏す。今亦神祇の靈に頼り、天皇の威を借りて往いて其境に臨み示すに徳教を以てせん。而して尙服せざるものあらば、兵を擧げて撃つべしと。是に於て皇子日本武尊は伊勢に寄り、伊勢神宮を拜し、倭姫命より草薙劔を受けて發し給ふた。即ち山川を跋渉して東國を悉く平定せられたのである。然るに凱旋に及び、病を得て薨じ給ふ。(日本書記)

仲哀天皇

天照大神の荒御魂に祈りて熊襲を平ぐ

釣魚によつて神意を占ふ

仲哀天皇の九年、天皇崩御の後、神功皇后、群臣及び百寮に命じて天皇の罪過を赦ひ清めしめ、更に齋宮を小山田邑に造り、皇后親から吉日を選んで齋宮に入り神風伊勢國に坐す撞賢木殿之御魂天疎向津媛命(天照大神の荒御魂)、表筒男、中筒男、底筒男を神教のまゝに祭り、而して後吉備臣祖鴨別を遣はして熊襲國を撃たしめ給ひたるに直ちに服ひぬ。(日本書記)

皇后は又肥前國松浦郡玉嶋里小河の側に至り、河中の石上に登り釣を投じ祈ひて宣はく、朕西方に財寶の國を求めんと希ふ。若し事成ることあらば、河の魚釣を食へと。かくて竿を擧げ給ひたるに細鱗魚を獲給ふた。

神田を定む

海水に髪を滌ぎて神意を求む

既にして皇后神の教のあることを識しめして更に神祇を祭祀り躬ら西を征せんとして神田を定め、更に其灌漑の便を計り給ふた。

皇后また榎日浦に詣りまして髪を解き海に臨んで宣はく、吾れ神祇の教を被り皇祖の靈を頼み、滄海を渡つて三韓を征せんと欲す。故に今頭を海水に滌ぐ、若し驗あらば髪自から分れて二となれと。即ち海に入りて洗ぎ給ひたるに果してその如くなる。よつて軍を興し、軍卒を集めしめられた。然るに意の如く集らないので其原因を占はしめられたるに、大三輪神の祟りであるとの神告を得給ふた。そこで又大三輪社を建て、刀矛を奉り給ひたるに軍勢自ら聚まる。是に於て皇后荒魂を携て軍の先鋒となし、和魂を請て王船の鎮めとなして、發し給ふた。(釋日本記所引筑前國風土記)

既にして其國平らぎ住吉大神の荒魂を其地に祀り鎮國の神となし。(古事記) 又凱旋に及んで穴門の山田邑に祠を立て、表筒男、中筒男、底筒男の三神の荒魂を祭る。翌年神教に従ひ天照大神の荒魂を廣田國に祀り葉山媛をして祭らしめ、稚日女神を活田長峽國に於て海上五十狹茅をして祭らしめ、又事代主神を長田國に於て長媛をして祭らしめられた。住吉の

隱中
天皇
神祇

三神の和魂を大津滯中倉の長峽に祭らしめられたのであつた。

履中天皇の即位五年、天皇、神の祟を治めずして皇妃を亡ひたるを悔ひ給ひ、更に其咎を求められたるに、或者曰く、車持君筑紫國に行きて車持部を悉に校り、又充神者を取れり。必ずこの罪であらうと。天皇即ち車持君を喚び之を推問し給ひしに果して事實であつた。天皇彼の罪を數へて曰く、汝車持君たりと雖も、縦に天子の百姓を檢校れること、罪一なり。既に神祇に分寄たる車持部を再び奪ひたるは罪二なり。則ち惡解除、善解除を負はせて長渚崎に出て、被ひ禊がしめ筑紫の車持部をもとの如く三神に分り當てられたのである。(日本書記)

惡解除
善解除

顯宗
天皇
神祇

顯宗天皇即位三年春二月阿閉臣事代、命を受け出で、任那に使した。こゝに月神人に著りて我が祖高皇產靈神は天地の鎔造に預り給ひし功あり、宜しく民地を獻して福慶を祈るべしといふ。故に事代還て之を奏す。即ち歌荒操田(歌操田は山脊國葛野郡にあり)を奉り、押見宿彌をして祠に待せしめらる。又日神人に著りて阿閉臣事代にいふ。宜しく我祖高皇產靈神に磐余田を奉るべしと。即ち神の乞はし、まゝに田十四町を獻せられ、對馬下

縣直をして其祠に待らしめられたのであつた。(日本書記)

第三節 神道の成立と國體の完成

神宮
皇居
の未だ
分離せざる
時代

神武天皇都を大和に奠め給ひしより開化天皇に至るまでは、神宮皇居の未だ分離せざる時代、即ち三種神器を正殿に奉安せられたる時代である。我が皇室の基礎は、此間に於て次第に強固を加へたのである。

王化の擴張
皇祖の崇拜

崇神天皇から神功皇后に至るまでは、王化擴張せられ、韓土の征服されたる時代である。此期間に於て特記すべきことは、三種神器中鏡及劍を殿外に遷し、遂に伊勢の五十鈴川の邊に奉安し、こゝを永久鎮座の處となされたることである。従來は専ら帝室の祭祀の如き形にあつたものが、此に全く國家的の祭祀として皇祖の崇拜が、一般國民の信仰の上に建設されたのである。

天孫種族の
諸神と先住
民族の諸神

天孫降臨以來崇拜の對象となつた諸神を其由來に従つて大別すると天孫種族の諸神と先住民族の諸神との二に區別することが出来るが、出雲系統の神は恐らくは先住民族の神々

の中で最も有力であつたこと、信する。

吾人は既に神武天皇が皇國の基礎を造り給ふに當て皇祖の崇拜に最も意を注ぎ給ひしと同時に、民間の信仰によく共鳴し給ひて平定の實を擧げ給ひしことを論述したものであるが、此方針は世々益々顯著になつたのである。

崇神或天皇以後に於て天照大神の祭祀は益々重大なる意義を加へたのである。即ち崇神天皇は既にいへる如く、倭の笠縫邑に磯城、神籬を建て、天照大神及び天叢雲劍を宮中より遷し奉り給ひ、垂仁天皇は天照大神を永遠に奉祀すべき地を伊勢國五十鈴の川上に求めて、ここに伊勢大神宮を創造されたのである。神功皇后が三韓を征せんとし給ふや又天照大神の荒魂に祈り給ふた。神功皇后又熊襲を平げんとして住吉神即ち表筒男、中筒男、及び底筒男の三神へ願をかけて其冥助を求め給ひたるも又重大なる祭祀であつた。

顯宗天皇が高皇產靈神を祭り給ひしことも注意すべき祭祀である。

さて天照大神以下天孫種族の諸神の多くが積極の場合に祭られて居ることは大いに注意すべきことと思ふ。故に吾人は天孫種族の諸神の祭祀を建設的祭祀と云はんと欲す。此

崇神天皇以後に於ける天照大神の祭祀

建設的祭祀と消極的祭祀

と同時に又深く注意すべきは、出雲系統の諸神の中殊に大物主神が、之と反對に、常に消極の場合に祭られて居ることである。即ち崇神天皇の御世に疫病流行災害頻々たりし時神龜に卜へて大物主神を祭り給ひて漸くに其災害を除き給ひたる如き、又垂仁天皇は天下を太平ならしむる爲めに倭大神を祭るべしとの神誨を受けて此神を祭り給ひたるが如き又神功皇后が三韓の征服に際し大三輪神の崇りが原因となりて軍勢が意の如く集らざりし時に此神を祭つて容易に軍卒を聚められたといふが如きは、總て注目すべき記事である。要するに前節記載の古記を讀熟吟味すれば、國家の大なる災害を通じて大物主神即ち大三輪神の崇りが原因をなして居ることが判るのである。因て此神に幣を奉り和解的の祭祀を行ひて常に其國家的不幸が除かれて居る。故に吾人は此出雲系統の諸神、就中大物主神の祭祀は、天照大神の積極的なるに對して消極的の祭祀と呼ばんとするのである。

崇神天皇の九年に宇陀の墨坂神及び大坂神を祭り、又景行天皇は紀伊國に使を遣はして神祇を祀らしめられた。此等の諸神の性質及び其各自の目的は不明であるが、恐らくは其地方に於ける土俗の神々で、其地の平定と關係して祀られたる所謂先住民族の神々であら

うと思ふ。

斯く見れば、我が國家の建設に當て諸神の祭祀が一般の行政と關係する所如何に重大なりしか、理解されたること、信ずる。かくて我が國體と神道は、此間に其成立を完成したのである。蓋し我が國體の完成は神道の成立したる時と同時に出来上つたものであることは、吾人の信じて未だ疑はざる所である。更に換言すれば、神道の成立したる時代は、我が國固有の民族即ち日本民族が構成され、信仰上にも又政治上にも統一ある組織が出来たる時代である。

日本固有民族の創造

さて神武天皇の御代は未だ斯の如き統一が出来て居つたとは信じられない。然らば斯の如き統一は如何なる過程を経て何れの時代に来たのであらうか。此問題を決するには我が國固有民族が創造されたる過程を研究し、然る後信仰上の統一と政治上の統一の完成されたる有様を考察して、其間に神道成立の由來と國體の本質を考ふべきであらうと思ふ。吾人は先ん天孫民族の渡來したる前に於ける此國土の住民については既に稍、詳しく論じたのであるが、天孫民族が渡來して彼等と同化融合するや、先づ血族的關係を以て始つ

天孫と國津神の女の血族的關係

て居る。恐れ大いことであるが、我が皇室の御先祖と坐す天孫瓊々杵尊の日向に降臨しましたる時に、其地の國津神である大山祇神の女、木花開耶姫を后妃となされたのである。又彦火火出見尊、鸕鷀草葺不合尊なども國津神の女を妃となされたと傳へられて居る。斯の如く、皇祖皇宗の御上に於て既に血族的同化融合が行はれて居るのであるから、一般民衆の上には、盛んに此生理的同化が行はれたのであらう。

氏族制度と民族同化の關係

次に吾人は當時の氏族制度が民族の同化作用に如何なる影響を及ぼしたるかを注意せねばならぬ。さて氏族制度に於ては屢、氏族の系統が正されたのである。

時代は餘程降つて佛教渡來以後に屬するが、弘仁六年即ち今より千五百年前、嵯峨天皇の時、萬多親王以下六名に勅して當時に於ける帝國臣民の系統を正して之を總録せしめられたのである。其記録が即ち今日傳へられて居る新撰姓氏錄である。

新撰姓氏錄

此新撰姓氏錄には、當時の國民を三に區別して擧げて居る。即ち皇別、神別、及び諸蕃である。皇別は歷代天皇の諸皇子より分れ出でたる諸氏である。次に神別といふは、天神、天孫及び地祇の後裔諸氏である。第三に諸蕃といふは大漢、三韓の族で歸化せし諸氏である。

諸蕃は即ち新附の民で、未だ十分同化融合されざるものであつたと思はれるが、神別内の區別即ち天神、天孫、地祇の區別は、事實上、人種的の區別ではなく、寧ろ家柄の區別と見るべきものであらう。例へば天神と天孫の區別は天照大神の直系と傍系の相違あるのみである。然しながら之と雖も當時に於ける人種上の相異の實状を示すものとしては非常に薄弱なるもので、單に其由來を示すべき痕跡 Rudimentary trace であらうと思ふ。

ルディメンタリー、ツレースといふは、其初めは實際用をなしたるものなるが、其用の無くなつた後にも其形跡を留めて居るものを云ふのである。然し此場合に於ては、此區別が全く無用の區別であるのではない。唯吾人は此區別が當時に於ける民族同化の程度を示すべき區別として何等信頼するに足るべきものではないが、他の意義に於て必要があつたのである。

氏族の系統を正されたことは、此より先既に允恭天皇の時にも行はれたのである。其時の詔に群郷百寮及び諸國造等皆各言く、或は帝皇の裔、或は異しくして天降りり、然れども三才顯かれてより以來、多く萬歳を歴ぬ。是を以て一氏蕃息、更に萬姓となり、其實

知り難し。故に諸の氏族の人等沐浴齋戒、各盟神探湯を爲せ云々とある。

然るに此とは又正反對に既に混亂したる氏族を其儘、願に任かせて聽許されたることもある。即ち

天平勝寶九年高麗、百濟、新羅人等、久慕聖化來附我俗志願給姓。悉聽許之。其戶籍記。无姓及族字。於理不穩。宜爲改正。(續日本紀卷二〇、天平寶字元年)

とある。斯の如き方針に基き、當時大伴、爲奈部、六人部などいふ天神、天孫の貴き氏々を蕃人の裔等に許し賜ふたのである。故に新撰姓氏錄の編者は其序文に於て下の如く云つて居る。

勝寶年中特に恩旨あり、諸蕃の裔等が願ふまに、姓氏を賜ひし故に前よりありし姓と後に蕃種に賜へる姓と文字同じきありて皇國人の末と蕃人の裔との氏族に相紛れ疑ふべき事出来たり。

斯く古來氏族の系統は時々正されて居が、其一面に於ては如何に民族の同化融合が行はれたりしかを反證するものである。

我が上古の政治組織は云ふまでもなく、氏族制度であるが、元來此制度は神代から皇室を中心として各氏族が世襲の職を以て帝室に仕へたる歴史を持つて居る。故に其氏族が亂されたる時は人民の生活状態が攪亂されるのである。それであるから此を正さなければ人民を安堵せしむることが出来ない。故に允恭天皇の詔にも斯様な必要のあつた事が述べられて居る。即ち

上古の治、人民得所。姓名勿錯。今朕踐祚於茲四年矣。上下相爭、百姓不安、或誤失已姓、或故認高氏、其不至於治者、蓋由是也（日本書記）

要するに氏族制度は當時の經濟組織である。故に經濟組織を破壊せんとすれば、自から、そこに利益の衝突が起るのであるから、氏族の系統を修正することは結局經濟組織の修正に過ぎざりしものと思ふ。されば民族の生理的の同化には別に甚しい障害であつたとは思へない。のみならず、吾人の考へでは、此制度ありしが爲め、却て眞の同化融合が行はれたものと信ずる。今假りに此制度のなかつた場合を假定して逆に考へて見ると、其同化作用は等しく行はれたであらう。然しながら皇室を中心としたる民族の同化は望まれなかつ

たであらうと思ふ。如何となれば、區別があるから其所に特殊の權利榮譽及び幸福の觀念があり、而して其區別を作る所の障壁が絶対に排他的でなく、よく同化し得るものは此環内に編入することを拒まないといふ方針である時には、其同化を願ふべきは自然の人情であらう。

次に吾人は我が統治權の主體に坐す天皇に對する信仰を中心として我が國家思想の建設されたる過程、即ち我が國に於ける國家的信仰の統一と、政治上の統一の出來た過程を考へて見たい。

我が祖神の祭祀に二の系統ありしこと、即ち天神に對しては主として積極的の祭祀が行はれ、地祇に對しては消極的の祭祀の行はれしことは、既に述べたる所であるが、天神地祇に對するかやうなる差別的觀念は一方賢明なる大御心によつて地祇の祭祀が天神の祭祀と共に重んぜられ、又他の一方では民族の同化融合が完成さるるにつれて、天神、地祇何れも同じく彼等の祖先であつて分離すべからざる國家の守護神となつたのである。

かくて垂仁天皇の御世には神地を伊勢の五十鈴川の川上にトへて天照大神の永久に鎮座